英雄機ドランノーガ

小狗丸

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

惑星イクスにはかつて高度に発達した文明があった。しかしその文明はモンスターとの戦いをきっかけに滅び「前文明」と呼ばれるようになる。

前文明が滅んでから数百年後、フランメ王国の辺境の青年サイは前文明の遺跡は発見する。前文明の遺跡で彼はホムンクルスの少女ピオンと出会うと同時に、惑星イクス最強の兵器「ゴーレムトルーパー」を手にいれる。

その時からサイの力、富、名声、そして美女の全てを手にする「英雄」への道が開かれた。

これは後の世に「惑星イクスで彼の名前を知らない者はいない」と言われる程の英雄となる一人の男の物語。

カクヨムでも連載しています。

目次

惑星イクス　1
故郷への帰り道　4
三年ぶりの実家　7
アイリーンという幼馴染み　10
倉庫の秘密　14
ホムンクルスの少女　18
青年と少女の予想　21
巨万の財を生む宝　26
ゴーレムトルーパー　31
道具としての本能　35
ホムンクルスの役目　39
暴走？　42
復活？　45
自己進化機能　48
驚くピオンにサイ　52
ドランノーガ　55
平原の戦い（1）　58
平原の戦い（2）　61
ピオンの目標　65
訓練開始　69
いつの間にか……　72
辛かった思い出　76
王都の二人　80
二度目の搭乗　85

一歩前進 88
現在製造中 91
勝ち組？ 94
飛行訓練 98
地上の異変 102
炎、後に竜騎士 105
戦闘開始前に…… 109
戦闘開始 112
サイの決断 115
常識からかけ離れた機体 117
主砲発射 120
重大な事実 123
登場人物紹介（1） 127
機体解説（1） 130
ビアンカとの会話 133
未来予知 137
一つしかない選択肢 140
王都での噂話 143
激動の半月 146
最悪のスタート 150
砲兵科入学 153
図書館での出会い 156
呼び出し 160
夜空の会話 164
新たな三人のホムンクルス 167

三人の名前 171
サイの選択 174
朝の名物 178
実験 182
図書館での会話 187
剣術訓練 190
同類 194
エレナの噂 198
挨拶 201
お断りします 204
エレナ・キャンダルという女 208
二人の国主（1） 212
二人の国主（2） 215
二人の少女と国王の会話（1） 219
二人の少女と国王の会話（2） 223
黒竜盗賊団 227
平原までの道中 231
夜営地での夜 234
名乗りを上げる男 238
その男の実力 241

惑星イクス

「マスター」
「ん？」
若い女性の声に呼び掛けられて一人の男が後ろを振り返る。
マスターと呼ばれた男はまだ二十にもなっていない十代の青年だった。
髪の色は黒で瞳の色は青。中肉中背で左目が髪で隠れている地味な顔立ち。しかし着ている服は上級の将官しか着ることが許されない立派な軍服という、ちぐはぐな印象の外見をしていた。
そんな青年の目の前にいるのは、青年と似たような軍服で身を包んだ一人の少女。
少女は青年とは逆に非常に整った顔立ちをしており、顔立ち以外にも鮮やかな赤紫の髪、小柄だが黄金比がとれた肢体、そして軍服の上からでも分かる豊かな胸元と非常に魅力的な外見をしている。
「どうしたんだ？」
「どうしたんだ？　じゃありませんよ。『彼女』達から連絡がありました。もうあちらにいる方々の準備はできたそうです。後はマスターが『開戦の合図』を出すだけです」
「そうか。……」
青年の言葉に少女は僅かに呆れた様な顔を見せてから言うと、それを聞いた青年は返事をしてから何かを考えるように空を見上げた。
「？　どうしましたか、マスター？」
「いや……。俺が王国の精鋭を率いてモンスター退治の指揮を取っているなんて今更ながら夢のようだと思ってな……」
青年はこの地にいるモンスターの群れを退治する任務の為にこの地に来ていた。
別の場所には青年と同じくモンスター退治の任務を受けた王国の精鋭である兵士達が準備を整えており、その全てが「開戦の合図」、青年がモンスターの群れに先制攻撃をするのに続いて攻撃を開始する予定であった。

「何を言っているのですか、マスター」
空を見上げながら呟く青年に少女が叱るような口調で言う。
「マスターが王国の精鋭を率いるのは当然の事です！　マスターはフランメ王国の英雄なのですから！　ほら、いつまでも無駄話をしていないで行きますよ、マスター」
「うわっ!?　分かったから引っ張るなって」
「マスターが速く歩いてくれるなら引っ張りません。それにこの戦場には『彼女』達だけでなく、あの『お二人』も来ているのですから、格好いいところを見せるチャンスですよ」
「そうだな。確かに婚約者達にはいいところを見せたいよな」
少女は青年の腕を掴むんで進み、青年も返事をしながら少女について行く。
そんな二人の行く先には、竜の背中に人の上半身が生えた鋼鉄の巨像があった。

X　X　X

地球から遠く離れた宇宙の果てに惑星イクスという星がある。
かつて惑星イクスには高度に発達した文明があり、惑星イクスの人類に多くの恩恵を与えていた。
宇宙に築いた居住空間。
ナノマシンの技術を用いた高性能な機械類。
遺伝子調整によって発現した超能力という人類の新たな可能性。
これらの文明の恩恵により惑星イクスの人類は長い間豊かで平和な日々を送っていたのだが、その日々はある日突然終わりを迎えた。
惑星イクスに「モンスター」と呼ばれる凶悪な生物の群れが現れて、惑星イクスの人類に牙をむいたのだ。
惑星イクスの人類は総力をあげてモンスターの群れと戦い、そのほとんどを滅ぼすことに成功したのだが、モンスターとの戦いは苛烈を極めていて人類が負った被害は決して少なくなかった。しかし不幸はこれだけでは終わらず、更なる不幸が惑星イクスの人類に起こった。
モンスターとの戦いの直後に新種の人体に害を与えるウィルスが

発生して惑星イクス全土で猛威を振るったのだ。
モンスターとの戦いで多くの人材や研究施設を失った惑星イクスの人類にはウィルスのワクチンを開発する余力なんてなく、多くの人間がウィルスによって死んでしまう。それによって惑星イクスの人類は文明を維持できないくらいに人口を減らし、かつては別の星まで行ける程繁栄した文明は衰退してしまった。
そして辛うじて生き残った僅かな人々が一から新たな文明を築いてから数百年後。
前の文明とモンスターとの戦いの歴史が「伝説」に、前の文明の技術が「魔法」となって惑星イクスに暮らす人々の中で朧気な存在となった時代。
惑星イクスにある国家の一つ、フランメ王国の辺境の地で後の世に「英雄」として名前を残す一人の男の物語が始まろうとしていた。

故郷への帰り道

「……あれ？」
　サイ・リューランが目を覚ますと目の前には雲一つない晴天が広がっていた。
「ここは？　……ああ、そうか」
　サイが上半身を起こして辺りを見回すとそこは荷馬車の荷台の上で、自分が故郷に帰る途中で親切な行商人の馬車に乗せてもらっていたのを思い出した。
「……夢か」
「よお。起きたかい、ニィちゃん。何か嬉しそうな寝顔だったが、何かいい夢でも見れたのか？」
　サイが先程まで見ていた夢を思い出していると御者席にいる行商人が声をかけてきた。
「ええ、凄くいい夢でしたね。……できればもう一度見たいくらいの」
「へぇ？　どんな夢だったんだ？」
　サイの口ぶりに興味を覚えた行商人が聞く。
「俺が『英雄』と呼ばれる偉い軍人になって、とても可愛い女の子の部下がいて婚約者もいるみたいでした。それで……」
　そこで一度言葉を切ってサイは夢に出た竜の背中に人の上半身が生えた鋼鉄の巨像の姿を思い出す。
「それで？」
「『ゴーレムトルーパー』の操縦士になっていました」
「ははははっ！　なるほどなるほど！　それや、確かにいい夢だ！」
　サイの夢の内容を聞いた行商人が大声で笑う。
　ゴーレムトルーパーとはこの惑星イクスで最強の兵器であり、それを操る操縦士はどの国でも英雄として崇められていて、男の子なら一度はゴーレムトルーパーの操縦士を夢見るものなのである。かくいう行商人も子供の頃にゴーレムトルーパーの操縦士を夢見た経験があった為、しばらくの間面白そうに笑った。
「ははは……！　それでそれで？　ゴーレムトルーパーに乗る英雄様

は一体どこまで行くつもりなんだ？　分かってると思うがこの先には大して大きな街なんてないぞ？」
　しばらく笑っていた行商人に聞かれてサイは一つ頷いて答える。
「はい。故郷のイーノ村に帰るつもりです」
　サイは十五歳の頃、幼馴染みのアイリーンに誘われたのがきっかけで王都にある軍学校に入学した。そして三年の学習期間を終えた今、軍に入隊するまでの一ヶ月の準備期間を使って一度実家に帰る途中であった。
「イーノ村？　……確か、辺境にあるド田舎の村だったか？」
　行商人は記憶を掘り返して確認するかのように聞き返す。行商人の言う通り、イーノ村はフランメ王国の辺境の地にある小さな村で大した特徴は無く、地理に詳しい行商人の中にも知らないと言う者が多い田舎であった。
「ええ。そのド田舎の村ですよ。……本当に、ひいおじいちゃんも何であんな土地を買ったんだか」
「？　土地を、買った？」
　サイが最後に呟いた言葉に行商人が首を傾げ、その様子に気づいたサイが何でも無いように説明する。
「ああ、イーノ村とその周辺って俺のひいおじいちゃんが買った領地なんですよ。俺の家、一応男爵家ですから」
「……!?　りょ、領地！　それに男爵家って！　ニィちゃん、いや、貴方はき、き、貴族なんですかい!?」
　自分の馬車の荷台に乗っている冴えない外見の青年が貴族、男爵家の人間だと知って驚く行商人だが、当の本人であるサイは苦笑いを浮かべる。
「そんな急に敬語なんて使わなくてもいいですよ。言ったでしょ？　一応って。貴族って言っても名ばかりで、ひいおじいちゃんが今の領地を国から買い取ったのがきっかけで爵位をもらっただけ。実際は平民と変わらないんですよ。当主である父さんだって『イーノ村の村長』という権限しかなくて他の村人と同じように畑を耕しているんですから」

「そ、そうなのか？」
意外そうな行商人の声にサイは肩をすくめて答える。
「そうなんですよ。本当に何もない所なんですよ。ウチの領地、と言うかイーノ村は」

三年ぶりの実家

フランメ王国辺境の地、リューラン領唯一の村であるイーノ村はサイが言う通り何も無い村である。

元々この地は無人の未開地であったが、商人であったサイの曾祖父イーノ・リューランが商人を引退する時に何を考えたのか財産のほとんどを使ってこの辺り一帯の土地をフランメ王国から買い取り、それがきっかけでリューラン家は男爵の爵位を与えられて貴族の末席に加わることになった。そしてイーノ・リューランが買い取った領地を開拓していると、そこに故郷に居場所がない農家の三男四男等が集まり、そうしてできたのがイーノ村だった。

イーノ村は総人口が百人少し。目立った特産品はなく、畑で採れた農作物や山や森で獲った獣の毛皮を売って生計を立てている小さな村。

そんな村で一番大きな家（といっても王都の一般住宅より少し大きい程度）がサイの実家であり、そこでサイは三年ぶりに父親と母親、妹のサーシャと対面していた。

「久しぶりだな、サイ」

「本当に。三年ぶりね。立派になったわね」

三年ぶりに会う両親は笑みを浮かべて迎えてくれて、サイもまた両親に向けて笑みを浮かべた。

「ありがとう。父さん、母さん。皆も元気だった？」

「ああ。幸いにも皆、風邪一つひかず……」

「ねー？　それよりもお兄ちゃん、お土産はないの？」

サイと父親の話を遮ってサーシャが口をはさんでくる。

サーシャはサイより二つ年下で、兄と同じ黒髪を肩まで伸ばして少し生意気そうな顔をしており、間延びた声を出す口癖があった。

「ちょっとサーシャ」

「えー？　別にいいじゃん。それでお兄ちゃん？　お土産はないの？」

母親が注意するがサーシャは特に気にした様子もなく、サイは三年

前と全く変わっていない妹の口癖を聞いて苦笑する。
「安心しろよ、サーシャ。お土産ならちゃんと買ってきてあるから。……ほら」
サイはそう言うとサーシャに掌を上に向けた右手を差し出す。すると何も持ってなかったはずのサイの右の掌に髪飾りが現れた。
「あっ！　ありがとうお兄ちゃん！」
「どういたしまして。それで父さんと母さんのお土産はこれね」
喜ぶサーシャに髪飾りを渡したサイは次に両親に向けて両手を差し出す。すると今度は何も持っていない右手に酒の入った酒瓶が、左手にはサーシャに渡したのとは別のデザインの髪飾りが現れる。
「おお、すまないな」
「ありがとうね。サイ」
「んー。やっぱりお兄ちゃんの『異能』って便利だよね。あー、私もお兄ちゃんと同じ異能が欲しかったなー」
お土産を渡されて礼を言う父親と母親を見ながらサーシャが羨ましそうに言う。
異能。
それは惑星イクスの人間ならば五歳から十歳の間に発現する超能力。
遥か昔に滅んだ高度に発達していた前文明が人類に施した遺伝子調整によって一定の年齢になると脳に超能力を発現する器官が生まれ、それによって使えるようになる超能力が異能。使える異能はその人によって異なり、現在の惑星イクスの人々は異能を魔法のような力と認識して使用していた。
そしてサイは生物以外ならどんな物でも自分だけの異空間に収納出来る「倉庫」の異能を使う事が出来た。
「そういえばさー、お兄ちゃん。軍学校はどうだったの？　楽しかったー？」
「軍学校か……。楽しかったというより疲れたな……」
サーシャの言葉にサイは言葉通り疲れた表情となって答え、そんな兄の態度に妹が首を傾げる。

「えー？　そうなの？　疲れたってどんな風に？」
「そうだな……。まず周りと話が合わなかったな。軍学校にいたのは家が貴族だったり親が偉い軍人の学生がほとんどで、俺が名前だけの男爵家だって分かるとあからさまに見下してきていたな」
「あー、確かに貴族の人ってそういう人が多そうだもんねー」
　男爵の爵位を持つ家の娘とはいえ、実際は平民と同じサーシャはサイの言葉に納得して頷く。
「それと俺の異能がな……」
「お兄ちゃんの異能がどうしたの？」
「軍学校では直接的な戦闘力がない異能は役立たず、ていう考えがあってな。俺は自分の異能は便利だと思っているんだけど、軍学校の皆からは役立たず扱いされて、そのせいもあって苛めとかは受けなかったけど三年間周りから使いっぱしり扱いされたよ……」
　軍学校での三年間は異能と家を理由に周囲から見下され、親しい友人もろくにできず、使いっぱしりにされてばかりだった。その時のことを思い出したのかサイが苦笑を浮かべると、そんな兄にサーシャが労るように話しかける。
「んー……。お兄ちゃん、苦労したんだねー……」
「ああ、そうだな……」
　サーシャの言葉にサイは苦笑を濃くして頷いた。

アイリーンという幼馴染み

「あー、そういえばアイリーンさんは？　お兄ちゃんに構ってくれなかったのー？」

サーシャが自分と兄の幼馴染みであるアイリーンの事を思い出して聞く。

アイリーンはサイの同郷の同級生で、更に言えば軍学校に誘った本人であるから普通に考えれば学生期間中に何度でも接触しそうだが、サイはそんな妹の言葉に首を横に振った。

「サーシャ。アイリーンが俺に気を使うと思うか？」

「んー。……ちょっとないかなー？」

サイに聞かれてサーシャは少し考えた後、苦笑して答える。

妹の目から見て兄と幼馴染みの間に友情や愛情といったものはなく（少なくとも幼馴染みの方には）二人の関係を端的に言えば「ガキ大将とその子分」だろう。もちろんガキ大将が幼馴染みで、子分が兄である。

確かにアイリーンはこのイーノ村で生まれ育ったが、彼女の家は祖父の代で没落したかつてのフランメ王国の名門であり、彼女は物心がついた頃から祖父から貴族としての心構えや精神を教えられて育った。そのせいか昔からアイリーンには、村に順応した自分の両親を含めたイーノ村の住民を見下している所があった。

サーシャはそんなアイリーンが同郷の同級生とはいえサイを気にかけるとは思えず、むしろ軍学校の学生と一緒に彼を見下して使いっぱしりにしている光景の方が容易く想像できる。というか軍学校に入学する前のアイリーンは、しょっちゅうサイを連れ回して使いっぱしりにしていたのを覚えている。

「アイリーンは没落したとはいえ立派な貴族だったし、異能も完全な戦闘向けだったからな。あっと言う間に軍学校に馴染んで半年くらいすると同学年にいた王族の学生に気に入られて、そこの家の援助を受けて士官学校に進学するのが決まったよ」

「えー!?　それって凄いじゃない！」

サイの言葉にサーシャが驚いた顔をする。辺境の地から来た没落貴族が王族に気に入られてその援助を受けられるというは充分に大出世と言えた。
「そうだな。だからアイリーンはその王族の側にずっといて、俺の事なんか眼中になかったよ」
軍学校に入学して半年までの間は多少は会話をする事があったが、王族の同級生に気に入られてからはアイリーンは常にその同級生と行動を共にして、サイの事など忘れてしまったかの様に接触を取らなくなった。軍学校を卒業する前日に彼女に話しかけられたが二年と半年ぶりの会話というのが、
『サイ。私はイーノ村に帰らないから私の荷物を実家に届けておいて。貴方の役立たずの異能でもそれぐらいは出来るでしょう?』
である。この言葉とアイリーンの表情からサイは彼女が自分に何の興味を持っていないことを改めて実感させられた。
その事をサイが話すとそれまで黙って兄妹の会話を聞いていた父親が突然怒って叫ぶ。
「ふざけるな！　どこまで人を馬鹿にすれば気がすむんだ！　あの恩知らずの不良娘は！」
「ちょっとお父さん」
怒声を上げる父親を母親がなだめる。
不良娘というのはイーノ村の大人達がアイリーンを影で呼ぶ時の名前だ。彼女は名門の貴族の血を引いている事もあってか外見だけは非常に美しく、若い男にはそれなりに人気があるのだが、サイの父親を始めとする大人達には仕事も村の行事の協力もしない不良娘として嫌われていた。
「サイ、不良娘の家にはもう行ったのか?」
「いや、この後行こうと思っていたけど……」
サイが首を横に振って答えると父親はまだ怒りが収まらないといった表情で言い放つ。
「だったら今の話をあの両親にも聞かせておけ。いいな?」
X　X　X

「「本当にすまなかった」」
　アイリーンの実家にと行き彼女の荷物を届けた後、サイは父親に言われた通りにアイリーンの事を彼女の両親に話すと、両親に揃って頭を下げられた。
「いや、別にいいですよ。気にしないでください」
　サイはそう言うがアイリーンは頭を下げたまま非常に申し訳なさそうな声で言う。
「そう言うわけにもいかない。元はと言えばアイリーンがサイ君を軍学校に誘ったというのに……あの子がそこまで身勝手だとは思わなかった。……本当にすまない」
「俺は気にしてませんよ。確かにアイリーンに誘われたのもありますけど、軍学校に入学する事を決めたのは俺なんですから」
　この言葉は本当である。きっかけはアイリーンに誘われたことであったが「軍人になれば給料が貰えるし、ゴーレムトルーパーを間近で見られるかもしれないし、それに何より出世したら綺麗な女性との出会いがあるかもしれない」といった理由で軍学校の入学を決意したのはサイ自身なのだから。
　そこまで言ってようやくアイリーンの両親は頭を上げてくれたのだが、二人は何故か恐れる様な、すがる様な目をサイに向けていた。
「そ、それでサイ君？　借金の事なんだが……」
「借金？　何の事ですか？」
「ああ、サイ君は知らないのか……。アイリーンの軍学校の学費をサイ君のお父さんから借金しているんだよ」
「え!?　そうなんですか？」
　初めて聞く話にサイが驚いた顔をして聞くと、アイリーンの父親は申し訳なさそうな表情をして答える。
「そうなんだよ。ウチにはとてもではないがアイリーンを三年間、軍学校に通わせてあげられる貯えがなくてね……。実はアイリーンがサイ君を軍学校に誘ったのも私達が原因なんだ。『サイ君を誘う事が出来たら軍学校に入るのを許す』って言ってね。……その、自分の子供も入学したらサイ君のお父さんに借金のお願いもし易いと思って

……」
　徐々に声を小さくしながら話すアイリーンの父親の話を聞いてサイは、「あの」アイリーンが自分を軍学校に誘った理由を理解した。それと同時にここに来る前に自分の父親が彼女を「恩知らず」と罵った理由も理解出来た。
「……その、借金の話はアイリーンは知っているんですか？」
「以前に一度だけ手紙でその事を書いたのだが……。知っていたが無視した、あるいは軍人になってから返せばいいと思っているかもしれないな、あの子のことだから……」
（いや、それ以前に手紙を読んですらいないんじゃないか？）
　寂しそうに言うアイリーンの父親の顔を見ながらサイは心の中で呟いた。軍学校にいたアイリーンは、王族の同級生の側にいる事以外何の関心も持っていなかったから充分にあり得ると思ったが、流石にそれを目の前の二人に言うことはできなかった。
「……とりあえず話は分かりました。さっきも言ったように俺は気にしていませんし、借金の事もすぐに取り立てるのはやめてくれって父さんに言っておきます」
「サイ君、ありがとう。それと本当にすまなかった」
　サイがそう言うとアイリーンの両親はあきらかにほっとした表情をした後、娘の幼馴染に向かってもう一度二人揃って頭を下げた。

倉庫の秘密

「ここに来るのも何年ぶりかな？」

実家に帰ってきた次の日。サイはイーノ村から少し離れた天然の洞窟を利用したリューラン家の倉庫へと来ていた。

サイがこの倉庫へやって来たのは、軍の入隊に向けて何か持っていける物がないか探すためである。

軍に入隊すれば軍服や武器に最低限の生活用品が軍から支給される。しかしそれらは本当に「最低限」でしかなく、それ以外で必要なものは全て自分で用意するしかない。

その為、入隊の際にあらかじめ用意していた生活用品や嗜好品等の備品を軍に持ち込むのは特に禁止されておらず、貴族や軍人の家の出身者が自前の刀剣等を持ち込むという話もある。

「何か使える物があればいいんだけどな。……それにしてもこの鍵って一体何なんだ？」

そう呟いてサイは自分の右手の内にある二本の鍵を見る。

この二本の鍵は昨日父親に渡されたもので、一本は目の前にあるこの倉庫の扉の鍵。そしてもう一本は倉庫の奥にあるという扉を開けるための鍵だそうだ。

父親の話によるとこの倉庫の奥には曾祖父がこの領地を買い取った理由があるらしい。

曾祖父は「この地には巨万の財を生む宝が眠っている。しかし今は宝に価値はない。宝を財に変えるには儂の死後の百年、せめて五十年は待つ必要がある」と言っていたそうだ。しかし祖父も父親も、そんな曾祖父の話をあまり信じておらず今日まで半ば忘れていたのだが、昨日サイが倉庫に行くと聞いた父親が曾祖父の話を思い出して鍵を渡したのだった。

「ひいおじいちゃんがこんな田舎の土地を買った理由、巨万の財を生む宝か……。何だか宝探しみたいだ」

サイは冗談半分に言うと扉を開けて倉庫の中に入った。倉庫の中には灯りがなかったので、あらかじめ用意していたランタンに火を入

れてから倉庫内を調べるが、特に役立ちそうな物は見当たらなかった。
「ロクな物がないな……。それで後はこれか」
一人呟くサイの視線の先にあるのは金属製の頑丈そうな扉。扉の前には立派な錠前が一つ取り付けられていた。
「本当に倉庫の中に扉があるよ。前ここに来たのは子供の頃だったから気づかなかったな。この鍵で錠前を開けたらいいんだよな……て、アレ？」
錠前を手に取って鍵を挿しこもうとするサイであったが、立派に見えた錠前はすでに錆びついて脆くなっており、彼が手に取ると左右の戸を繋ぎ止める棒の部分が崩れてしまった。これにはサイも驚いて思わず壊れた錠前を凝視する。
「うわ……。一体どれだけボロボロなんだよ？　こんなの鍵を持ってきた意味ないじゃないか。……まあ、いいけどさ」
サイ気をとりなおして扉を開くとその奥に進んで行く。扉の先は一本道の通路だったが、しばらく進むと周りの様子が一気に変わった。
最初はここが天然の洞窟を利用した倉庫であるため岩肌の壁に床、天井であったが途中から金属のものになったのだ。
「これは……もしかして前文明の遺跡なのか？」
サイは軍学校での授業で習った知識を思い出す。
遥か昔に滅んでしまった前文明は現在よりも高い技術を持っており、前文明の建物は金属や断面が鏡のように切り揃えられた石材、金属でも石でも木でもない物質で建てられていたという。
三年間王都で暮らしたサイはこんな壁に床、天井が金属で作られた建物など見たことはなく、ここが前文明の遺跡であると確信する。それと同時に曾祖父が言っていた「巨万の財を生む宝」の話が現実味を帯びてきたと思った。
前文明の遺跡は常に各国が探しており、未発見の遺跡を発見して国に報告した者にはその国から褒賞金が与えられて、遺跡の規模によっては遺跡の管理を任せる為に貴族の地位が与えられることもある。

しかしそこまで考えたところでサイの中で一つの疑問が生じた。
「この遺跡の事を国に報せるだけでも大儲けなのに、何でひいおじいちゃんはこの土地を買ってまでここの事を隠したんだ？　……もう少し調べてみるか……痛っ!?」
サイが壁にランタンを持つのとは逆の手を当てて先に進もうとしたところで手に痛みが走った。よく見ると壁の表面に塗装が剥げている箇所があり、そこで手の表面を切って血が出ていた。
「まいったな、血が出てる。……気をつけて進もう」
そう言うとサイは前文明の遺跡を探索すべく再び歩き始めた。
X　X　X
探索を始めて二時間くらい経って分かったが、この前文明の遺跡は輪っか状のかなり大きな建物らしい。通路には決められた間隔で部屋と階段もあるが、全ての部屋の中を調べても何もなく、階段は下にしか続いておらず上に続く階段は見当たらなかった。
下の階に降りてはその階にある部屋を全て調べてまた下の階に降りる。それを何度も繰り返して五階は降りたところでサイは疲れたようにため息を吐いた。
「はぁ、疲れた……。これだけ探しても何も見つからないってどういうことなんだ？　せっかく遺跡を見つけたのにこれじゃあ何の意味もないじゃないか」
愚痴を言いながら次の部屋の扉を開けるサイ。内心で「この部屋も何もないだろうな」と思っていた彼だったが、その部屋は今までのとは違っていた。
「え……？」
部屋の様子を見てサイは思わず呆けた声を出した。
その部屋には人一人が入れそうな円柱形の水槽らしきものが四つ並んでおり、一番奥にある水槽からは淡い光が放たれて部屋の中を照らしていた。
「この部屋は他の部屋とは違うな……。この水槽、一体何が入って……うわぁ!?」
注意深く部屋に入ったサイが光を放っていない三つの水槽の一つ

にランタンを近づけてみると、水槽の中にはミイラのように干からびた人の死体が入っていて、至近距離から見たサイは悲鳴を上げて後ずさった。
「し、死体!? 何で死体が水槽に入っているんだよ? ま、まさかこの中にも?」
サイは光を放っていない水槽を恐る恐る見ると、やはりそこにも干からびた人の死体が入っていた。そして残った最後の一つ、光を放っている水槽の中を見ると、彼は先程の三つの水槽の中を見た時とは別の意味で驚き目を見開いた。
「……お、女の子?」
光を放つ水槽の中には一人の少女が、眠るような表情で水の中に浮かんでいた。

ホムンクルスの少女

美しい。綺麗。可憐。愛らしい。妖艶。

サイの脳裏にそんな言葉の群れが浮かび上がる。それは目の前にいる水槽の中の少女を見た彼の率直な感想であった。

水槽の中の少女は外見の年齢は十代後半くらいであったが、小柄な体格と幼さを残している顔立ちもあって十代前半にも見えた。

顔立ちはまるで作られたかのように整っており、鮮やかな赤紫色の髪も目を引いた。そしてサイより頭一つ低い身体は胴体や四肢の長さが完全な黄金比を保っていて、胸部には彼女の頭部くらいはありそうな大きさの乳房が二つ豊かに実って母性を象徴していた。

そんな「一糸纏わぬ姿」で水槽の中で眠っている少女をしばらく無言で見つめていたサイは……、

「あ、ありがとうございます！」

と、頭を勢い良く下げて水槽の中の少女にお礼を言った。

サイは今日までサーシャとアイリーン以外ろくに女性と話した事がなかった。しかもサーシャは妹だし、アイリーンは命令をするだけでまともな会話をした事なんて数えるくらいしかなく、そんな彼に水槽の中の少女の裸体は少々刺激が強すぎたらしい。

「はっ!?　そ、そうじゃなくてこの子生きているの？　この水槽、どうやったら開くんだ！」

正気に戻ったサイが慌てて少女が入っている水槽に駆け寄ろうとする。その時に彼の手が偶然、水槽の前に設置されていた台座に触れ、それと同時に水槽がうなり声のような駆動音を出す。

「……え？　何だ？」

足を止めるサイの目の前で水槽の中の水が瞬く間になくなっていき、少女の体が水槽の底に力なく降りて水槽のガラスにもたれかかる。そして中の水がなくなると今度は水槽のガラスがゆっくりと上に上がっていき、支えをなくした少女の体が地面に倒れそうになった

ところをサイが慌てて受け止めた。
「危ない！　おい、ちょっと君！　大丈夫？」
「……」
　水槽の中から解放された少女を受け止めたサイは、何度も少女に呼びかけて体を揺すってみる。すると少女はゆっくりと目を開いてそれを見たサイが安堵の息を吐く。
「よかった。目を覚ましたんだね」
「……貴方が、私のマスターですか？」
「マスター？　一体何のこと？」
　無表情のままで言う少女の質問にサイが訳が分からないと首を傾げると、少女はもう一度質問をした。
「……質問を変えます。保存カプセルを解放して私を起動させたのは貴方ですか？」
「保存カプセルってあの水槽のこと？　……それだったら多分、俺だと思う」
　サイがためらいながら質問に答えると、少女は相変わらず無表情で感情が見えない目で彼の顔を見てから一つ頷く。
「そうですか。分かりました」
「分かったって、何……んむっ!?」
「……ん」
　少女に今の言葉の意味を聞こうとしたサイだったが、少女は両手で彼の顔をつかまえると自分の唇をサイの唇に重ねた。
「……!?」
　突然の出来事に驚いたサイは反射的に少女から離れようとするが、少女の手の力は異様に強くて逃げることは許されなかった。そしてサイと少女が唇を重ねてから一分くらいの時間が経つと、ようやく少女はサイを解放する。
「き、君は何を……!?」
「あら？　そんなに怒らないでください。唾液からマスターの遺伝子情報を読み取ってマスター登録をしただけですよ」
「……え？」

何か言おうとしたサイだったが、先程までの無表情とはうって変わって愛想のいい笑みを浮かべる少女に意表を突かれる。
「何だか雰囲気変わってないか？　それより遺伝子情報？　マスター登録って……？」
「はい。私は『ホムンクルス』ですから。起動してまず最初にマスター登録を行うのは当然のことです」
「ホムンクルス……？」
サイは少女の言葉に一つ気になる単語が混じっていたことに気づく。
ホムンクルス。
それは前文明の技術によって作られた人造人間のことである。ホムンクルスは機械の骨格と人と同じ血肉を持ち、人間を遥かに超える身体能力をもって己の主人を守り、また主人には絶対服従であると言われている。
そしてこれは噂だが、今も前文明の遺跡ではごく稀に休眠状態のホムンクルスが見つかっており、一部の王族や貴族は自分の護衛としてホムンクルスを側に置いてあるという話を聞いたことがあった。
「君がホムンクルス？　……本当に？」
「本当ですよ。その証拠にほら」
信じられないといった表情をするサイにホムンクルスだと名乗る少女は自分の前髪をめくって額を見せた。するとそこにはホムンクルスの証である金属製の小さな角が一本生えていた。
「ホムンクルス……初めて見た」
知識では知っていたが実物を見るのは初めてのサイに、ホムンクルスの少女は姿勢を正し、深々と頭を下げながら挨拶をした。
「私はここで作られた『ペオーニエ・タイプ』のホムンクルス。そして私を起動させてくれた貴方様は今この瞬間から私の所有者となりました。どうかこれから先、私を存分にお使いくださいマスター」

青年と少女の予想

「え？　え？　ちょ、ちょっと待て。遺跡で見つけた女の子が前文明の遺産のホムンクルスで、それが美少女で、しかも俺がマスター？　何だよこれ？　夢か何か？」

「ふむふむ、なるほど……。どうやらこの施設は完全に破棄されているみたいですね」

　あまりにも急な展開の連続にサイが混乱しながらも何とか状況を整理しようとするのだが、当の本人であるホムンクルスの少女は自身のマスターである青年の混乱をよそに周囲を見回していた。

　そしてホムンクルスの少女は、自分が保管されていたのと同じ三つのカプセルに近づいて中の様子を見ると、中にある三体の死体に気づいて僅かに悲しそうな表情を浮かべる。

「これは……保存システムに不備があったのか、途中で故障が生じたのか中のホムンクルスが死亡していますね。確かこの保存カプセルに保存されていたのは『ヒュアツィンテ・タイプ』に『ヴィッケ・タイプ』、そして『チュベローズ・タイプ』だったはず……。非常に惜しいですね。無事に起動させる事が出来れば私一人よりもずっとマスターのお役に立てたのに……」

「……なあ、やっぱりその水槽……保存カプセルだったっけ？　それに入っている死体って君と同じホムンクルスなのか？　後、ヒュアツィンテとかヴィッケっていうのは何なんだ？」

　ようやく落ち着きを取り戻したサイが質問をするとホムンクルスの少女は、自身のマスターである青年の方へ振り向いて答えた。

「はい、マスター。この保存カプセルに入っているのはホムンクルス……その死骸です。そしてヒュアツィンテ・タイプ、ヴィッケ・タイプ、チュベローズ・タイプとは私のペオーニエ・タイプと同じく特別な調整をされたホムンクルスのことです。本来ホムンクルスは意思や感情が稀薄なのですが、私達は特定の感情を中心に情緒面を強化されることで人間のような確かな意思や感情を手に入れたのです」

「そ、そうなんだ。それで……その……」

実際はホムンクルスの少女の説明をほとんど理解できていないサイは、それでもとりあえず相槌を打つと別の話題に移ろうとしたのだが、そこで彼はある事に気づいた。
「？　どうかしましたか、マスター？」
「いや、そういえば俺って君の名前を知らないなって思って。俺はサイ。サイ・リューラン。君の名前は？」
「私の名前ですか？　ありませんけど」
「え？　そうなの？」
自分の名前がないと当然のように言うホムンクルスの少女にサイは驚いた顔をする。
「はい。強いて言えば『ペオーニエ・タイプ』が私の名前になるかもしれませんが、もしよろしければマスターが私の名前をつけてくれませんか？」
「俺が君の名前を？　……そうだな」
ホムンクルスの少女に名前をつけてほしいと言われてサイは少しの間考えて口を開いた。
「ピオン、ていうのはどうかな？　君がさっきから言っているペオーニエに響きが似ていて呼びやすい名前にしたつもりなんだけど」
「ピオン？　それが私の名前？　ピオン、ピオン、ピオン……。はい。素敵な名前をありがとうございます、マスター」
ホムンクルスの少女ピオンは自分の名前を何度も呟いた後、名前をつけてくれた自身のマスターへ心から嬉しそうな笑みを向けて礼を言う。その笑みはあまりにも綺麗でサイは思わず頬を僅かに赤くして視線を顔ごと横に向ける。
「そ、そうか。それなら良かった。……それでピオン？　一つお願いがあるんだけど」
「っ！　はい！　何なりとお命じください、マスター」
記念すべき最初の命令にピオンは期待を胸に膨らませて姿勢を正す。そんなホムンクルスの少女にサイは言い辛そうににお願いを口にする。
「その……。服を、着てくれないかな？」

現在ピオンは裸の状態である。しかも出るところは過剰に出ていて引っ込むところは引っ込んでいる小柄ながらも豊満な体型で、体を動かすために胸やら尻の肉が動いて見えるので非常に目の毒であった。
「服、ですか？　申し訳ありませんが着る服がありませんが？」
「あ……」
ピオンに言われてサイは周囲に彼女の服になりそうなものが無いことに気づく。そしてサイが「倉庫」の異能の異空間に自分の予備のシャツを収納していたことを思い出してそれを呼び出そうとすると、それより先にピオンが口を開いた。
「あの、マスター？　最初のご命令が服を着て体を隠せとは……私の身体はマスターの好みに合いませんでしたか？」
「好みに合わないどころか大好物です！　最近王都で流行りだしている『ロリ巨乳』という言葉は最高の名言であると思っております！……って！　何を正直に言っているんだよ、俺の馬鹿ぁ！」
少し悲しそうな顔をして上目遣いで聞かれてサイは反射的に答え、その直後に自分に正直すぎる巨乳好きな馬鹿の叫びが部屋に響き渡った。
X　X　X
「……そういうことですか。つまり今は私を作った文明、前文明が滅んでから数百年は経った時代で、この施設がある地域一体はマスターのご実家の領地。そしてマスターのご実家の倉庫にこの施設へ繋がる通路があり、そこから入ってきたマスターが私を見つけた、と」
巨乳好きな馬鹿が叫んでから数分後。ピオンは現状を知るためにサイからこの時代についての簡単な説明と、彼がこの遺跡にやって来た経緯を聞いて納得したように頷いた。
「あ、ああ、そういうことなんだ」
それに対してサイはピオンを直視しようとせず横を向いたまま相槌を打つ。その理由は現在のピオンの格好にあった。
とりあえずあの後、サイは「倉庫」の異能を使って異空間から自分の予備のシャツを呼び出してそれをピオンに着せた。しかし彼女は

つい先程までカプセルの保存液に全身を浸かっていたので、シャツは彼女の肌に張り付いて僅かに透けて見え、逆に裸よりも扇情的な格好になってしまったのだ。
　そのため話をしてピオンの姿が目に入る度にサイは動揺してしまい、そんな自分の主人の様子にホムンクルスの少女は口元に嬉しそうな笑みを浮かべた。
「ひいおじいちゃんは倉庫の奥、この遺跡には巨万の財を生む宝があるって言っていたらしいけど、それってもしかしたら君のことかもしれないな」
「巨万の財を生む宝？　私がですか？」
「ああ」
　首を傾げるピオンにサイは頷いてみせて自分の考えを言う。
「前文明の遺跡や遺産はどの国でも高く売れるからね。ひいおじいちゃんの言葉はこの遺跡にある物を売れって意味だと思っていたんだけど、ここに来るまで遺産らしいものは何もなかったんだ。……ホムンクルスである君を除いてね」
　実際ピオンのような美しくて人間らしいホムンクルスなら、国の研究機関だけでなく貴族や大商人の好事家も山のような金貨を差し出して買い求めようとするだろう。ホムンクルスが一体どれくらいの値段で取り引きされているのか全く知らないサイでもそれくらいは予想できた。
（まあ、もっとも売らないけどね。いくらピオンがひいおじいちゃんが遺してくれた宝物で大金になるかもっていっても、ピオンはもう俺のパートナーなんだ）
　出会ってまだ数分しか経っていないのに随分とピオンを気に入っている自分に少し驚きながらもサイが内心で呟いていると、ホムンクルスは何かを考えている表情で口を開いた。
「あの、マスター？　マスターの曾祖父様が言う巨万の財を生む宝とは私ではないと思いますよ」
「……え？」
　予想外のピオンの言葉にサイは目を丸くして、そんなマスターの青

年にホムンクルスの少女は更に告げる。
「この施設には私の他にも前文明の遺産が確実にあります。そしてそれは私なんかよりもずっと大きな価値があります。恐らくマスターの曾祖父様が言う巨万の財を生む宝とはそちらの方でしょう」

巨万の財を生む宝

「マスター。この通路をまっすぐです」
「ああ、分かった」
　サイとピオンは、二人が出会った部屋を出て遺跡の通路を歩いていた。向かう先はホムンクルスの少女が言う、この遺跡にあるもう一つの遺産の元である。
「なぁ、ピオン？　さっきから自信ありげに道案内をしてくれているけど、道は分かっているんだよな？」
　サイの質問にピオンは自慢気な表情で答える。
「当然です。私とあの部屋にいた三体のホムンクルスは元々『ある目的』の為に調整された特別製なんですよ。ですから学習装置で様々な情報を入力されていまして、その情報の中にはこの施設の情報もありますから」
「そうなのか。……それでピオン？　俺はいつまでこの格好で行かないといけないんだ？」
　今サイはランタンを持つピオンを両手を使って抱き抱える、いわゆるお姫様だっこの格好をしていた。実家での農作業と軍学校での訓練でそれなりに体力がついている青年は、ホムンクルスとはいえ女の子を一人抱えて歩く程度では疲れたりしないのだが、先程から手や肌から感じる柔らかい感触のせいで落ち着かない様子であった。
「仕方がないじゃないですか。私もマスターの負担になるのは心苦しいのですが、こんなところを裸足で歩いたら足の裏を怪我をしてしまいます」
　ピオンの言う通り彼女は裸足の上、遺跡の通路は長い年月の経過によってあちこちが崩れたりしていて、サイもここを彼女に歩かせるのは流石にためらわれた。
「まあ、それもそうだけど……」
「それとも私はそんなに重いですか？」
「そんなわけないだろ。重さなんて気にならないって。それにピオンの身体は柔らかいしいい匂いもするし、何より歩く度に服の上からで

も胸が揺れるのが分かってずっと抱いていたい……って！　何言ってるんだよ俺の馬鹿！」
　ピオンに聞かれて思わず自分の本音を出してしまったサイ……じゃなくて巨乳好きな馬鹿。そんな巨乳好きな馬鹿を見上げながらホムンクルスの少女が嬉しそうで、それでいて楽しそうに笑う。
「ふふっ♪　マスターって嘘がつけないんですね。ですけどそこまでマスターに私の身体を気に入ってもらえたのは嬉しいです。……ねぇ、マスター？　『私』が欲しい時はいつでも言ってくださいね？　心をこめてたっぷりと『ご奉仕』させてもらいますから」
「……え？」
　下心が満載で聞く女性によっては激怒しそうな本音を口にしたサイにピオンは笑ってそう答えながら妖艶な視線を送る。その見られているだけで体の奥に異様な熱が生じそうな視線と意味深な言葉にサイは足を止めた。
「ピオン？　それってどういう意味……」
「見てください、マスター。あそこですよ」
　サイの言葉を遮ってピオンが前方を指差す。彼女が指差す先には扉があり、わずか開いている隙間から微かに光が見えた。
「光？　外に繋がっているのか？」
「ふふっ♪　行ってみたら分かりますよ。さあ、マスター」
　ピオンに言われるままサイは扉の元へ行き、両手がふさがっているためホムンクルスの少女に開けてもらって扉の奥へと進むと、そこは遺跡の外……ではなくとてつもなく広い広間であった。
　そして広間の中心には巨大な鋼鉄の柱が一本立っており、柱の表面を見れば淡い緑色の光の筋が何本も走っていて、そこから放たれる光が広間を照らしていた。
「何だこれは？　もしかしてあれがひいおじいちゃんが言っていた巨万の財を生む宝なのか？」
「恐らくは。あの柱こそ前文明の人類がモンスターとの戦いのために叡知を結集して作ったもの。『ゴーレムオーブ』を製造するためのプラントなのです」

「へぇー、ゴーレムオーブを。……って！　ゴーレムオーブ!?　ゴーレムオーブって、ゴーレムトルーパーを作るのに必要なあのゴーレムオーブ!?」

柱を見上げながらピオンの言葉に相槌を打つサイだったが、次の瞬間に言葉の意味を理解して驚いた顔でホムンクルスの少女を見る。

ゴーレムトルーパーとはこの世界で最も有名な前文明の遺跡であり、その存在の有無が戦争の勝敗を決めるとまで言われている最強の兵器だ。現在の惑星イクスの技術ではゴーレムトルーパーを一から作り出すことは不可能なのだが、唯一新たなゴーレムトルーパーを手に入れる方法があり、それがゴーレムオーブである。

ゴーレムトルーパーとゴーレムオーブは「ナノマシン」という極小の機械の集合体で、ゴーレムオーブに「ある条件」を満たすことによってゴーレムオーブのナノマシンは増殖して変形し、ゴーレムトルーパーへとなるのであった。

「あら？　マスターはゴーレムオーブのことをご存知だったのですね」

「ああ……。軍学校の授業で習ったよ。……ゴーレムオーブを作り出すってことはあの柱が『生鉄の樹』ってことなのか？」

感心したように言うピオンに、サイは信じられないといった表情で目の前の柱を見ながら答える。

生鉄の樹というのは現在の惑星イクスの人類がゴーレムオーブを製造するプラントにつけた名称である。ゴーレムオーブを、結果的にはゴーレムトルーパーを製造する生鉄の樹は、ゴーレムトルーパーと同じく戦術的価値が最も高い遺産として各国で厳重な体制で管理されていた。

「今見つかっている生鉄の樹は全ての国のを合わせて……確か十二本だけのはずだ。こんな所に十三本目があるなんて聞いたことがないぞ？」

「だからこそ、マスターの曾祖父様はこの施設を土地ごと自分のものにしたのでしょうね」

サイの呟きを聞いたピオンが納得の表情を浮かべて口を開いた。

「世間には知られていないこの施設を秘密裏に独占していれば、ここで得られる利益は全てマスターの一族のもの……。マスターの曾祖父様はそう考えたのでしょう。ゴーレムオーブならそれはもう高値で売れるはずですからね」
（そりゃあ、高値もつくだろうさ……）
　ピオンの言葉にサイは内心で呟く。軍学校にいた頃、何かの授業で講師がもしゴーレムトルーパーが売られたら小国を買い取れるだけの値段がつくと言っていた事を思い出して、青年は自分の胸の鼓動が早くなったのを感じた。
（凄いよ、ひいおじいちゃん。確かにこれは巨万の財を生む宝だよ）
「……ですけどあのプラントの様子だと、ゴーレムオーブの生産は難しそうですね」
　生鉄の樹が文字通りの「金の成る木」に見えて興奮をあらわにするサイの耳にピオンの冷静な声が聞こえてきた。
「……？　ゴーレムオーブの生産が難しい？」
「はい。プラントがゴーレムオーブを生産するには非常に大量なエネルギーを必要とするのです。しかしこの施設の動力はすでに止まっていて、こうなるとプラント自身がエネルギーを生み出して生産に充分な量を貯める必要があるのです。私の中にある情報だとエネルギーが貯まるまで早くて五十年、遅くて百年以上かかりそうですね」
「あ……」
　ピオンに言われてサイは父親から聞いた曾祖父の言葉に「今はまだ宝には価値はなく、価値が出るには百年、せめて五十年はまつ必要がある」という部分があったのを思い出した。軍学校で習った生鉄の樹の知識にも「生鉄の樹がゴーレムオーブを生み出すまでに長い年月を必要とする」とあったのだが、宝を目にした興奮によって言われるまで忘れていた。
「そうか……。そういえばそうだったよな。実家の倉庫の奥で宝物を見つけて億万長者、なんて夢物語あるわけない……」
「ですがすでに完成しているゴーレムオーブもあるみたいですし、今はそれで良しとしておきましょう」

「えっ!?」
　先程までの宝を見つけた喜びがぬか喜びに終わったと思い、落ち込んでいたサイはピオンの言葉に驚いて彼女の顔を見る。
「？　どうしたのですか、マスター？」
「ゴーレムオーブ、完成しているの？」
「ええ。ほら、あそこに見えますでしょう？」
　ピオンはサイの言葉に答えると生鉄の樹の根元を指差す。彼女が指差した生鉄の樹の根元の表面には、林檎程の大きさの球体が盛り上がっていた。

ゴーレムトルーパー

「これがゴーレムオーブか……」
　生鉄の樹の根元まで来たサイは、生鉄の樹の表面から盛り上がっている球体、ゴーレムオーブを興味深そうに見る。
「はい。これこそが前文明の技術の粋を集めた戦闘兵器ゴーレムトルーパーのコアユニット、ゴーレムオーブです。一つだけですけど手に入って良かったですね、マスター」
「ああ、本当にな。……でもこれってどうやって取るんだ？」
「これでしたら簡単に取れますよ。マスター、ちょっと降ろしてもらってもいいですか？」
「分かった」
　サイが今まで抱き抱えていたピオンを降ろすと、ホムンクルスの少女はゴーレムオーブに触れた。すると全く力を入れていないのにゴーレムオーブは生鉄の樹の表面からあっさりと離れた。
「ほら、簡単でしょう？　……それでマスター？　このゴーレムオーブ、どうするおつもりですか？」
「どうするって……そうだな、やっぱり王家か軍に献上、かな？　ゴーレムオーブを献上したら地位も名誉も思いのままだろうし」
「……そうですか」
　ゴーレムオーブの使い道を聞かれたサイは少し考えてから答え、それを聞いたピオンは僅かに寂しそうな表情となって俯くのだが、青年はそんなホムンクルスの少女の変化に気づくことなく言葉を続ける。
「でもやっぱり勿体無いかもな？　次のゴーレムオーブなんていつできるか分からないし、俺もゴーレムトルーパーに乗ってみたいからな」
「っ!?　本当ですか！」
　サイの言葉にピオンは勢いよく顔を上げて自分の主の顔を見る。その瞳は強い期待と喜びで輝いていた。
「うわっ!?　どうした？」
「マスター！　今の言葉は本当でしょうか？」

驚くサイに詰め寄ってピオンが聞くと、青年はホムンクルスの少女の並々ならぬ気迫に気圧されながらも答える。
「あ、ああ、まあな。やっぱり男だったら一度は自分だけのゴーレムトルーパーに乗って格好よく戦ってみたいって思うだろ？」
「……そうですか」
サイの返答にピオンは先程と同じ返事をする。しかしその表情は先程の寂しそうな表情とは逆の、嬉しそうな表情であった。
「ピオン？　さっきから一体どうしたんだ？」
「……いえ。驚かしてすみませんでした、マスター。……でも、そうですね……」
ピオンは何か悩むような表情で考えると、次にゴーレムオーブを持ったままサイから離れていく。先程から意味が分からない行動をとるホムンクルスの少女にサイが再び呼びかける。
「おい。ピオン」
「……マスター。先に謝っておきます。勝手なことをして大変申し訳ありません」
「？　先に謝るって、何をする気なんだ？」
困惑するサイに謝罪の言葉を口にしたピオンはゆっくりと青年の方にと振り向きそして……、
「キャー、テガスベッチャイマシター」
と、清々しいくらい棒読みな台詞を言ってゴーレムオーブをサイの方へ高く放り投げた。
「ちょっ!?　おまっ！　何をするんだ!?」
突然のピオンの行動にサイが驚きの声を上げる。
実際、この程度の高さから落ちたぐらいではゴーレムオーブは壊れるどころか傷一つつかないのだが、それを知らないサイは慌てて両手を広げて落ちてくるゴーレムオーブを受け止めようとする。
「……」
そしてそんなサイの姿にピオンは嬉しさと申し訳なさを混ぜ合わせた複雑な表情を浮かべていた。
「ゴーレムオーブが……って、おっと！」

ピオンが放り投げたゴーレムオーブをサイが両手で受け止める。受け止めた後、青年はゴーレムオーブに異常が無いかを念入りに確認して、異常が無いことが分かると安堵の息を吐いた。
「よかった。大丈夫だ。……ピオン！　これは一体どういうつもり……だ……？」
流石にこれは許す事ができなかったサイがピオンに向けて怒声を上げようとした時、青年の手の中でゴーレムオーブに異変が生じた。
まず最初にゴーレムオーブの表面が脈打ち、生き物の鼓動のような振動がサイの掌に伝わってきた。
次にゴーレムオーブが光を放ち、生鉄の樹しか灯りがなかったこの空間を照らし出す。
光を放ち始めると同時に冷たかったはずのゴーレムオーブが徐々に熱を帯び始め、今では人肌よりもやや熱いくらいの熱を帯びていた。
「な、何だ？　何だよ、コレ？」
「マスター。マスターはゴーレムオーブをゴーレムトルーパーにするための条件ってご存知ですか？」
自分の手の中にあるゴーレムオーブの異変に困惑しているサイにピオンが近づきながら話しかける。
「ゴーレムオーブをゴーレムトルーパーにする条件？」
「はい。その条件とは非常に簡単で『ゴーレムオーブの表面に人間の血液を接触させる』。それだけなんです。それだけでゴーレムオーブは血液にある遺伝子情報から血液の提供者に相応しい姿と武装を導き出してその姿にとなるのです」
「血液……。あ……？」
ピオンの説明を聞いたサイは何かを思い出した表情となって自分の左手を見る。自分がこの遺跡の探索を始めた最初に左手の掌を切って、今もうっすらと血が出ている事を思い出したのだ。
「ピオン。お前、その為にあんな事を？」
「はい。……そろそろ危ないのでゴーレムオーブをお離しください」
ゴーレムオーブに血が出ている左手を接触させる為にゴーレム

オーブを放り投げたのか、と聞くサイにピオンは頷くと、ホムンクルスの少女は主人の青年からゴーレムオーブを奪い取ってそれを床にと放り投げる。するとゴーレムオーブが床に接触した瞬間、ゴーレムオーブの光が一気に強まり目を開けていられない程になった。
「うわっ!?　……？」
　とっさに両手を顔の前にもっていきゴーレムオーブが放つ光から目を守ったサイは、光の中でゴーレムオーブと思われる光源が変化していくのを見た。球状だった光源が粘土のように不定形に形を変えながら大きくなっていき、見上げる程大きくなったところでようやく光が収まった。
「……？　……何だコレは!?」
　最初は強い光を見たせいで周りがよく見えなかったサイだが、目が慣れてきて目の前にある「それ」を見て驚きの声を上げる。
　それは金属でできた巨大な像であった。
　まず目に入ったのは巨大な竜。
　巨体を支える強靭な両脚と棍棒のように太くて長い前腕部を持ち、額に前方に向かって伸びている巨大な角を生やした鋼鉄の竜。
　そして鋼鉄の竜の背中には騎士のような外見をした人間の上半身が生えていた。
「これって……まさか……」
「はい。そのまさかです」
　目の前にある竜と騎士が一体化した巨像を見上げながら呆けた声を出すサイに、ピオンは心から嬉しそうな笑顔を浮かべながら自らの主人へ告げる。
「これこそがマスターの血によって生まれた、マスターだけの『ゴーレムトルーパー』です」

道具としての本能

「これが……俺のゴーレムトルーパー？」
「はい。その通りです。おめでとうございます、マスター」
ゴーレムトルーパーを見上げるサイにピオンが祝いの言葉を言う。
ピオンが祝っているのはサイが自分だけのゴーレムトルーパーを作り出した事だろう。その祝いの言葉はとても嬉しそうな声音で、聞くだけで彼女が心から、それこそ自分の事のように喜んでいるのが理解できた。
正直ピオンのような美少女に祝ってもらえるのは嬉しいし、「自分だけのゴーレムトルーパーを手に入れる」という願望が叶ったのも嬉しくないと言えば嘘になる。しかしそれでもサイは素直に喜ぶ事ができなかった。
「……それで？　ピオン、どうしてお前はこんなことをしたんだ？」
サイはピオンの方に振り向くと彼女の目を見ながら質問する。
生鉄の樹からゴーレムオーブを手に入れた時、すでにサイの中ではゴーレムオーブを王家か軍に献上して財に変える考えが固まっていた。それを知っていながらサイにゴーレムオーブを使わせてゴーレムトルーパーを作り出させたピオンの行動はある意味裏切りと言えた。
「……」
自身の主人である視線を受けたピオンは、嬉しそうな表情から一変して真剣な表情になると、まず床に正座をすると次に両手と額を床につけて土下座の体勢になった。サイはそんな彼女の突然の行動に、思わず怒りを忘れて驚くのだった。
「ピ、ピオン？」
「まずは謝罪をさせてください。先程も申しましたが、マスターのご意志を無視してゴーレムオーブを使ってしまった事、まことに申し訳ありませんでした」
土下座をしながら謝罪をするピオンの姿に、サイの中で彼女の行動に対する怒りが薄れ、代わりに困惑を覚えるようになった。

「え～と……。謝るのはいいから、そろそろあんな真似をした理由を教えてくれないか？」
「……はい。私があの様な真似をしたのは全て、私が製造された理由を実行するためです」
　サイがもう一度、自分にゴーレムオーブを使わせた理由を聞くとピオンは顔を上げて答える。
「ピオンが製造された理由？」
「そうです。私がある目的の為に調整された特別製のホムンクルスであることは言いましたよね？」
「……そういえばそんな事も言っていたな」
　ピオンに聞かれてサイはここに来るまでの彼女との会話を思い出した。
「その目的とはゴーレムトルーパーを操る操縦士の方の操縦や戦闘を補助すること。元々この施設はゴーレムトルーパーの戦闘をより効率よくするための新戦術や戦闘の補助をする『道具』を開発するための研究施設なのです。そして私もまたその『道具』の一つ」
「……だからピオンとマスター登録をした俺にゴーレムオーブを使わせてゴーレムトルーパーの操縦士にしようとしたって訳か」
「はい」
　ピオンの説明を聞いてようやく彼女の行動の理由が分かってきたサイが確認をするとホムンクルスの少女が頷く。
「マスターが何気なく呟いた『ゴーレムトルーパーに乗ってみたい』という言葉……。それを聞いた瞬間、マスターと共にゴーレムトルーパーに乗る光景が頭の中に浮かび、それがとても素晴らしく幸せなものだと思い、気がつけばその光景を実現するために動いていました」
　ホムンクルスは製造される時に「主人の為に尽くすことが最大の喜びである」という考えを、本能とも言える心の奥底に刻み込まれる。それに加えてピオンは「主人であるサイとゴーレムトルーパーに乗り、共に戦うことが最高の幸せである」という考えを刻み込まれていて、そんな「道具」としての本能がサイの言葉によって発動してしまったのだ。

「……なるほどな」
「……」
　事情を全て聞いたサイがピオンを見ると、ホムンクルスの少女は不安そうな顔で自らの主人を見上げていた。これから自分が罰せられる、最悪捨てられる未来を想像してそれを恐れているのだろう。
　しかしサイはピオンを罰する気などなかった。
（ピオンの行動は言ってみたら本能が暴走したもので、暴走の原因は俺が『ゴーレムトルーパーに乗ってみたい』なんて不用意に言ったせいなんだよな……。それでピオンを責める訳にはいかないか）
　悪いのは不用意な発言をした自分であると結論を出したサイは「ゴーレムトルーパーに乗るという子供の頃からの夢が叶った」と考えを変えることにした。
「分かった。……じゃあ、ピオン？　このゴーレムトルーパーの乗り方を教えてくれないか？」
「っ!?　マスター、それって……！」
　主人の言葉に目を見開いて立ち上がったピオンにサイは頷いてみせる。
「ああ。ゴーレムオーブを王家や軍に献上できなかったのは残念だけど、考えてみたら自分だけのゴーレムトルーパーなんていくらお金を積んでも買えるものじゃないからね。だから俺はこのゴーレムトルーパーに乗るよ。ピオンは操縦士の補助をするホムンクルスなんだろ？　だったら操縦の仕方とかも知っているよな？」
「はい！　はい！　お任せください！」
　ゴーレムトルーパーに乗ることを決めたサイの言葉に、ピオンは安堵と喜びのあまり目尻に涙を浮かべ頬を赤くした笑顔となって何度も勢いよく頷いた。その笑顔は今日見てきた中で一番綺麗なものであった。
「ええ、お任せくださいマスター！　私の中には全てのゴーレムトルーパー共通の基本動作から超高難度の戦闘用動作まで入力されています！　それらを手取り足取り教えてマスターを超一流の操縦士へと導いてみせます！」

（……!?　ピ、ピオンの体、ていうか胸が凄いことに……！）

よほどサイの言葉が嬉しかったのか、ピオンはまるで踊っているかのような激しい身ぶり手振りを加えながら熱い言葉を上げる。その度にホムンクルスの少女の小柄ながらに豊満な体の肉、特に乳房が激しく揺れ動き、二つの肉の果実の暴れっぷりをサイ……ではなく巨乳好きな馬鹿は凝視するのであった。

ホムンクルスの役目

「あのー？　マスター？」
　サイが体のいろんなところを揺らしながら喜んでいるピオンの姿に見とれていると（鼻の下を伸ばしているとも言う）落ち着きを取り戻したホムンクルスの少女が自分を見上げているのに気づいた。
「はっ!?　ど、どうした？　ピオン？」
　声をかけられて正気に帰ったサイは何でもないように装って返事をするが、彼がピオンの体に夢中になっていたのはバレバレで、ホムンクルスの少女はそんな自らの主人の態度に満面の笑みを浮かべる。
「ふふっ♪　マスター？　そんなに私の体が気になるのでしたら、実際に『味わって』みますか？」
「あ、味わう？　味わうって何を……って!?　ピオン!?」
　サイがピオンの言葉の意味を確認しようとした時、ホムンクルスの少女は満面の笑みをどこか妖艶なものに変えて自分の主人である青年に近づく。
「ピ、ピオン……？」
　突然のピオンの行動にサイが驚いていると、ホムンクルスの少女はサイの両手を捕まえて握りしめる。
（な、何だ？　ピオン、物凄く力が強くないか？）
　思わずピオンの手を振りほどこうとしたサイだったが、ホムンクルスの少女の手にかけられた力は予想よりも遥かに強くてびくともしなかった。
「さぁ、どうぞ♪」
「……!?」
　ピオンは甘い声で囁くと強引にサイの両手を自分の乳房に当てる。
「ああ……♪　マスターの手が私の胸に当たってます……」
「お、おい!?」
「ひゃん!?　マ、マスター、もっと優しく！」
　突然の出来事にサイが半ば混乱して両手を動かすと、掌と指の動きに乳房を刺激されたピオンが小さい悲鳴を上げる。

両手から伝わってくるピオンの乳房の柔らかな感触にサイの中で強い情欲が沸き上がってくるのだが、それと同時に自分の意思を無視して行為を進めようとするピオンへの怒りも確かに芽生えていた。
「ピオン、いい加減にしろ！」
「っ！　……分かりました。そんなに怒らなくてもいいじゃないですか」
気がつけばサイは怒りの声を上げて、それに対してピオンはしぶしぶとサイの両手を解放した。
「この体の『最後』の記念にマスターにご奉仕しようと思いましたのに……」
「最後？　それよりピオン、ご奉仕ってお前……ホムンクルスって、その……『できる』のか？」
何やら気になる言葉が聞こえた気がしたが、それより気になることがあったサイはピオンに質問する。彼が聞いた「できる」とはつまり男と女が肌を重ね合わせる行為の事で、その質問に対してホムンクルスの少女は「何を当たり前なことを？」と言いたげな表情で答える。
「もちろんできますよ？　私達ホムンクルスの体は人間とほとんど同じ作りですから、人間とエッチをしてその人間の子供を作ることができます。というか、それが私達ホムンクルスの役目の一つなのです」
「……ナヌ？」
思いがけない言葉に呆けた声を漏らすサイだが、ピオンはそれに構うことなく説明を続ける。
「私のような女性型ホムンクルスは子宮を操作する事で妊娠のタイミングを決定する事ができますし、産まれてくる子供の性別を決めたり親の異能を受け継がせる事もできます。そうする事で有力者の跡継ぎや貴重な異能を確実に残すのが女性型ホムンクルスの役目なのです」
「な、なるほど」
ピオンの説明にサイは思わず頷いた。
確かに古来から王家や貴族を始めとする有力者達の跡継ぎ問題は切実な問題だし、強力な異能を確実に次代に残す研究は各国でも行わ

れている。そういった問題に頭を悩ませている者にとっては、ピオンのような女性型ホムンクルスは正に救いの神……いや、救いの女神と言えるだろう。
「そうか、勉強になったよ。……でも今はそういうのはいいからな」
「はい♪　分かりました、マスター♪」
　本当は凄く興味があるし、先程の拒絶を撤回したい気持ちでいっぱいのサイであるが、それでも一度断ってしまった手前なので理性を総動員して未練がないように振る舞う。しかしやっぱりピオンはお見通しのようで、大人しく引き下がったもののその顔には笑みを浮かべていた。
「そ、それより早くゴーレムトルーパーの乗り方を教えてくれ」
　笑みを浮かべるピオンの顔を直視できなかったサイは、視線を横にそらして話題を変えるかのようにゴーレムトルーパーの乗り方を聞く。ホムンクルスの少女は笑みを浮かべたまま顔を縦に振った。
「はい。もちろんお教えします。それも私の役目の一つですからね」

暴走？

いよいよゴーレムトルーパーに乗れると機体で胸を膨らませるサイに、ピオンはまず最初にするべきことを言う。
「それではマスターにはこれからあることをしてもらいます」
「あること？」
ピオンの言葉にサイが聞き返すとホムンクルスの少女は頷いた。
「はい。実はこのゴーレムトルーパーはまだ完全にマスターのものになっていないのです。ゴーレムトルーパーは最初に乗った人間を自身の操縦士として登録し、それからは操縦士と操縦士が許可を出した人間しか操縦できなくなります。ですのでまずマスターにはゴーレムトルーパーの操縦士登録をしてもらいます。……コックピット解放！」
『……！』
サイに説明をしたピオンは視線をゴーレムトルーパーに移して命令をした。するとホムンクルスの少女の命令に従って、ゴーレムトルーパーの下半身にあたる竜がうつ伏せの体勢となり、続いて胸部で展開して人が入れそうな空間が現れた。
「あれがゴーレムトルーパーの操縦席？」
「そうですよ。ではマスター、早速中に入りましょう♪」
「お、おい!? 分かったから引っ張るなって！」
ゴーレムトルーパーの竜の胸部が展開して現れた操縦席を見てサイが呟くと、ピオンが青年の腕に抱きついて操縦席へと連れていこうとする。ちなみにこの時、腕全体からホムンクルスの少女の柔らかな体の感触が伝わってきて、サイは自分の心臓の鼓動が早くなり、同時に今までにかなり削られた精神力やら理性とかが更に削られていくのを感じた。
ゴーレムトルーパーの操縦席は無理をすれば人が二、三人くらい入れそうな広さで、中には操縦士が座るのだと思われる金属製の椅子が一席あるだけであった。
「さあ、マスター。この椅子に腰掛けてください。それで操縦席登録

は完了します」
「それだけなのか？」
「はい。椅子に座って背もたれに背中を預ければすぐです」
「分かった」
ピオンの言う通りにサイは椅子に座って背もたれに背中を預けた。
しかし次の瞬間。
「痛っ!?」
椅子に座って背もたれに背中を預けたサイは、次の瞬間首の後ろ側に痛みを感じて、弾かれたように椅子から立ち上がる。見れば椅子の背もたれの丁度首が当たる所に小さな針が生えており、針の先端には血がついていた。
「は、針？　こんなところに針なんてあった……え？」
サイが見ている中で椅子に生えていた針は徐々に小さくなっていきやがてなくなった。その様子を驚いた顔で見ている青年にピオンが嬉しそうな声で話しかける。
「お疲れ様でした、マスター。これで操縦士の登録は完了です♪」
「ピオン。お前、あの針の事を知っていたのか？　知っていたのだったら教えてくれて、も……あれ？　何だ？　急に、体が……？」
ピオンに一言文句を言おうとしたサイだったが、突然立ち眩みに似た感覚に襲われる。ホムンクルスの少女はその様子を見て嬉しそうな表情を浮かべながら青年の体を支える。
「大丈夫ですよ、マスター。すぐに元に戻りますからね。それでは次に……」
サイの体を支えながらピオンは右手で操縦席の椅子に触れると目を閉じて意識を集中する。
「ピオン？」
「……お待たせしました、マスター。とりあえず外へ出ましょうか？」
ピオンはサイを支えながら操縦席から外へ出て、ゴーレムトルーパーからある程度離れると自分の主人である青年に話しかける。
「マスター。これからこのゴーレムトルーパーが動きますけど、それは決して暴走ではありませんからあまり驚かないでくださいね？」

「ゴーレムトルーパーが動く？」
『……！』
サイがピオンの言葉に首を傾げると、まるでそれを合図にしたかのようにゴーレムトルーパーが動き始め、ゴーレムトルーパーの下半身にあたる竜が遺跡の壁を破壊しだした。
「な、何をやっているんだ……!?」
「……」
「って!?　お前、いきなり何を!?」
遺跡の壁を破壊してその向こうに下半身の竜の頭部を突っ込ませているゴーレムトルーパーにサイが呆然としていると、ピオンはいきなりシャツを脱ぎ捨てて裸となり、驚きの表情を浮かべている自分の主人である青年から離れてゴーレムトルーパーへと向かって歩いていく。
「おい、ピオン？　今度は何をする気だ？　そっちに行くと危ないぞ！」
サイが呼び止めるとピオンは歩くのを止めて青年の方へ振り向き、笑顔のまま頭を下げて礼をした。
「……ピオン？」
「マスター。少しの間お別れです」
ピオンが礼をして別れを告げた次の瞬間、ゴーレムトルーパーの下半身にあたる竜が、ホムンクルスの少女を一口で呑み込んだ。

復活？

「……は？」

サイは一瞬、自分が見た事が信じられず、十秒くらい沈黙した後で呆けた声を漏らす事しかできなかった。

ピオンに指示に従ってゴーレムトルーパーの操縦士の登録をしてそれが終わったら、急にゴーレムトルーパーが独りでに動き出して遺跡を壊してはじめて、次にホムンクルスの少女を一口で呑み込んだ。

頭では今起こった出来事を認識できているのだが、それを受け入れる事ができなかった。

「ピ、ピオン？」

先程までピオンがいた場所には彼女の姿はなく、彼女ごとゴーレムトルーパーに呑み込まれた床の削られた跡があるだけ。床の削られた跡を震える指先で触れてサイの中でようやくピオンがここにはいない……ゴーレムトルーパーに殺されてしまったのだという実感が沸いてきた。

「……！　お、お前！　なんて事をしてくれたんだ!?」

ゴーレムトルーパーに向かって怒声を投げつけるサイ。しかし当然というかゴーレムトルーパーは怒声に反応せず、ただその場に立って虚空を見つめるだけであった。

「……！」

サイは無言でゴーレムトルーパーの脚部まで駆け寄ると脚部の装甲を何度も殴りつける。

本当は分かっている。ゴーレムトルーパーが独りでに動き出したのも、遺跡を壊し出したのも、そしてピオンを呑み込んだのも、全てはピオン自身が仕組んだものだと分かっている。

それでもサイはゴーレムトルーパーを殴らずにはいられなかった。ピオンを失った悲しみと理不尽を、例え命じられただけとはいえ実行した目の前の鋼鉄の巨像にぶつける事を止められなかった。

サイが拳を叩きつける度にゴーレムトルーパーの脚部から「金属同士が激しくぶつかり合うような音」が響き渡り、装甲の「拳を当てた

箇所がへこむ」のだが、どうやらゴーレムトルーパーには自動で損傷を修理する機能があるようで、装甲のへこんだ箇所は数秒で元に戻っていく。
「はぁ……！　はぁ……！」
　ゴーレムトルーパーの脚部に数十発の拳を叩き込みようやく気が済んだ……訳ではないが若干落ち着きを取り戻したサイは荒い息を吐きながらゴーレムトルーパーを見上げる。するとゴーレムトルーパーの巨体が光を放っている事に気付いた。
「ゴーレムトルーパーが、光っている？」
　一体いつから光っていたのだろうか？　感情のままに拳を振るっていたサイは今までゴーレムトルーパーが光を放っていた事に気付いておらず、呆然としているとゴーレムトルーパーの一部が変形していくのが分かった。
　変形しているのはゴーレムトルーパーの下半身の竜の腰の上辺り、上半身の人型の背後の箇所。そこがまるで粘土のように形を変えながら盛り上がり、丸みを帯びた箱の様なものができるとゴーレムトルーパーから放たれる光が収まった。
「……形が少し変わった？　何でいきなり……!?」
『……！』
「ああ、もう！　今度は何なんだよ!?」
　光が収まったと思ったら次はゴーレムトルーパーの前方、操縦席の辺りから何かの駆動音が聞こえてきた。次から次へと起こる事態にサイはやけくそ気味に叫ぶと操縦席の前に駆け寄った。
　ゴーレムトルーパーは立った状態で停止していて、サイが操縦席を見上げると例の駆動音はやはり操縦席から聞こえてきていた。現在装甲で入口が閉じられている操縦席は、装甲と装甲の隙間から光が漏れているのが見えた。
「……本当に、今度は何なんだよ？」
　もう驚く気力もないのか操縦席を見上げながらサイは小さく呟いた。そしてそれからしばらくすると、やがて駆動音が止み、装甲と装甲の隙間から見えていた光も収まり、装甲が展開して操縦席が現れ

る。
　ゴーレムトルーパーの操縦席には誰も乗っていないはずであったが、そこからは一人の人影が姿を見せた。それはサイがよく知る姿であった。
「……!?　ピ、ピオン！」
「はい♪　そうですよ、マスター♪」
　ゴーレムトルーパーの操縦席から姿を現したのは、先程ゴーレムトルーパーに一呑みにされて死んだはずのホムンクルスの少女ピオンであった。
「な、何で？　お前、さっき死んだはずじゃ……？」
「ええ、分かっています。その説明もしますから今からそちらに行きますね」
「え？　今からこっちに行くって？」
　混乱するサイにピオンは相変わらずに態度で答えると、そのまま操縦席から飛び降りて自分の主人である青年めがけて落ちて行く。ちなみにこの時のピオンは相変わらず裸のままで、飛び降りた時に色々見えた気がしたが、残念ながらそれを気にする余裕は今のサイにはなかった。
「おい!?」
「きゃー♪　受け止めて下さ～い♪」
「うおわっ!?」
　呑気な声を出しながら落ちてくるピオンをサイは何とか受け止める。その際に全身で感じた彼女の柔らかな感触に温かな体温、心臓の鼓動は確かに生きている生者のものであった。

自己進化機能

「……」

ゴーレムトルーパーの操縦席から飛び降りてきたピオンを受け止めたサイは、最初こそ驚いた顔をしていたが、冷静さを取り戻すとやがてジト目となって腕の中のホムンクルスの少女を無言で見つめた。

「あ、あれ？　マスター、どうかしましたか？」

「……」

サイの様子がおかしいことに気付いたピオンが話しかけるが青年は答えない。

死んだと思っていたのに生きていたことを喜びたい気持ちはある。何でゴーレムトルーパーを動かして自分から死ぬ様な真似をしたのか聞きたい気持ちもある。

だが喜ぶよりも、理由を聞くよりも、まずやらなくてならないことがある。

まずは説教だ。

サイは自分の腕の中にいるピオンを床に降ろして立たせると、先程彼女が脱ぎ捨てたシャツを手渡して小さく呟いた。

「それを着て正座」

「はい？　マスター、今何て……？」

「それを着て正座」

聞き返すピオンにサイはもう一度短く告げる。ホムンクルスの少女は自分の主人である青年の目を見て彼が怒っていることに理解すると、手渡されたシャツを着てからその場に正座をした。

「これでよろしいでしょうか、マスター？」

「ああ」

正座をしてこちらを見上げてくるピオンにサイは腕組みをして短く答える。

この時のサイとピオンの姿は「裸に近い格好で正座をしている少女を腕組みをして見下ろしている青年」という色々と危ない絵面なのだが、今のサイはその様なことは全く気にしてはいなかった。

「……ピオン、俺がなんで怒っているか分かるか？」
「ええっと、それは……」
　サイの言葉にピオンは何かを言おうとするが、彼女は自分の主人である青年が何故怒っているのかを本気で分かっていないらしく言葉が続かず困った顔をする。それから少しの間、仏頂面の青年と困ったような愛想笑いを浮かべる少女が無言で見つめ合い、やがて仏頂面の青年、サイが口を開いた。
「お前は俺の為に行動してくれているのは分かっている……つもりだ。ゴーレムトルーパーが勝手に動くようにしたのも俺の為、なんだろ？　……でもな？　だからと言って自分で自分を殺すような真似なんてするなよ」
「ああ、その事で怒っていたのですね？　あれは……!?」
「……！」
　サイの言葉にピオンはどうして彼が怒っているかその理由を理解して説明をしようとするが、その前に青年は床を強く踏み鳴らしてホムンクルスの少女の言葉を遮る。
「二度とするな。いいな？」
「……はい」
　ピオンはサイが本気で自分のことを心配して怒っているのだと理解すると正座の体勢のまま頭を下げる。その姿を見て彼女が反省していると分かると、サイは一つ息を吐いて気持ちを落ち着かせてピオンに尋ねる。
「それで？　何であんな事をしたんだ？　というかお前、ゴーレムトルーパーに食べられて死んだ筈なのに何で生きているんだ？」
「……はい。まず最初に、私がゴーレムトルーパーに遺跡や私を食べるように命令したのは、マスターの補助をより完全なものにする為です」
　サイの予想通り、ゴーレムトルーパーが独りでに動き出したのはやはりピオンの仕業のようで、先程怒られたせいか落ち込んだ表情のホムンクルスの少女は、ゆっくりとそのようなことをしたの理解を説明する。

「俺の補助をより完全に？」
「はい。私も出来る限りマスターの側について補助をするつもりですが、何かの事故で機能停止になる事もあり得ます。その時の事を考えてゴーレムトルーパーに私のバックアップを作り出す機能を加えようと思いました」
「バックアップ？　何だそれ？　ゴーレムトルーパーに機能を加える？」
　ピオンの説明をあまり理解できていないサイにホムンクルスの少女は詳しく説明する。
「ゴーレムトルーパーには『自己進化機能』という機能があって、これは時間をかけて成長させるか他の機械などを吸収させる事で機体の形を変えたり、新しい機能を加える機能です。機械を吸収させた時は進化がすぐに始まり、吸収させた機械に応じた機能が加えられます。……ここまでは大丈夫ですか、マスター？」
「……一応大丈夫だと思う」
　正直、ピオンの話は難しくてあまり飲み込めないのだが、それでもサイは何とか理解しようとしながら返事をする。そんな青年の顔を見てホムンクルスの少女は笑顔を浮かべて説明を続ける。
「私はまずゴーレムトルーパーにマスターと初めて出会った部屋の機材を吸収させて『ホムンクルスを製造させる機能』を加えました。そして次に私自身を吸収させることで私をゴーレムトルーパー専用のオペレーターに登録させて、機能停止となれば次の『私』が製造をするようにしたのです」
　ピオンの話を聞いたサイは先程ゴーレムトルーパーが破壊した遺跡の壁を見る。言われてみればあの辺りは確かにこのホムンクルスの少女と初めて出会った部屋で、彼女を製造して今まで保存していたカプセルがあった。
「え～と……つまり？　ピオンが自分をゴーレムトルーパーに食べさせたのはゴーレムトルーパーの一部になる為で、今のピオンはもし死んだとしても新しいピオンがゴーレムトルーパーから作られて生まれ変わる。……そんなところか？」

これまでの説明を必死に噛み砕いてまとめてみたサイの言葉にピオンは満面の笑みで頷いた。
「はい♪　その通りです、マスター。ゴーレムトルーパーと操縦師の関係は操縦士が死ぬまで途切れません。つまりゴーレムトルーパーの一部となった私はマスターが死ぬまで側にお使えできます。改めましてこれからよろしくお願いしますね、マスター」
ピオンはそう言うとサイに向かって深々と頭を下げるのだった。

驚くピオンにサイ

「俺が生きている限り例え自分が死んでも生まれ変わって側に仕えてくれる。……なんというか凄い話だな」

ピオンの説明にサイは思わずといった風に呟いた。その顔にはピオンが勝手に取った行動に対する怒りはすでに無く、ただ話の大きさに困惑している表情があった。

「迷惑でしたか、マスター？」

「え？　……いや、迷惑なんかじゃないよ。ただ話の大きさに驚いただけだ。正直、ピオンがずっと側にいてくれるなら俺も助かる。こちらこそ改めてこれからよろしく頼む」

「はい♪」

そう言ってサイが手を差し出すとピオンは笑顔で手を取って立ち上がる。立ち上がったホムンクルスの少女は、次に自分と自分の主人である青年がすべき事を口にする。ゴーレムトルーパーの操縦士と専用オペレーターにはまだまだやる事があるのである。

「それではマスター。次にやる事なんですが……」

「次？　まだ何かやる事があるのか？」

「当然です。マスターにはまだやってもらわないといけない事が沢山……」

首を傾げるサイにピオンは何かを言おうとするがその言葉は途中で途切れて、代わりに彼女の腹部から空腹を訴える音が聞こえてきた。

「～～～！」

恥ずかしそうに今も空腹を訴える音を出す腹部を両手で抱えるように隠すピオン。その様子を見てサイが苦笑を浮かべると、彼女は顔を赤くして言い訳でもするかのように口を開く。

「し、仕方がないじゃないですか。私、保存カプセルから解放されてからまだエネルギー補給をしていないんですから。ホムンクルスは人間以上の身体能力と情報処理能力を持っていますが、それを満足に発揮するには多くのエネルギーが必要なんですよ。更に言えば身体能

力と情報処理能力が優秀なホムンクルスは、優秀なだけ必要なエネルギーが多くて、私は特に優秀なホムンクルスだから、その……」
「……なるほど」
最初は早口で言っていたピオンであったが最後あたりで恥ずかしさが勝って言葉が途切れてしまう。だがサイは彼女の事情を大体だが理解した。
要するにホムンクルスは人間より遥かに身体能力が高くて頭も良いのだが、その代わりに多くのエネルギー、つまり食事を必要としている。そしてそのホムンクルスの中でも特に優秀なホムンクルスであるピオンは、他のホムンクルスよりも多くの食事が必要であるということだ。
ピオンの事情を理解したサイは自分も空腹になっている事に気付く。
考えてみればこの遺跡に繋がっている倉庫に入ったのが正午を少し回ったくらい。それから大分時間が経っているので、外では既に陽が落ちているだろう。
「なぁ、ピオン？　何をするつもりかは分からないけど、それは明日にして俺の家で夕食でも食べないか？」
「……そうですね。マスターの指示に従います。でもせめてその前にこのゴーレムトルーパーの……はっ!?」
サイの提案に渋々と従おうとするピオンであったが、突然大きな見落としに気付いてしまったような焦った表情を浮かべた。
「？　どうした、ピオン？」
「……ど、どうしましょう。私、このゴーレムトルーパーの外に出す方法を考えていませんでした」
ホムンクルスの少女は顔を青くして自らの失敗を告白する。
「ああ～……私の馬鹿！　普通は施設の外でゴーレムオーブをゴーレムトルーパーにしてもらうのに、マスターに操縦士になってもらいたいと焦りすぎてこんなミスをするなんて……！　ゴーレムトルーパーの力なら施設を壊して無理矢理外に出れますけど、そんな事をしたらせっかく秘密にしていたこの施設が外にバレる恐れも……」

「何だ。そんな事か」
頭を抱えて悩むピオンにサイは何でもないように声をかける。
「……え？　マスター？　今何て？」
「そんな事、何でもないって言ったんだよ。……ほら」
サイはピオンに答えるとゴーレムトルーパーの足元まで歩き、脚部の装甲に触れると異能を発動させた。すると次の瞬間、ゴーレムトルーパーの巨体は「倉庫」の異能によって創り出された異空間に収納されてこの世界から消えてしまった。
「……はい？」
「へぇ、ピオンもそんな顔をするんだな？」
突然ゴーレムトルーパーが消えてしまった光景にピオンは驚きのあまり目を見開き、それを見て今まで彼女に散々驚かされてきたサイが自慢気に笑いながら説明をする。
「俺はな、生物以外を異空間に自由に出し入れする『倉庫』の異能が使えるんだよ。それで今のはゴーレムトルーパーを異空間に収納したってわけ」
「『倉庫』の異能……？　それってまさか異空間創操能力？　……」
サイから異能の内容を聞いたピオンは呆けた表情で呟くと、その表情のままゆっくりと彼の元に近づいていく。
「ピオン？」
「マスター！　私と子供を作りましょう！　今！　ここで！」
「はぁあっ!?」
ピオンはサイの手を力強く握り締めると、この広間に響き渡るような大声でとんでもないことを叫び、これにはサイも驚いた顔となった。

ドランノーガ

「ピオン!?　お前、何ふざけた事を言っているんだよ!?」
「失礼な！　私はふざけてなんていません！　マスターの異能、異空間創操能力は前文明でも発現する人が滅多にいなかった、それこそ一億人に一人しか現れなかった激レアの異能なんですよ!?　生物以外ならほぼ無限に収納できて、しかも収納している間は時間が止まっているので時間経過による変化や劣化もナシ！　異空間創操能力の使い手が一人いるだけで運送業界に軽い革命だって起こせるんですよ！　これ程の異能を後世に残さないでどうするんですか！　さあ、分かったら私と子供を作りましょう、マスター！　さあ！」
　思わず大声を出してピオンを止めようとするサイだったが、ホムンクルスの少女はそれ以上の大声で「倉庫」の異能がいかに貴重かを語り、止まるどころか猛烈な勢いで迫ってくる。
「ちょっ!?　ピオン、待てって！」
「待ちません！」
　貴重な異能を確実に残すのが女性型ホムンクルスの役目。
　ピオンがサイに言った言葉は嘘ではなかったらしく、ホムンクルスの少女は自分の役目の一つ、貴重な異能である異空間創操能力こと「倉庫」の異能の使い手である青年を目の当たりにすると、まるで恋する少女の顔（ただし目は獲物を見つけた獣）となって彼を抱きついて押し倒した。
　ピオンのような美少女に抱きつかれて嬉しくないはずないのだが、そのあまりにも熱烈すぎるピオンの求愛行動に、サイは捕食者を前にしたような本能的な恐怖感を感じるのだった。
「……！　そ、そうだ！　ピオン！　お前、ゴーレムトルーパーで何かをするんじゃなかったのか!?」
「え？　……あ」
　サイが苦し紛れに言った一言にピオンはつい先程自分が何かをしようとしていたのを思い出し動きを止める。その隙を逃さずサイはホムンクルスの少女から逃れると「倉庫」の異能を使い、異空間に収

納していたゴーレムトルーパーを呼び出した。
「ほら、やる事があるなら早くやろう？　それで俺の家で夕食を食べよう。腹が減っているんだろ？」
「……そうですね」
　何やら誤魔化された気がするピオンだが、それでもやる事があったのと空腹なのは事実な為、サイの言葉に従う事にした。
「ふぅ……。それで？　俺に一体何をさせるつもりだったんだ？」
「マスターにはこのゴーレムトルーパーに名前をつけてほしいのです」
「名前？」
「ええ、そうです」
　疑問の声をあげるサイにピオンは一つ頷いて答える。
「全てのゴーレムトルーパーにはそれぞれ個別の名前があって、熟練した操縦士であれば個別の名前を呼ぶだけでゴーレムトルーパーを呼び出したり、簡単な動作をさせたりできます。ですからゴーレムトルーパーにとって名前をつけることはとても大切なことなのです。……それにいつまでも『ゴーレムトルーパー』ではこの子も可哀想じゃないですか？」
　ピオンは「この子」と言った辺りでゴーレムトルーパーの巨体を愛でるような目で見上げる。一度自らゴーレムトルーパーに吸収されて専用オペレーターとなった彼女にとって、このゴーレムトルーパーは半身と言っても過言ではなく、思い入れも強くなっていた。
「それもそうか……」
　そしてサイもピオンの言葉には同感だった。
　自分の血を分けて生まれた、自分だけの愛機とも言えるゴーレムトルーパーなのに呼び名の一つもないのは確かに寂しい。そう思ったサイはできるだけ勇ましい名前をつけてやろうとゴーレムトルーパーを見上げた。
　しばらくの間、サイは無言でゴーレムトルーパーの巨体を観察した後、やがて一つの名前を口にした。
「『ドランノーガ』……っていうのはどうかな？　結構強そうじゃない

か？」
サイが命名したゴーレムトルーパーの名前にピオンが首を傾げる。
「ドランノーガ、ですか？　ドランノーガの『ドラン』は下半身の竜を意味しているのが分かりますが『ノーガ』はどういう意味なんです？」
「別に大した意味なんてないけどほら、下半身の竜の角と前脚、それと上半身の人型の両腕、あれを見ていたら思いついたんだ」
ピオンはサイに言われてゴーレムトルーパーの下半身の竜の角と両腕部を見て、次続けて上半身の人型の両腕を見ると、自分の主人である青年の言葉がなんとなく理解できて頷く。
「……ああ！　成る程、そういう事ですか。はい。私もいいと思いますよ、ドランノーガという名前で」
「決まりだな。……それじゃあ、これからよろしく頼むな、ドランノーガ」
サイは自分の愛機であるゴーレムトルーパー、ドランノーガを呼びかけた。

そしてこれから先、ドランノーガはサイと共にいくつもの戦場を駆け抜けて多大な戦果を挙げ、後の世に「業火の竜騎士」、「万物を灰にする悪竜」といった異名を持つ英雄が乗った伝説のゴーレムトルーパーとして語り継がれる事になるのだが、それはまだ先の話……。

平原の戦い（1）

時は少し遡る。
サイが実家の倉庫の奥で遺跡へと通じる道を見つける少し前、イーノ村から山脈を越えて東へ行った平原に百人以上の男達が集まっていた。男達は全員、弓矢や長銃を持って武装しており、中には騎馬に乗っている者もいれば大砲の手入れをしている者もいる。
男達はフランメ王国の隣国の軍人達でこの近くにある街の防衛を任務としていた。
軍人達は緊張した表情で自らの手の内にある武器を握りしめ、陣形を整えて全員同じ方向を見つめている。そして軍人達が見つめている方向の遥か向こうで砂ぼこりが微かに起こった気がした時、軍人達の指揮官らしき男が大声をあげた。
「来たぞ！『モンスター』だ！」
『『……！』』
指揮官の言葉に軍人達の緊張が一層強まり、同時に「それ」が遥か向こうより現れた。
「それ」は一見すると爆走する五十匹くらいの猪の群れであった。
しかし猪一匹の大きさは通常の猪の五倍はあり、両目にあるのは真紅の色をした昆虫のような複眼、口元は大きく裂けていて肉食の獣のような鋭い牙が並んでいた。
モンスター。
前文明が崩壊するきっかけとなり、今では惑星イクスの大陸の半分を支配している人類の宿敵。
モンスターと一言に言ってもモンスターには色々な種類があり、野生の獣によく似た姿のモンスターもいれば全く未知の姿をしたモンスターもおり、単独で行動するモンスターもいれば群れを成して行動するモンスターもいる。そして今回現れたのはあの猪によく似たモンスターの群れで、モンスターの群れが街に接近してくるという報せを受けた軍人達は、こうしてモンスターの群れの進行上にある街から離れたこの平原で迎え撃とうとしていた。

「大砲隊！　発射用意！」
指揮官の指示により数人の軍人達が平原に運んできた三門の大砲を人力で起こして角度をつけ、火薬と砲弾を込める。準備が整い大砲がいつでも撃てるのを確認した指揮官は、視線をこちらに向かってくるモンスターの群れに戻し、モンスターの群れが大砲の有効射程距離までやって来たところで号令を飛ばす。
「……撃てぇ！」
『……！』
指揮官の号令により三門の大砲から砲弾が放たれ、砲弾はモンスターの群れに命中して命中箇所に砂と土、そしてモンスターの血と肉が混ざった爆風が起こる。しかし指揮官はそれを確認する事なく次の指示を部下に出し、それから間も無く大砲の砲撃で起きた砂煙からモンスターの群れが這い出てくる。
「弓矢隊！　長銃隊！　射撃開始！　騎馬隊は側面に回り込め！　大砲隊は次弾の装填を急げ！」
指示を受けて弓矢、あるいは長銃を持つ軍人達はモンスターの群れにと矢と弾丸を放ち、騎馬に乗った軍人達はモンスターの群れの側面に向かって騎馬を走らせる。
軍人達の戦いは、相手がモンスターでも人間同士であっても基本は変わらない。まず大砲部隊が遠距離からの砲撃で敵の攻勢を崩し、その後で連射性能に優れた弓矢部隊と連射は出来ないが威力に優れた長銃部隊が攻撃を仕掛け、騎馬部隊は機動力を活かして側面や後方から攻撃して敵を撹乱、敵が少数であれば正面から一気に敵陣を突破するというものである。
もちろんこれは充分に兵士や武器などの準備を整えて初めて出来る「理想」の戦い方であるが、今回の場合はモンスターの群れの発見情報が早かった為に準備を整える事が出来た。しかしいくら理想的な状態で戦いを始める事が出来たとはいえ、モンスターの群れを相手に油断する事は決して出来なかった。
「攻撃の手を緩めるな！　あいつらは痛みなど感じないぞ！」
指揮官が部下に檄を飛ばす。そして指揮官の言葉を肯定するかの

ように、猪に似た姿をしたモンスターの群れは大砲の砲撃で吹き飛ばされても、矢や弾丸をどれだけその身に受けても、死や痛みを恐れる様子もなく突撃を続ける。

そんなモンスターの群れを前に、軍人達は必死な表情で弓矢に長銃、大砲を放って戦う。

全てはこの戦いに勝つ為に。勝って自分達の後ろにある街の人々と、自分達の命を守る為に。

軍人達とモンスターの群れの戦いはまだ始まったばかり。

平原の戦い（2）

遠距離に対する攻撃手段を持たず突撃することしかできないモンスターの群れに対して、軍人達は弓矢や長銃に大砲を使って遠距離から一方的に攻撃を仕掛けていく。矢と弾丸はモンスターの体を貫き肉をえぐり、砲弾は地面ごとモンスターの体の大部分を吹き飛ばす。

何も知らない者から見ればそれは「一方的な虐殺」に見えるが、実際にはここまでやってようやく軍人達はモンスターの群れと「互角」であり「足止め」ができている状態なのだ。

矢と弾丸は確かにモンスターの体を貫いていて、中には眉間に矢が深々と突き刺さっていたり心臓の上に風穴が空いているモンスターもいる。

砲弾は確かにモンスターの体の大部分を吹き飛ばしていて、中には頭部の半分がなくなっていたり胴体がなくなって頭部だけとなったモンスターもいる。

だがそれでも、いや、その「程度」ではモンスターの群れは「止まらない」し「死なない」のだ。

全身を弓矢と長銃で射たれて、例え四肢を撃ち抜かれてもモンスターは止まらず、血塗れの肉塊になっても前に進もうとする。

大砲の砲弾で体の大部分を、例え首以外の全てを失ってもモンスターは死なず、首だけになっても前に進もうとする。

モンスターとの戦闘経験がある軍人達に「モンスターで一番恐ろしいところは？」と聞けば、全ての軍人達は「殺しても死なない、いくら傷つけてもすぐに治ってしまう生命力」だと答えるだろう。実際、通常の生物なら即死する攻撃を受けても死なず、頭部の半分が無くなっても断面から肉が盛り上がって元に戻り、四肢が千切れても傷口から新たな四肢が生えてくるモンスターの姿は「恐怖」以外の何物でもない。

もちろんモンスターも「生物」である以上は殺す事が可能で、傷が再生するよりも先に頭部を完全に破壊すれば死ぬのだが、現在の軍人達の装備ではそれを実行するのは難しかった。弓矢や長銃ではモン

スターの体に風穴を開ける事はできても頭部を完全に破壊する威力は無く、大砲は頭部を破壊できる威力はあるものの頭部に狙いをつける事など不可能であった。
それ故に軍人達にできる事と言えばモンスターの群れの進行速度を遅くする事だけなのだが、それでも軍人達は攻撃の手を休める事はなかった。
数が減らず止まる事がないモンスターの群れに絶え間無く攻撃を仕掛けている為、矢や弾薬の消費は激しく、それ以上に軍人達の精神的な疲労は大きい。そして軍人達がモンスターの群れに対して攻撃を開始して一時間程経過する頃には矢や弾薬が尽きかけ、軍人達の疲労も限界まできていたのだが、その時になって平原に「戦いを終わらせる存在」が現れた。
「……？　……！」
最初に気付いたのは大砲隊で大砲に火薬と砲弾を込める役割の一人の軍人だった。
軍人が疲れ切った表情でふと後方を見た時、後方の大地に小さな影が目に映ってそれが段々と大きくなっていくのに気づくと、その軍人は疲れ切った表情から一転して心から嬉しそうな表情となって仲間達に向かって叫んだ。
「おぉい！　来たぞ！『援軍』が来てくれたぞぉ！」
『『ーーーーー!?』』
嬉しそうな表情をした軍人の声に、他の軍人達も嬉しそうな表情となってモンスターの群れへの攻撃を行いながら歓声を上げる。本来であれば連絡以外の戦闘中の私語は諌める指揮官も、その軍人達を責める事はせず、むしろ今出た私語を利用して部下に檄を飛ばす。
「今の話を聞いたか！　我々の勝利は近い！　総員、最後の力を振り絞れ！」
『『っ！』』
指揮官の号令に軍人達は残っていた矢や弾薬をモンスターの群れに放って足止めに専念する。この時の軍人達の表情は疲労が色濃く出ていたが、それでも「生き残る事ができる」という希望の光が目に

宿っていた。
　そうしているうちに平原の戦場に軍人達が待ち望んでいた援軍が、戦いを終わらせる存在が現れた。
　現れたのは、背中に人型の上半身を生やした巨大な鋼鉄の大蛇。
　惑星イクスにおける最強の兵器ゴーレムトルーパー。
　この下半身が大蛇のゴーレムトルーパーは、軍人達が所属している国が保有しているゴーレムトルーパーの一体で、モンスターの群れが確認されたのと同時に出動要請の早馬を出していたのだがどうやら間に合ったようだ。
「よく来てくれた！」
「我らの守護神！」
「勝ったぞ！　俺達は勝ったんだ！」
　自軍のゴーレムトルーパーの到着を歓迎する軍人達。中にはモンスターの群れへの攻撃の手を止めて歓声を上げる軍人も多数いたが、だれもそんな彼らを責めたりしなかった。
　何故なら軍人達はもうすでに勝っていて、これ以上モンスターの群れに攻撃をして足止めをする必要がないのだから。
　軍人達の戦いの勝利条件は、相手がモンスターでも人間同士であっても基本は変わらず、その勝利条件とは「敵を倒す」ことではなく「自軍のゴーレムトルーパーが到着するまで持ち堪える」ことである。
　ゴーレムトルーパーは惑星イクスで最強の兵器で、ゴーレムトルーパーを倒せるのは同じゴーレムトルーパーか伝説に登場する超大型のモンスターくらいだ。その為、軍人達の出番はゴーレムトルーパーが戦場にやって来るまでで、ゴーレムトルーパーが戦場に現れたらそこから先の戦闘は惑星イクス最強の兵器にと任される。
　下半身が大蛇のゴーレムトルーパーが登場すると、モンスターの群れとの戦いはあっさりと終わった。
　猪に似た姿をしたモンスターの群れは、ゴーレムトルーパーが振るう武器によって完全にその体を砕かれ、あるいその巨体によって潰されて数分もしないうちに生きているモンスターはいなくなり、モンスターの血肉は戦場となった平原を赤く染めた。

軍人達の戦いと比べたらあまりにも短く、命のやり取りといった緊張感が感じられない、戦闘と言うよりは単なる作業のような終わり方。だがそれでも軍人達はモンスターの群れとの戦いが終わり、自分達が生きている事を隣にいる戦友達と共に喜び合う。

軍人達がゴーレムトルーパーが現れるまで戦線を維持して、ゴーレムトルーパーが戦場にやって来たらその先の戦闘、勝敗の行方は全てゴーレムトルーパーに委ねられる。

これが現代の惑星イクスでの戦いであった。

ピオンの目標

その日の夜、サイの家の夕食はいつもよりも豪勢であった。これは昨日、三年ぶりに王都から帰って来たサイを歓迎する為のものであり、献立も彼の好物ばかりである。

しかし今晩の食卓の主役はサイではなかった。

「どうぞ、ピオンちゃん。遠慮せず食べてね。お腹すいているんでしょ？」

「そうだぞ。沢山食べなさい」

「ありがとうございます。マスターのお母様、お父様。それではいただきます。……んー♪　物を食べるのって初めてですけど、食事って美味しいのですね♪」

「おー。ピオンさん、本当に美味しそうに食べるねー」

「……」

サイの両親に勧められた食事を至福の表情で食べるピオンにサーシャが感心したように言い、そんな自分の家族とホムンクルスの少女をサイは無言で見ていた。

最初にピオンを家に連れて来た時は家族全員に「彼女は一体誰だ？」とか「一体どこから連れて来た」とか「何で上着一枚しか着ていない？　もしかして乱暴を働いたのか!?」とか聞かれたサイだったが、今ではお互いを受け入れているホムンクルスの少女と家族の姿に安心した。

「それにしてもあの倉庫の奥にピオンちゃんが眠っていたとは……」

食事の途中でサイの父親が呟く。サイはピオンの事を説明する時に彼女がホムンクルスであることを事を初め、実家の倉庫が前文明の遺跡と繋がっている事や前文明の遺跡で起こった出来事等、全てを話していた。

「そうだねー。実家の倉庫の奥に前文明の遺跡があって？　しかもそこでホムンクルスのピオンさんと伝説のゴーレムトルーパーを見つけた？　まるで子供向けのお話みたいに都合のいい話だよねー」

父親の呟きにサーシャが同意する。しかし彼女や両親の顔にはピ

オンが人間ではなくホムンクルスであったり、サイがゴーレムトルーパーの操縦士になった事に対する驚きが見られなかった。
「でもよかったじゃない。そのお陰でサイにピオンちゃんっていう可愛いお嫁さんが来てくれたんだし。本当、ピオンちゃんを遺してくれたお祖父さんには感謝しなくちゃね」
「そうだな」
「うんうん。私ー、お姉ちゃんが欲しかったからー、ピオンさんがお兄ちゃんのお嫁さんに来てくれて嬉しいなー」
　嬉しそうな顔をしたサイの母親の言葉にサイの父親とサーシャが頷く。どうやらこの家族の中では「ピオンはサイの所有物、つまりは嫁」という認識がすでにできているらしく、そちらの方がピオンがホムンクルスだったりサイがゴーレムトルーパーを手に入れた事よりも重要のようだ。
「ちょ、ちょっと待ってくれ。確かに俺はピオンのマスターになったけど、それと結婚とはまた別だろう？」
「そうですね。私はとっても、非常に嬉しいのですが、あまり急なことを言ってはマスターも困ってしまいます」
　家族の急な話にサイが思わず否定しようとすると、それにピオンも同意する。
「……え？」
　自分が知っているピオンだったらこの機に結婚を本気で迫ってくると思っていたサイは、意外に思って彼女を見る。するとホムンクルスの少女は自分の主人である青年を見つめ返して笑顔を浮かべる。
「結婚という大切な事はもっと時間をかけてじっくり決めるべきだと私は思います。……ね♪　マスターもそう思いますよね♪」
「……」
　言っている言葉だけなら自分の主人の意思を尊重しているように思われるピオンだが、そんな彼女の顔には勝利を確信した笑みが浮かんでおり、それを見たサイは何とも言えない気持ちとなった。
　その後、ピオンを加えたサイ達家族は少々騒がしくも楽しい夕食をとり、食事が終わるとサイとピオンとサーシャの三人はサイの部屋で

談笑をしていた。
会話の内容は主にピオンが現代の一般常識やサイの思い出話をサイとサーシャに聞いて、二人がそれに答えるといった感じだったのだが、話の途中でピオンは突然怒声を上げた。
「はぁあっ!? 何ですかそれは!」
「……!? ど、どうしたんだ? ピオン?」
「何を怒っているのー?」
いきなり怒り出したピオンにサイとサーシャは訳が分からないと首を傾げるのだが、それに対してホムンクルスの少女は我慢ができないといった表情で口を開く。
「どうしたんだ、じゃありませんよ! 何なんですか、その軍学校の生徒達は! 何なんですか、そのアイリーンとかいう女は! 私のマスターにそんな無礼な真似をして! 絶対に許せません!」
ピオンの怒りの対象はここにはいないサイが通っていた軍学校の生徒達と幼馴染のアイリーンであった。話の話題がサイの軍学校の学校生活になり、彼が軍学校で幼馴染を含めた同級生達のほとんどから見下された話を聞いたホムンクルスの少女は怒りを抑える事ができなかった。
当人であるサイはそれほど気にしてはいないのだがピオンは怒りが収まらないようで、俯いて自分の主人見下した者達へのありったけの怒りの言葉を呟くと、やがて顔を上げて口を開く。
「……マスター。私、目標ができました」
「目標?」
「はい! 私、ピオンは全力でマスターを支援し、マスターを軍で出世させてみせます! マスターの希少な異能に私の補助、そしてドランノーガの武力があれば短期間で大きく出世する事も難しくありません! マスターを軍で出世させてマスターを見下した者達を見返す! それが私の目標です!」
「お、おお……」
「おー」
燃え上がるような真剣な表情で決意表明をするピオンにサイと

サーシャは気圧されるように声を漏らす。
「そうと決まれば早速明日から頑張りましょう、マスター！　出世に出世を重ねて軍内にマスターと私の帝国を築き上げるのです！」
「お、おう……」
　明日から一体何を頑張るのかは分からないが、ピオンのあまりの気迫にサイはそう答える事しかできず、背後で妹が「んー？　これは将来尻にしかれるかなー？」と呟いていたのだが聞こえなかった。

訓練開始

ピオンがサイの部屋で決意表明をしていた頃、夜の平原を一つの影が横切る。平原を横切るのは一匹の猪であったが、その猪は普通の猪ではなかった。

通常の猪の五倍はある巨体、真紅の色をした昆虫のような複眼、大きく裂けた口元から見える肉食の獣のような鋭い牙。

以上の特徴から分かるようにその猪は野生の猪ではなく猪の姿をしたモンスターであった。そのモンスターは昼間までは自分と同じ姿をしたモンスターの群れと行動を共にしていたのだが、足場が悪い箇所に足を取られて遅れてしまい、気がつけば群れからはぐれてしまったのだ。

猪の姿をしたモンスターが匂いを辿って群れの場所に辿り着いてもそこには群れの姿はなく、あるのは群れの血肉の匂いが染み込んだ大地があるだけだった。しばらくその場を探したが、やがて群れのモンスターはどこにもいないと判断したモンスターは単独で平原を移動する。

猪の姿をしたモンスターに明確な目的などない。ただ自分に、全てのモンスターに刻まれた本能に従ってより多くの生物を殺し、それを喰らうだけだ。

獲物を求めて猪の姿をしたモンスターは夜の平原をさ迷い行く。

X　X　X

朝、それも太陽が昇り始めて空もまだ暗い時間帯に、イーノ村から少し離れた草原にサイとピオンの二人はいた。

「さあ、訓練を開始しましょう！　マスター！」

「……訓練？」

やる気に満ちた表情で言うピオンであるが、サイの方はやる気に欠ける……というか、非常に眠たそうな表情をしていた。

「いきなり起こしたかと思えばこんな所まで連れて来て……。一体何の訓練をするんだよ？　……くぁ」

欠伸を噛み殺しながら言うサイにピオンは少し不機嫌そうな目を

向ける。
「もう！　マスターってばまだ寝惚けているのですか？　昨日私とマスターで誓ったではないですか？　軍で出世をしてマスターを見下してきた軍学校の生徒達と、恩知らずで礼儀知らずおまけに性格も悪い万死に値するアイリーンとかいう小娘を見返してやろうって。その為の訓練です！」
「……あれは、お前が一人で勝手に言っていた気がするが？」
　ピオンの言葉に少しずつ眠気が覚めてきたサイが半目になって呟く。あとホムンクルスの少女の中で、彼女はまだ一度も会っていない幼馴染の評価が最低であるのが感じられたが……気にしないことにした。
　サイの呟きが耳に入っていないピオンは、恍惚の表情となってここではない何処かを見ながら口を開く。
「私には見えます……。出世して軍の大幹部になったマスターと、そんなマスターを目の前にして顔を青くしているアイリーンに軍学校の生徒達の姿が。マスターが軍学校時代に差別された話をするとアイリーン達が土下座でその時の愚行を謝罪して、それでもマスターは許さず『土下座程度で許されると思っているのか？』と言って土下座をしているアイリーンの頭を踏みつける。そんな未来を想像すると……ゾクゾクしますよね？」
「しないよ！　土下座までして謝罪する相手の頭を踏むとか、俺はどんな極悪人だよ！」
　ピオンの口から聞かされた見返し……というかこれはもはや復讐と言える未来に思わず大声で否定する。
　確かにサイだって軍学校時代に見下された事を悔しく思っているし、幼馴染のアイリーンの態度には慣れたものだとは言えやはり少し怒りを感じてはいる。だがそれでもピオンが言うような復讐は望んではいなかった。
「えー？」
　復讐の未来を否定するサイに、ピオンは心から残念そうで、同時に何故復讐をしないのか理解できないといった表情を浮かべる。どう

やらこのホムンクルスの少女は、献身的に主人に尽くすのと同時に、自分と自分の主人の敵は絶対に許さず苛烈に攻め立てる性格のようである。

「ああもう、ほら。訓練をするんだろ？　さっさとやるぞ」

サイは話題を変えるべく訓練を始めるように言う。朝早く起こされた眠気はピオンとの刺激的すぎる会話のお陰で完全に消え去っていた。

いつの間にか……

「それで訓練って何をやるんだ？　……ドランノーガの操縦の訓練か？」

最後の台詞をどこか期待するように言うサイ。

昨日はゴーレムトルーパーのドランノーガを手に入れてその操縦席に座ったがその時間はごく僅か。いよいよ憧れのゴーレムトルーパーを本格的に動かせるとなれば、期待が高まるのは無理がなかった。

しかしそれに答えるピオンの言葉はサイの期待とは違っていた。

「いえ、違います。ドランノーガの操縦訓練もしますけど、その前にやることがあります」

「その前にやること？」

ピオンの言葉に少し落胆しながらサイが聞くとホムンクルスの少女が頷く。

「はい。マスターにはドランノーガに乗ってもらう前にご自身の身体能力を再確認してほしいのです」

「俺の、身体能力？」

何故今更そんなことを確認しないといけないのか、とサイが内心で首を傾げていると、ピオンは周囲を見回して近くにあった自分の背丈と同じくらいの大きさの大岩に目をつけた。

「これでいいでしょう。それではマスター、ちょっとこの岩を持ち上げてみてください」

「できるわけないだろ!?」

何でもないように無茶な事を言うピオンにサイが大声を上げる。

サイは実家の農作業と軍学校での訓練でそれなりの筋力をつけているが、それでも同年代と同じくらいしかなく、大岩を持ち上げるなんて不可能だ。そもそも彼でなくても普通の人間では一人で大岩を持ち上げる事はできず、できるとすれば自身の身体能力を強化する「超人化」の異能の持ち主ぐらいだろう。

ちなみにサイの幼馴染であるアイリーンは強力な「超人化」の異能

の持ち主で、それが両親を含めた周囲の人間が彼女に強く注意できず、彼女を増長させた原因の一つであった。
「大丈夫ですよ。今のマスターならこれぐらいの岩、なんて事もないですって。騙されたと思って試してみてください」
「今の俺ならってどういうことだよ？　……分かったよ」
ピオンの言葉の真意がいまいち分からないサイだったが、とりあえず彼女の言葉に従うことにすると、大岩の側で腰を下ろし両手で大岩を掴んだ。
「それじゃあ……え？」
自分ではこんな大岩を持ち上げるの無理だと証明して手早く終わらせようと考えていたサイは、両手に力を入れた瞬間、ある違和感を感じた。
両手から大岩の重さが伝わってくる。しかしそれは途方もなく重くて決して持ち上げられないといった感じではなく、まるで作物を詰め込んだかごを掴んでいるように感じられた。
「何だ……？　これならいけるか……っ!?」
違和感に戸惑いながらもサイは両腕と両足に力を込めて大岩を持ち上げようとする。すると大岩はあっさりと持ち上がり、青年は自分でも信じられないといった表情となる。
「……あれ？　これって……本当に？」
「おめでとうございます、マスター♪　だから言ったじゃないですか？　マスターならこれぐらいの岩、なんて事もないですって」
サイが呆然と自分が持ち上げている岩を見ていると頭上からピオンの声が聞こえてきた。見ればホムンクルスの少女はいつの間にかサイが持ち上げている大岩の上に腰掛けていた。
「ピオン？　お前、いつの間に……って!?」
大岩の上に腰掛けているピオンに話しかけようとしたサイは慌てて視線を横にそらした。今のピオンはサーシャが持っていたワンピースのような服を着ていて、今の体勢ではスカートの下が見えてしまいそうだったからだが彼女はそれを気にすることなく、自分の主人に笑いながら話しかける。

「あらあら♪　別に見てくれてもいいんですよ？　私の体はマスターの所有物なのですから、マスターが望むのならいくらでも鑑賞されても私は気にしませんよ。……ほら？　このように」
「止めろって！」
　幼さが残る顔に妖艶な笑みを浮かべてピオンは、サイが持ち上げている大岩の上で器用に立ち上がると自らスカートをまくりあげようとする。それを見てサイは思わず大声を上げて止めると、ホムンクルスの少女が落ちないようにゆっくりと大岩を地面に下ろし、慎重に視線を上げて彼女を見つめ説明を求めた。
「……それで？　どうしてどうして俺はこんな大岩を持ち上げることができたんだ？　言っとくが俺は生まれながらの怪力とか『超人化』の異能なんて持っていないぞ？」
「『超人化』の異能？　それが何なのかは分かりませんが、マスターは昨日ドランノーガの操縦席に座った時のことを覚えていますか？　あの時、ドランノーガはマスターを操縦士として登録しただけでなく、マスターの体にナノマシン……小さい機械を送り込んでマスターの体を強化したのです」
「……あの時か」
　再び大岩の上に腰掛けたピオンに言われてサイは初めてドランノーガに乗った時のことを思い出す。
　ドランノーガの操縦席に座ったサイは、操縦席から生えてきた針に首元を刺され、その直後に眩暈を覚えた。恐らくはその時にピオンの言う「強化」が行われたのだろう。
「ドランノーガを始めとするゴーレムトルーパーの操縦は操縦士に強い負担をかけます。ゆっくりと歩かせるだけでも操縦席の中は強い振動が絶え間無く起こり、普通の人間ではそれだけで内臓をシェイクされて死んでしまうでしょう。走らせたり、戦闘などの激しい動きをさせたら尚更です。ですからゴーレムトルーパーは操縦士が登録するとまず最初に、操縦の負担に耐えられるよう操縦士の体を強化するのです」
「そうなのか……」

ピオンの説明を受けたサイは思わず自分の手を見た。今まで見慣れていた自分の手が、今では別人のもののように見えた。
「はい。更にゴーレムトルーパーのナノマシンは操縦士の方を強化するだけでなく、長期間戦えるように成長因子を操作し、一定の年齢になったら歳をとらないようにしたり若返らせたりもできます。でも『不老』になっても『不死』になったわけじゃないのでそこは憶えておいてくださいね？」
「はいい!?」
まさか自分が知らないうちに体を強化された挙句、不死ではないが不老の存在になった事を知らされてサイは驚きの声を上げた。

辛かった思い出

「随分と驚かれてますけど、そんなに驚く事ですか？」
「……いや、普通は驚くだろ？」
　驚きの声を上げるサイの姿にピオンは首を傾げ、逆に青年はそんなホムンクルスの少女の様子に毒気を抜かれて冷静になった。
「ゴーレムトルーパーの操縦士は皆、ナノマシンの力で若い姿を保っているはずですよ？　マスターは他の操縦士を見た事はないんですか？」
「ないな」
　ピオンの疑問にサイは即答する。王都で行われる祭りや戦勝パレード等にゴーレムトルーパーとその操縦士が参加することはあるのだが、辺境のイーノ村にいた頃は縁の無い話であったし、軍学校時代に祭りに行った事はあるが、その時はあまりに大勢の人だかりに邪魔されてゴーレムトルーパーを遠目で見ることが精一杯であったのだ。
　それにもし間近でゴーレムトルーパーの操縦士を見る事ができたとしても、ピオンに聞かされるまで何も知らなかったサイは「ゴーレムトルーパーの操縦士は偶々若い人間ばかりだった」と思うだけで、不老の存在だとは気づかなかったであろう。
「そうですか。……まあ、それはいいです。ではマスター、次の身体能力の再確認をしましょうか？」
「ああ、そうだな」
　ピオンの指示に従ってサイは、ナノマシンによって強化された自分の体の性能を試していく。
　まずは決められた距離を往復して走って走力を、次に左右に跳躍して瞬発力を、最後にその場で飛んでみて跳躍力を試してみる。するとその全てで普通の人間を遥かに越える結果を出した。
　走れば馬よりも早い上にどれだけ走っても息が切れず、左右に跳躍すればあまりの速さに体が二つに分身したように見えて、その場に飛んで見れば大岩に腰掛けているピオンを見下ろせる高さまで飛ぶ事

ができた。それらの結果は、サイに自分の体が今までとは全くの別物であることを強く実感させた。
「これは……凄いな。これが強化された肉体ってやつか。『超人化』の異能が使える奴らってこんな気持ちだったのかな？」
「マスター。今までの会話からその『超人化』の異能とは自身の身体能力を強化する異能と考えていいですか？」
　自分の体を物珍しく見るサイにピオンが聞くと、青年は手を握ったり開いたりして自分の体の感覚を確かめながらホムンクルスの少女を見ずに答える。
「そうだよ。『超人化』の異能は色々な事に使える便利で人気のある異能で、俺もこの『超人化』の異能が欲しいと思っていたんだ」
「そうですか？　私はマスターの異空間創操能力……『倉庫』の異能の方がずっと便利だと思いますけど？」
「俺の『倉庫』の異能と『超人化』の異能、どっちが便利かは分からないけど、軍学校では戦闘に有利な『超人化』の異能の方が重宝されていたな。昨日話しただろ？　軍学校では戦闘に有利な異能が優遇されて俺みたいな戦闘に向かない異能は馬鹿にされるって？」
「……ええ」
　サイの言葉にピオンは昨日、彼が軍学校時代にどんな学生生活を送っていたかを聞いて怒ったのを思い出し、固い声で返事をした。
「戦闘訓練の時はいつも『超人化』の異能とか戦闘系の異能の持ち主にボッコボコにされて馬鹿にされていたな……」
　軍学校では生徒同士で格闘技の試合を行う戦闘訓練があり、サイはその戦闘訓練では常に最下位の成績だった。
　サイの「倉庫」の異能は確かに便利ではあるが戦闘には全く向かない異能だ。その為「超人化」の異能を始めとする戦闘系の異能を持つ生徒との試合では為す術もなく敗北し、一度も勝てた事がない。
　どの試合でもほぼ一撃で倒されて、あまりの痛みに地面に倒れて気絶したり悶絶するサイを周りの生徒達が笑い者にするなどいつもの事であった。それどころか「この試合ではサイが何秒で負ける」かを賭ける生徒も大勢いた。

幼馴染のアイリーンとも何度か試合をしたが、その度に彼女は「勝って当然」とう顔でサイを一切の手加減の無い一撃で倒し、試合が終わると倒れた彼を一瞥もせずに去って行った。
「あの頃は辛かったな……」
「……」
軍学校時代にあった戦闘訓練の記憶を遠い目をしながら話すサイの言葉をピオンは無言で聞いていた。
「ピオン？　どうし……た……？」
急に静かになったピオンを不思議に思ったサイは、そこでようやくホムンクルスの少女の方に顔を向けたのだが、彼女の顔を見て言葉を失った。
「……」
サイの話を聞いていたピオンは完全な無表情となっていた。元々作り物のように整っていた顔は、今では完全な仮面のように見えて、両目は限界まで開かれて瞳孔が開いていた。
大岩の上に腰掛けたまま微動だにしないピオンからは異様な威圧感が感じられ、サイは彼女の体から何やら黒い炎が噴き出ている幻覚が見えた。
「……タ―。……に……しょう……」
サイがピオンから感じる威圧感に思わず一歩後ずさると、ホムンクルスの少女は口を開いて何かを呟いた。
「え？　今何て言った？」
「マスター。ドランノーガに乗りましょう」
サイが聞き直すとピオンは今度ははっきり聞こえる声で言い直し、仮面のような無表情で言葉を続ける。
「身体能力の再検査を終了です。次の訓練はドランノーガの操縦訓練です。手始めにそのアイリーンの小娘と軍学校の生徒共をブッコロシニイキマショウ。ダイジョウブデス。ドランノーガヲアルカセテフミツブスダケデスカラ、カンタンカンタン♪」
「ピオン!?　ピオン！　落ち着け！　何だか途中から発音が変になっているぞ」

仮面のような無表情のまま物騒極まり無い事を言い始めたピオンを慌てて止めるサイ。どうやら今の青年の戦闘訓練の話を聞いて、ホムンクルスの少女の怒りが一気に限界を超えてしまったようだった。

王都の二人

フランメ王国の首都リードブルム。そこにあるとある建物の中を二人の女性が歩いていた。

建物の中を歩く女性達は、二人とも十代後半くらいで青を基調とした軍服の様な服を着ており、更には服の上からでも分かるくらいスタイルがよいと幾つか共通点があったが、顔立ちの印象は正反対であった。

二人の女性のうち前を歩く女性は、色素が薄くて銀色に見える金髪を腰まで垂らし、肌は健康的な小麦色に焼けており、大きな青色の瞳からは何か面白い事がないかを常に探している好奇心の光が見えた。

そして後ろを歩く女性は、光を反射して輝く見事な金髪を短く切り揃え、肌はまるで雪のように白く、その瞳は余計な物を映さずただ目の前を歩く女性の背中だけを見ている。

前を歩く女性が「動」だとすれば後ろを歩く女性は「静」。

正反対の印象を持つ二人の女性がしばらく建物の中を歩いていると、前を歩く女性が歩きながら後ろの女性に振り向いた。

「ごめんね、アイリーン？　わざわざついてきてもらって」

声をかけられた後ろを歩く金髪の女性、アイリーンは小さく首を横に振って真面目な口調で答える。

「いえ、気にしないで下さい。クリスナーガ様の行くところでしたら、どこへでもついていきます」

アイリーンの言葉に前を歩く銀色の髪の女性、クリスナーガは笑顔になって頷く。

「そう、ありがとう♪　まあ、この書類を理事長に渡すだけだからすぐに終わるって。それで面倒だった手続きを全て終了。私とアイリーンは来月からこの士官学校の生徒になれるってわけ」

クリスナーガは手に持っていた書類の入った封筒をアイリーンに見せる。二人が今いるのはフランメ王国の未来の将官を育成する士官学校で、今日彼女達は入学に必要な書類を提出する為にここに来ていた。

「……あの、クリスナーガ様？　書類を提出するだけならご実家の使用人に任せればよろしかったのでは？」
　アイリーンが思っていた疑問を口にする。クリスナーガはフランメ王国の王弟の娘で家には何人もの使用人がおり、アイリーンが言うように書類の提出など使用人に任せてしまえばいいのだが、彼女は何かを考えるように視線をさ迷わせてから口を開いた。
「んー、それでもよかったんだけどね？　せっかくだから一足先にこの下見をして、何か面白いものがないか探そうと思ったの。……迷惑だった？」
「い、いえ！　そんな事はありません！」
　クリスナーガの言葉にアイリーンは慌てて答えると、その場で深く頭を下げた。
「クリスナーガ様のされる事に異論などありません。……それとこうして私の援助をして頂いて士官学校に通えるようにしてくれた事、本当にありがとうございます」
「はい。どういたしまして」
　頭を下げたまま言うアイリーンの言葉にクリスナーガは満足気に頷いて言う。
「でも、私も慈善で貴女を援助した訳じゃないからね？　私が貴女を援助したのは、将来貴女には私の専属の部下になってもらう為。そこは分かっているわね？」
「はい！」
　アイリーンは顔を上げて答える。クリスナーガの部下になることは援助を受ける時から聞いており、何より王族である彼女の部下になれるという話はこちらとしても願ってもいない事であった。
「うむ♪」
「……あの？　クリスナーガ様はどうして私に声をかけてくれたのですか？　部下にするのなら……その、私よりも家柄が良くて腕が立つ者もいたのでは？」
　二度満足気に頷くクリスナーガに、アイリーンは以前より思っていた疑問を聞いてみた。

アイリーンの実家であるクライド家は、祖父の代で没落する前はフランメ王国でも知らぬ者がいない程の名門であったが、その「没落した理由」もフランメ王国で知らぬ者がいない程有名であった。そのせいか彼女は、成績が優秀な上に強力な「超人化」の異能が使える事と、祖父から貴族の心構えを教え込まれたお陰で軍学校で見下されることはなかったが、自分から彼女に話しかけようとする者は生徒教師を含めて皆無だった。

ちなみに同じ故郷から一緒に入学した辺境の男爵家の嫡男はアイリーンの方から無視している。

とにかくそんなアイリーンに（サイを除いて）唯一声をかけてくれたのが王族のクリスナーガであり、彼女は将来自分の部下になるという条件で援助をしてくれてこうして士官学校にも通えるようになったのだった。

「アイリーンに声をかけた理由？　それは貴女が同学年で一番『超人化』の異能が強かったのと……後は色々と『面白そう』だったからかな？」

「色々と面白そう……ですか？」

クリスナーガの言葉にアイリーンが首を傾げる。

「そうそう。ああ、それと面白そうと言えばアイリーンの幼馴染の男爵家嫡男……確か名前はライ？　いや、サイだっけ？　軍学校時代は色々あって顔も見れなかったけど、噂だけを聞くと彼も面白そうだったかな」

「サイ？　……ああ、『アレ』ですか」

クリスナーガの口から一応は幼馴染であるサイの名前が出るのだが、アイリーンは本気で彼の事を忘れかけていたらしく反応が遅れてしまった。その表情からはサイに対する興味など一切感じられなかった。

「アイリーンはそのサイの事をよく知っているでしょう？　どんな人なの？」

「一応は知っていますが……アレは特に見るところもない、ただ曾祖父の金で貴族の末席に加わった凡人です」

アイリーンはサイの事を「アレ」呼ばわりした挙句に見所のない凡人だと断言する。
「そうなの？」
「はい。同郷のよしみで軍学校に誘ってみましたが、成績は平凡で戦闘訓練は最下位。クリスナーガ様が見てみる価値もありません」
アイリーンがサイを誘ったのはそれが彼女の両親が軍学校への入学に出した条件で、それのお陰でサイの両親は彼だけでなく彼女の学費も肩代わりしたのだが、彼女は学費の肩代わりの事を知らなかった。以前両親が手紙でその事を書いていたのだが、幼馴染の予想通りアイリーンは両親の手紙などに全く目を通していなかったのだ。
アイリーンの中でサイは「一応幼馴染になる貴族の肩書きだけは持つ平民で、何かの縁だと思って一緒に軍学校に連れていってあげたが、何の才能もなく自分を落胆させた劣等生」という評価になっている。
もしこれをサイとアイリーンの両親……そしてピオンが知ったとしたら彼らがどのように思うかは想像に難くないだろう。
「それに軍人を目指す理由も『ゴーレムトルーパーに乗ってみたい』という子供みたいな者でしたし、あんなのが役に立つとは思えません」
サイが子供の頃に言っていた夢を思い出したアイリーンがそれを言うとクリスナーガは面白そうに笑った。
「あははっ。男の子だったら一度はゴーレムトルーパーに乗ってみたいと思うんだし、それは仕方がないんじゃない？　……でももし新しいゴーレムトルーパーでも見つけてそれに乗ってみたら、アイリーンの家もすぐに再興できるかもね？」
「……クリスナーガ様。そんなあり得ない妄想はあまり言わないでください」
クリスナーガが言うとアイリーンは面白くない冗談を聞いたと言う表情を浮かべて目をそらした。そしてこれは言いすぎたと思ったクリスナーガは謝罪の言葉を口にする。
「ああ、ゴメンゴメン。謝るからそんなに怒らないでよ」
「……いえ、気にしてません」

アイリーンはそれだけを言うと口を閉ざして、それでこの会話は終了となった。
確かにどこかの遺跡等から新しいゴーレムトルーパーを見つけてその操縦士にでもなれば、どの国も様々な好条件を出して迎え入れようとしてくれるだろう。没落した家を再興するのも可能だろうが、アイリーンはそんな都合の良い出来事なんて起きるはずがないと斬って捨てると忘れる事にした。

アイリーンは知らない。
辺境の地にある故郷に帰った幼馴染の青年の身に「そんな都合の良い出来事」が起きた事を。
もし以前よりサイを気にかけていて共に故郷に帰っていれば、もしかしたら新しいゴーレムトルーパーを手に入れる、万が一の機会があった事を。

二度目の搭乗

「それではマスター。訓練を再開しましょう」
「ああ、分かった」
　昼過ぎの草原でピオンが言い、それに返事をしながらサイは内心で安堵していた。
（ピオン……もう落ち着いたみたいだな）
　早朝での訓練の時にサイの軍学校時代の話を聞いて、無表情のまま黒い憤怒の炎を燃やすピオンを宥めるのは本当に大変であった。なんとかホムンクルスの少女を宥めた時には日が完全に昇っており、サイは一先ず彼女を家に連れ帰ると、朝食と休憩をとってから訓練を再開した。
「今からするのはドランノーガの操縦訓練です。まずは歩かせるなど基本動作から初めていきましょう」
「分かったよ」
　サイはピオンの言葉に頷いて異空間に収納しているドランノーガを呼び出そうとして……、
「そして最終的にはドランノーガでアイリーンを始めとする大した力も無いくせにマスターを馬鹿にした者共をブッコロシニイキマショウ。ドランノーガを見て絶望の表情を浮かべる痴れ者共を、原形が無くなるまで何度も何度もドランノーガの脚部で踏み潰して、そしてその血肉を見下して『ざまぁ』と嗤ってやりましょう」
　ホムンクルスの少女から出た物騒極まる発言に固まった。
　一応は落ち着きを取り戻したピオンであるが、どうやら彼女の中でアイリーンを始めとするサイを見下してきた軍学校の生徒達は生涯をかけて復讐をする対象となったようだ。
「……」
　ピオンが何かを期待するような目で見てくるが、サイはそれを無視してドランノーガを呼び出した。これ以上この会話を続けていると、このホムンクルスの少女がまた暴走する危険を感じたからだ。
　というか現時点で笑顔のままドランノーガを使った虐殺を勧めて

くるピオンが怖かった。怖すぎだった。
「冗談はいいから訓練を始めるぞ」
「むー。分かりましたよ……」
サイが内心の恐怖を悟られないようにできるだけいつも通りの表情を作って言うと、ピオンは若干拗ねた顔をするが素直に従ってくれた。その事に安心した青年はドランノーガに命令して操縦席がある下半身の竜の胸部装甲を展開させるが、操縦席の様子を見て首を傾げた。
「あれ？　この操縦席……昨日と違っていないか？」
昨日入ったドランノーガの操縦席は、四角形の空間の中に椅子が一つあるだけだったのだが、今日見ると一つしかなかった椅子が二つ横に並んであった。
「二つある椅子のうち、左側がマスターの席で、右側が私の席なんですよ」
昨日とは違う操縦席の様子にサイが首を傾げていると、彼の後ろに近づいてきたピオンが説明をする。
「ほら、昨日ドランノーガって私を食べた時に自己進化機能を発動させたじゃないですか？　その時にコックピットもこんな感じに進化したんです」
ピオンの説明でサイは、昨日ピオンを吸収したドランノーガが自己進化機能の効果で姿の一部を変化させたのを思い出す。だが変化したのは外見だけでなくコックピットの内部もだったらしい。
「成る程。そういうことか」
「納得していただいたところで早速乗ってみましょうか、マスター」
「そうだな」
サイが左側の椅子に座ると続いてピオンが右側の椅子に座る。すると前方の展開していた胸部装甲が閉まり、それと同時に四方の壁がドランノーガの外の景色を映し出した。
「これは……凄いな！」
操縦席の四方の壁が外の景色を映し出したのを見たサイは思わず声を上げて周囲を見回す。そんな彼にピオンが声をかける。

「マスター。前の画面を見てもらえませんか？」
「前の画面？　前の景色のことか？」
　ピオンに言われてサイは前方の壁が映し出しす景色に目を向ける。しばらく前の景色を見ていると、そこに見たこともない文字で書かれた文章が浮かび上がり消えていった。
「？　ピオン、今のは……？」
「まだです、マスター。まだ前を見ていてください」
　今の文章の事を聞こうとしたサイだったが、ピオンは静かだがいつになく真剣な声で前を見続けるようにと言う。そして彼女に言われるままに前を見ていると、また別のやはり見たこともない文字で書かれた文章が浮かび上がって消えていく。
　文章が現れては消える。そしてまた別の文章が現れてはまた消える。
　現れる文章の数は最初のうちは一つだったが次第に二つ三つと増えていき、それと同時に文章が消えて次の文章が現れるまでの間隔も少しずつ短くなっていく。気がつけば何百何千といった文章が高速で現れては消えるのを繰り返し、前方の景色は無数の文章によって埋め尽くされていた。
「……!?」
　その時のサイは何故か首を動かすどころか目を閉じることもできず、現れては消えていく何百何千……いや、何万何億といった文章を脳裏に刻み込まれていった。
「……！　……はぁっ！　はぁっ……！」
　文章が現れた時間は僅か数十秒なのだがサイにはもっと長い時間に感じられ、ようやく前方の景色に文章が現れるのが終わると、予想外に体力を消費したようで俯いて荒い息を吐く。そんな彼にピオンは労わるような優しい口調で声をかけた。
「お疲れ様です、マスター。これでドランノーガに関する知識の習得は完了しました」

一歩前進

「……何？」

ピオンの言葉にサイは数秒沈黙した後、顔を上げてそれだけを呟く。その顔には「何を言っているのか分からない」という内心が書かれていた。

「さっき前の画面に現れた文章の群は、ドランノーガの操作法や機能などの説明文だったんですよ。それを特殊な信号と一緒にして映し出すことでマスターの脳の記憶分野に……まあ、要するに今のマスターはドランノーガの関する知識を全て記憶しているという訳です」

サイに詳しく説明をしようとしたピオンだったが、途中で説明が長くなると思ったのか要点だけを告げた。しかし当の本人は実感が湧かないといった表情を浮かべる。

「ドランノーガの全てを知識を記憶……？　いきなりそんな事を言われてもな……」

「知識を呼び起こすのにはちょっとしたコツがあります。例えば今日は何をする予定だったとか、財布はどこにしまったのか、という風に思い出す感じです。試しに……そうですね『ドランノーガを動かすにはまず何をしたらいい？』と自分に問いかけるようにやってみてください」

「自分に問いかける……」

知識を頭の中に刻み込まれたといってもその知識をうまく思い出せないサイは、ピオンのアドバイスを実践してみることにする。

（ドランノーガを動かすにはどうしたらいい？　俺はまず何を……っ！）

ピオンのアドバイスを実践したサイの脳裏にドランノーガに関する知識が浮かび上がってくる。その知識の量はあまりにも膨大で、一度に膨大な量の知識を呼び起こしたせいか強い頭痛が起こった。

「うっ、く……！」

「マスター、大丈夫ですか？　落ち着いてください。……ほら、これでも触って」

サイが右手を額に当てて頭痛を堪えていると、席を立ったピオンが彼の空いている左手をとる。
すると次の瞬間、サイの左手から柔らかくて温かな感触が伝わってきた。
「……え？　なっ!?」
突然伝わってきた左手の感触にサイが自分の左手を見ると、そこには自分のたわわに実った二つ乳房の片方に青年の左手を押しつけるピオンの姿が。服の上からでも分かるピオンの胸の感触に、頭痛で苦しんでいたはずのサイの意識が一気に覚醒する。
「ピオン!?　おまっ！　お前、何をしているんだよ!?」
「何をって、マスターが情報の多さにパニック状態になっているようでしたので、ちょっとショック療法をと……。どうですか？　まだ頭痛はします？」
「……いや、もう大丈夫だ」
赤くなった顔を横に向けるサイにピオンが笑いながら聞いてくる。それに答えながら青年は、驚きのあまり確かに頭痛が吹き飛んだが、同時にせっかく呼び起こしたドランノーガの操縦法も吹き飛びそうになった、と心の中で小さく文句を言った。
「そうですか。それはよかったです。ではいよいよドランノーガを動かしてみましょうか？」
「分かったよ。分かったから早く座ってくれ。危ないだろ」
「は～い♪」
サイの言葉にピオンは訓練が順調に進んでいるためか楽しそうな声で答えて自分の席に座った。
「それではまずドランノーガを歩かせてみましょう」
「分かった」
サイはピオンに頷くと先程呼び起こしたドランノーガの操縦方法を実行しようとする。
「まず……肘掛けにあるこの球を触るんだったな？」
自分の脳に刻まれた知識に従ってサイは、自分が座っている椅子の左右の肘掛けにある球。その上に両手を置いた。

「それで自分がしたい事をこの球を通じてドランノーガに伝えたらその通りに動く、と……。それじゃあ前に歩け、ドランノーガ」
『……！』
　左右の肘掛けにある球に両手を置きながらサイが命令すると、ドランノーガの命令に従って右の脚部を前に出して一歩前進し、それによりサイ達がいる操縦席が大きく揺れた。
「おお……！　俺、動かした！　ドランノーガを、ゴーレムトルーパーを動かしたぞ！」
　今サイが行ったのはドランノーガを一歩前進させただけ。だが子供の頃からの憧れであったゴーレムトルーパー、ドランノーガを動かしたという事実に彼は子供のようにはしゃぐのであった。

現在製造中

「おめでとうございます、マスター♪」
サイがドランノーガを一歩前進させると、その隣でピオンが嬉しそうな笑みを浮かべて拍手をする。ゴーレムトルーパーを動かせた興奮でピオンのことを忘れていたサイは、彼女に祝われて照れくさそうな表情となり礼を言う。
「あ、ありがとう、ピオン。でもまだ一歩歩かせただけなんだがな」
顔を赤くしながら言うサイにピオンは首を横に振って答える。
「いえいえ。一歩歩かせただけで充分です。ゴーレムトルーパーの操縦は全て今のと同じ要領ですから後は適当に動かしているだけですぐに上達しますよ。……ですけど」
そこでピオンは一度言葉を切ると僅かに残念そうな顔をする。
「ここではあまりドランノーガを動かせそうにないですね」
「……ああ、そうだな」
ピオンの言葉にサイもその理由を気づいて頷く。
今いる草原がイーノ村から離れているとはいえ、ドランノーガのような巨大な機体を不用意に動かしていたら村民の誰かが気づくかもしれない。見たこともないゴーレムトルーパーがいつの間にか村の近くで動き回っていると知れたら村はパニックになるかもしれないし、それはサイも望むことではなかった。
「動かすのはこれで止めにしといて、次はドランノーガの武装などの再確認とその使い方を学びましょう。マスター、ドランノーガの図面を出してもらえませんか？」
「分かった」
ピオンに頷いてサイは頭の中でドランノーガに命令を送る。すると前方の景色を映し出している壁に三枚の画像、前と上と横から見たドランノーガの図面が現れる。
「ではまず……」
そこからピオンによるドランノーガの武装の解説が始まった。
ドランノーガの武装があるのは上半身の人型の両腕、下半身の竜の

前腕部に頭部の角。戦闘ではこれらの武装を使い、後は下半身の竜の前腕部と尻尾に牙で敵を殴ったり噛み砕いたりする。
一応サイはドランノーガの武装の知識も先程脳に刻み込まれたのだが、ピオンは再確認の意味も込めてこれらの武装の性能を解説して、どの様な場面で使うのかを丁寧にサイに教えていく。そしてその説明は非常に分かりやすいものであったが、ホムンクルスの少女は相変わらず自分の主人である青年に抱きついたままで、中々集中できずにいるサイであった。
「……ん？　なぁ、ピオン？　あれは何だっけ？」
そう言ってサイが指差したのは、ドランノーガの上半身の人型の後ろにある四角形の装置。それは昨日、このゴーレムトルーパーがピオンを吸収した直後に自己進化機能で作り出したものであったが、何の装置か思い出せなかった。
「もうお忘れですか？　あれはホムンクルスの体を製造して保管する為の装置です」
「ああ……。そういえばピオンがもし死んでしまったら、あそこから新しいピオンの体が作られるんだったな」
今のピオンはドランノーガの専用オペレーターで、死んでしまっても新しい体が作られる。その話を昨日、本人から聞かされたのを思い出してサイが一人頷いているとホムンクルスの少女が口を開く。
「それもありますけど、それだけじゃないんですよ、マスター？　あの装置が今製造しているのは私の予備の体だけじゃないんです」
「ピオンの体だけじゃない？」
「はい。マスターは私が保管されていた部屋に、私の他に三人のホムンクルスがいたのを覚えていますか？」
「ピオン以外のホムンクルス？　それも三人？　……もしかしてアレか？」
サイとピオンが初めて出会った前文明の遺跡の一室。そこには四つの保存カプセルがあり、その中の一つにこのホムンクルスの少女が保存されていて、他の三つにはミイラと化した三人のホムンクルスの遺体があった。

そして今ドランノーガは、その三人のホムンクルスの新しい体を、専用オペレーターの予備の体と一緒に製造しているのだとピオンは言う。
「でも……何でドランノーガがあのホムンクルスの体を作れるんだ？」
「マスター。よーく思い出してください。昨日、このドランノーガは私を吸収する前に何をしていました？」
「ピオンを吸収する前？　……ああ!?」
ピオンの言葉に何かを思い出したサイが思わず声を上げる。
昨日、ドランノーガはピオンを吸収する前に前文明の遺跡の一部、サイとピオンが初めて出会った一室の壁を破壊して、下半身の竜が部屋にあったホムンクルスの少女の体を保存していた保存カプセルを食べて吸収していた。だがその時に吸収したのはピオンのカプセルだけでなく、他の三つのカプセルも吸収していたようだ。
「あの時に……」
「はい。保存カプセルと一緒にあの三人のホムンクルスも吸収させました。完全にミイラ化していた為、体の製造にはもうしばらく時間がかかりますけど、体が製造されれば私と同じくマスターの補助をさせる予定です」
「そ、そうなんだ……」
いつになるかは分からないが、ピオンみたいなホムンクルスが三人増える事にサイが驚きを隠せないでいると、ピオンはそこに言葉を付け加える。
「ちなみにですが、今体を製造している三人。全員女性で私と負けず劣らずの巨乳の美人揃いみたいですね」
「っ!?　それは本当か!?」
これから増える予定のホムンクルスが全員巨乳の女性だと聞いてサイ……でなく巨乳好きの馬鹿はこれ以上なく真剣な表情となった。

勝ち組？

「嬉しいですか、マスター？」
「え？　いや、まぁ、そうだな……。巨乳の美人……じゃなくて、補助をしてくれるホムンクルスの巨……女性が増えるのは嬉しいな」
　現在ドランノーガが三人のホムンクルスの女性の体を製造しており、しかも三人とも巨乳の美人であると聞いて真剣な表情で大いに喜んでいたサイは、ピオンに言葉に慌てて答える。しかしどこまでも巨乳好きの馬鹿であるため本音が駄々漏れであった。
　そんな巨乳好きの馬鹿の発言を聞いてもピオンは嫌な顔を浮かべず、逆に楽しそうな表情を浮かべた。
「ふふっ♪　別に隠さなくてもいいですよ。マスターが大きな胸が大好きな方だってことはもう充分理解していますから……ね♪」
「……っ!?」
　ピオンはそう言うと席から立ち上がり、小さく跳んで自分の乳房を揺らせて見せる。それによりサイの視線は彼女の揺れる乳房に釘付けになってしまう。
「私はゴーレムトルーパーの操縦士であるマスターを補助し、負担を減らす為に作られました。それは今、体を製造されている三人のホムンクルスも同様です。ですから私達の体でマスターのストレスが少しでも減るのでしたら、どうぞ何時でも何処でも自由に私達の体を『使って』ください。……ただし」
　そこでピオンは言葉を区切ると、自分の乳房に目を奪われていたサイの顔を見つめる。その時の彼女は珍しくどこか拗ねているような表情を浮かべていた。
「あの三人のホムンクルスも、体が完成して起動すればドランノーガの専用オペレーターとしてマスターの補助をします。ですがあくまで私が『メイン』です。マスターが直接起動させてマスター登録を行ったのは私だけです。それだけは忘れないでくださいね？」
「アッ、ハイ……」
　拗ねた顔をするピオンの言葉に、サイは目の前の魅力的な乳房のこ

とも忘れて彼女の顔を見ながら頷いた。
（あ、あれ？　ピオンってば俺に嫉妬してくれているの？　これから増える三人のホムンクルスに対抗心燃やしてる？　人生の春が俺にやって来たのか……って、んん？）
ピオンの言葉と態度にサイが思わず胸を高鳴らせていると、彼はふとあることに気付いた。
（……もしかして俺って、現時点でかなりの勝ち組なんじゃないか？）
サイは現在自分の周りにあるものを確認してみる。
まず今乗っているのは、惑星イクスで「最強」とされている超強力な兵器、ゴーレムトルーパーのドランノーガ。
次に我が身に宿っているのは、戦闘には向かないがそれ以外の分野では大きく活躍できる便利な超能力、「倉庫」の異能。
そして自分のすぐそばにいるのは、前文明の知識を持ち自分にどこまでも尽くしてくれる利口で美人な従者、ホムンクルスのピオン。
そのどれもが使い方次第ではいくらでも金や権力を生み出せる。
力、才能、知識。気がつけば、これからの人生を成功へと導いてくれる要素が全て、サイの手元に揃っていた。
（うん。やっぱり俺って、人生の勝ち組になっているよね。……今更だけど軍に入る意味ってあるのかな？）
ドランノーガの力があればイーノ村を盗賊やモンスターから守るには充分すぎるし、近くの街で傭兵のようなことだってできる。
「倉庫」の異能を使えば運送から土木工事まで働き口なんていくらでも見つかる。
前文明の知識を持っ博識なピオンならサイでは思いつかないドランノーガと「倉庫」の異能の利用法を考えてくれるだろうし、彼が望めば人生の伴侶になってくれるだろう。
サイが軍人を目指したのは、安定した収入を得て家族を楽させたい為と、憧れであるゴーレムトルーパーの近くにいたい為、後は魅力的な異性との出会いを期待した為である。しかしそのほとんどが叶った今、彼の中で軍に入ろうとする意志が薄れつつあった。
「どうかしましたか、マスター？」

そのようなことを考えているといつもの表情に戻ったピオンがサイを見下ろしていた。
「いや、何でもないよ。それで今日の訓練はこれで終わりなのか？」
サイは胸の内に起こった疑問を一旦保留にしてピオンに話しかけると、彼女は首を横に振って答える。
「いえいえ。まだやるべき訓練は沢山ありますよ。次は……」
X　X　X
サイとピオンがドランノーガの操縦訓練を始める十数時間前。夜の平原をさ迷い行く猪の姿をしたモンスターは、ついに人が大勢住む街を見つけた。
人が住む街は猪の姿をしたモンスターがいる場所よりだいぶ離れているのだが、その尋常ではない嗅覚で人の匂いを嗅ぎ付けたモンスターは街の方へまっすぐと進む。
猪の姿をしたモンスターは知らないことだが、その街には昼間にモンスターの仲間である群れを退治した軍人達とゴーレムトルーパーがいた。しかし昼間の勝利の事もあって、街の人間達は警備役の軍人でさえも大きく気が緩んでいた。
ここに猪の姿をしたモンスターが現れれば、例えモンスターが一匹だけでも街は大きな騒ぎとなるだろう。最悪、街の門を突破されて街に大きな被害が出る事も有り得る。
だが、最後には猪の姿をしたモンスターは軍人達に囲まれて、動きを封じられたところをゴーレムトルーパーの攻撃によって殺されてしまうだろう。そうして街にいくらかの被害を出すが、今度こそ猪の姿をしたモンスター達による脅威は無くなる筈である。
……そう。このままいけばそうなる筈だった。
運命の悪戯というのは、いついかなる時でも、どんな相手にでも起こるものらしい。
人が住む街へと向かう猪の姿をしたモンスターの前を小さな影が横切る。
影の正体は一匹の小さな獣であった。恐らくはモンスターが目指している街からここまで迷い出た小さな害獣。

猪の姿をしたモンスターは「より多くの命を殺す」というモンスターの本能に加えて、ここまで何も食べずに移動していたせいで空腹であったことにより、その小さな獣を追い求めた。モンスターは逃げる小さな獣をすぐに捕まえて一口で食べると、再び人が住む街へと向かう。

……そしてそれから十数時間後、この平原に悪夢のような「災害」が発生した。

飛行訓練

「次は飛行訓練をしてみましょうか」

「……え？　ドランノーガって飛べるの？」

飛行訓練。

ピオンの口から出た言葉に、サイがしばらく黙ってから聞くと、ホムンクルスの少女は少し怒ったような表情となる。

「もう！　飛べるに決まっているじゃないですか！　マスターはドランノーガの知識を持っているのですからご存知の筈でしょう？」

「いや、まぁな……」

ピオンが言う通り、サイはドランノーガに関する知識を刻み込まれている為、この機体が飛べることを知っていた。それにドランノーガの下半身の竜の背中、上半身の人型の腰辺りに一対の翼があるのも実際に見ている。

だがそれでもサイの表情は優れなかった。

「でも俺、どうしても空を飛ぶドランノーガの姿を想像できないんだよ」

サイとピオンが乗っているドランノーガは、遠目から見ても一目で分かるくらい重武装かつ重装甲の機体である。それ故に当然総重量は非常に重く、知識では飛行は可能であると知っていてもサイはその知識を信用できないでいた。

そしてサイにはドランノーガが空を飛ぶ姿を想像できない理由がもう一つあった。

「というか空を飛ぶゴーレムトルーパーなんて聞いたこともないぞ？」

サイも現存する全てのゴーレムトルーパーを知っているわけではないが、それでも空を飛ぶゴーレムトルーパーなんて見たことも聞いたこともなかった。彼の中ではゴーレムトルーパーは地上を駆ける兵器であり、そういった固定観念が飛行訓練を躊躇わせていた。

「空を飛ぶゴーレムトルーパーなんて知らない？　この時代のゴーレ

ムトルーパーは総じて飛行機能を失っているのですか？　……まあいいです。とにかく大丈夫ですって、マスター。それに空でしたら周囲に気付かれる心配は少ないですからね」
「それはそうだけど……。だけど一歩歩かせた次がいきなり飛行訓練って……その、色々と順序を無視していないか？」
　ピオンの言っていることは理解できるのだが、それでもサイは中々頷こうとせず、よく見れば顔色も少し悪くなっていた。恐らくは訓練中に墜落をした等の最悪の事態を想像しているのだろう。
「……ふむ」
　ピオンはすっかり腰が引けているサイをしばらく見たあと、何かを思いついた表情になって口を開いた。
「ピオン？」
「マスター、ちょっと失礼しますね♪」
　そう言ってピオンがサイの前まで立つと、そのまま彼女は突然の行動に驚くサイの頭に両手をそえる。
「え？　な……？」
「とう♪」
　むにゅん♪
「なっ!?」
　サイの頭に両手をそえたピオンは、そのまま彼の顔に自分の乳房を押し付ける。
「まずは右ー♪　次は左ー♪」
　むにゅ♪　むにゅ♪
　楽しげな声と共にピオンはサイの顔に右の乳房を押し付け、その後は続いて左の乳房を押し付ける。
「……!?」
「また右ー♪　また左ー♪」
　むにゅ♪　むにゅ♪
「……!?」
　ピオンはゆっくりとした動きで再びサイの顔に自分の右の乳房を、左の乳房をに押し付ける。そしてこれを二度三度と繰り返してホム

ンクルスの少女は体を離した。
「はい、おーしまい♪」
「……！　……！　……！」
　顔を赤くして言葉を無くすサイにピオンは妖艶な笑みを向ける。
「マスター？　今日の訓練はこれで終わりですからもう少し頑張りましょうね？　これが終わったらさっきのをマスターが満足するまでたっぷりしてあげますから……ね？」
「飛行訓練を開始するぞ。早く席につけ、ピオン」
　妖艶な笑みを浮かべているピオンに無駄に凛々しい表情で言うサイ……ではなくて巨乳好きの馬鹿。その表情からは飛行訓練に対する恐れなど微塵も感じられなかった。
「はい♪　ではお願いしますね、マスター♪」
　ピオンは乗り気になった自分の主人を見て満足気に頷くと自分の席に座り、それを横目で確認したサイはドランノーガに命令を出す。
「ドランノーガ、飛べ！」
『……！』
　命令を受けたドランノーガは僅かに身を屈めると、脚部にある噴出口から炎を噴き出しながら大きく跳躍をする。そしてそのまま尻尾にある噴出口からも炎を噴き出して鋼鉄の巨像は空を飛んだ。
「飛んだ……。飛んでいる……」
　操縦席の中から空の様子を見て呆然と呟くサイに、ピオンは笑みを浮かべて話しかける。
「だから言ったでしょう、マスター？　ドランノーガは飛べるって。でも注意してくださいね？　ドランノーガはずっと飛べるってわけじゃないので、降りても大丈夫な場所があるか地上の確認は忘れずに。もし人里の近くに降りてしまったら大騒ぎになってしまいますから」
　ピオンがドランノーガの飛行時の注意点を述べる。
　ドランノーガは、脚部と尻尾の噴出口から炎を噴き出しながら跳躍する事で高度と推進力を得た後、翼から力場を発生させて長時間の滑空飛行を可能とする。しかしある程度飛ぶと高度が維持できなくな

り、一度地上に降りる必要があるのだ。
「ああ。分かっている」
　この辺りの知識はサイの脳にも刻み込まれており、サイはピオンに頷いてみせた後、近くにある山脈の向こうを見た。山脈の向こうは隣国の領地で一度も行ったことはなかったのだが、ドランノーガという移動力を得た今、急に好奇心が刺激された。
「ピオン。あの山脈の向こうに行ってもいいかな？」
「マスターのご自由に。ただし人に見つからないようにしてくださいね？」
「了解。それじゃあ行くか」
　サイはドランノーガを操作して山脈の向こう側、フランメ王国の隣国の空へと向かった。

地上の異変

「凄いな……。空の上からの景色ってこんなのなんだ」
　飛行訓練を開始してからしばらくして空を飛ぶのに馴れたサイは周囲の景色を眺めながら呟いた。その顔は興奮によって頬が僅かに赤くなっていて、それを微笑ましく見ていたピオンが話しかける。
「マスター？　空を飛ぶドランノーガはお気に入りましたか？」
「そうだな。空を飛ぶなんて最初は怖くて仕方がなかったけど、今はとても楽しいよ。景色はいいし、速いし、コイツとだったら何処にでも行けそうだ……」
　ピオンに答えるサイは非常に上機嫌であった。憧れであったゴーレムトルーパーに乗って操縦できただけでなく、空を飛ぶというこの時代では考えられない出来事を体験すれば、興奮しないほうが無理な話だ。
「王都からイーノ村に帰る時は徒歩と馬車で十日くらいかかったけど、ドランノーガだったら一日もあれば王都に行けるかもな」
「では行きましょうか」
　サイが王都からイーノ村に帰るまでの道のりを思い出しながら呟くと、ピオンが王都に行くことを提案してきた。
「行くって、王都に？　一体何をしに？」
「決まっているじゃないですか？　……アイリーンを始めとするあいつらをブッコロシニイクンデスヨ」
「……!?」
　にこやかな笑顔から一転して能面のような無表情となったピオンの言葉に、サイは思わず体ごと視線を彼女の方に向けた。
　今ピオンが言った「アイリーンを初めとするあいつら」とはまず間違いなく、軍学校時代にサイを見下してきたアイリーンを含めた軍学校の生徒達だろう。どうやらホムンクルスの少女は、サイが口にした「王都」という単語に反応して彼女達への怒りを再燃させたらしい。
「あ、あの……ピオン、さん？　確かに軍学校は王都にありますけど、俺と同じ時期にいた生徒はもう卒業していて……その、王都にいると

は限りませんよ？」
「ええ、それは分かっています。ですけどあのアイリーンのクソ女は確実にオウトニイマスヨネ？」
「……！」
思わず敬語になりつつも、何とかピオンを落ち着かせようとするサイであったが、静かな怒りを込めた彼女の言葉に何も言えなくなった。
「……」
「……なんてね♪　冗談ですよ、マスター♪」
落ち着かせるための言葉が思い浮かばず、サイが顔中に大粒の汗をいくつも流しながらピオンの顔を凝視していると、ピオンは能面のような無表情を笑顔に変えてそう言った。
「え？」
いきなり無表情から笑顔となったピオンは、呆けた顔で自分を見てくるサイに笑いながら言う。
「安心してください。マスターが復讐を強く望んでいないことは充分理解しています。私個人としてはマスターを愚弄したアイリーンを初めとする無礼者どもを古今東西のあらゆる拷問方法でじっくりと丁寧に痛め付け、ゆっくりと時間をかけて処刑したいのですが、マスターの望まないことをする気はありません。だから安心してくださいね♪」
「そ、そうか……。それならよかったんだ。はは、ははは……」
笑顔で言うピオンに対してサイも笑ってみせるが、内心では全く安心できておらず、その笑みは引きつっていた。
何故ならピオンは口元と口調は笑っているもののその目は全く笑っておらず、アイリーンを始めとするこの場にいない者達への最早殺意と言っても過言ではないドス黒い怒りで濁っていた。それを見て安心なんてできる筈もなく、むしろ不安と恐怖が増すばかりであった。
もしサイがアイリーンを始めとする軍学校時代に自分を差別してきた者達への復讐を望めば、ピオンは躊躇うこともなく先程言った

「拷問」や「処刑」といった行為を行うだろう。だが今の所は行動に移さず一応大人しくするそうなので、サイはこれ以上この話題に触れない事にした。
　触らぬ神に祟りなし。下手に藪をつついて蛇を……この場合は自分には噛みつかないが他人には容赦なく噛みつく毒蛇を出す趣味はサイにはなかった。
「え～と……。それじゃあ、飛行訓練はこれくらいにしてそろそろ帰る……うわっ!?」
「きゃっ！」
　サイが飛行訓練を終えて帰る事を提案しようとした時、ドランノーガの機体が大きく傾いて操縦席に振動が起こった。どうやらさっきまでの会話でピオンに気を取られすぎて操縦がおろそかになりバランスを崩してしまったようだ。
「もう！　マスターってば、気を抜きすぎですよ？」
（俺か!?　これって俺が悪いのか!?　お前が変な事を言わなかったこうならないですんだんじゃないのか!?）
　わざとらしく頬を膨らませて少し起こった顔をするピオンに、サイは内心で盛大に抗議の声を上げる。しかし青年は、そんな心の声を表に出す事なくドランノーガの操縦に意識を集中させる。
「……駄目だ。高度が維持できない。どこか着地できる場所は……ん？」
「マスター？　どうかしましたか？」
「……なぁ、ピオン？　あれは一体何だ？」
　バランスを崩してしまったせいで高度を維持できなくなったドランノーガを着地させようと、サイが着地できる場所を探していると彼の目にあるものが映った。
　それは人が住む街と、その街へと向かって走る黒い影の群れであった。

炎、後に竜騎士

それは突然の事であった。

正午を少し過ぎた頃、街の見張り台よりモンスターや盗賊などの敵の襲撃を知らせる緊急時用の鐘が鳴り響く。緊急事態を告げる鐘の音を聞いて凍りつく街の住民達が次に聞いたのは、街の警備隊によるモンスターの群れがこちらに向かってきているという凶報。

昨日に続いて今日もまた街がモンスターの襲撃を受けた事実に、街の人達は戸惑い恐怖しながらも自分達がすべき行動をとる。

一般の市民は最低限の荷物を持って家族の手を取り避難場所に移動し、警備隊は避難が少しでも早く完了するように市民を誘導する。ちなみにこの時、警備隊は人手の全てを避難誘導に回しており、こちらに近づいてきているモンスターの迎撃は、すでに街の外に出撃している一機のゴーレムトルーパーに全てを託していた。

街の外にいるのは人型の上半身と大蛇の下半身を持つ、大蛇に乗った騎士のような外見のゴーレムトルーパー。

昨日、この街を襲撃しようとしたモンスターの群れを退治した惑星イクスの最強兵器は、今日もまたモンスターの群れを退治しようと出撃したのだが、そこで大蛇に乗った騎士のゴーレムトルーパーの操縦士は信じられないものを見た。

「な、何だあれは……？」

大蛇に乗った騎士のゴーレムトルーパーの操縦席で、操縦士は目の前の光景を見て思わず呟く。

操縦士の視線の先にあるのは、地平線を埋め尽くさんばかりの何百何千というモンスターの群れ。そしてその群れのモンスターは、先日退治した猪の姿をしたモンスターであった。

「あれは昨日の……!?　まさか昨日退治したのはあの大群からはぐれた一部だったというのか？　いや、しかし、それはない筈だ……」

操縦士は思わず口に出た自分の言葉をすぐさま否定する。

あんな何百何千のモンスターの大群がいれば人目につかない筈がない。国中から目撃情報が集まり、この大蛇に乗った騎士のゴーレム

トルーパーを含めた自国にある三機のゴーレムトルーパー全てを投入して討伐に乗り出す筈だ。
「だが、それではあのモンスターの大群は何処から……っ!?」
疑問を口にした操縦士は、その直後にモンスターの大群が現れた「答え」を見つけた。
操縦士がその「異変」に気付いたのは単なる偶然だった。たまたま目に止まった大群の先頭を走るモンスターの一匹が動きを止め、動きを止めた次の瞬間に腹部が膨れ上がって破裂して、腹部から小柄のモンスターが数匹産まれ出たのだ。
産まれ出たモンスター達は、腹部が破裂して死亡した自分達の親であるモンスターの血肉を喰らい、瞬く間に周りと同じくらいの体の大きさに成長する。そして一分に満たない時間で親のモンスターの血肉を喰らい尽くし成長したモンスター達は、周りの仲間と同じ方向……つまりこの街の方へと走り出す。
一度気づいてから見てみれば、大群のいたる所で同じ出来事が起こっていた。
走り続けている内に子供が宿り、腹の中に子供を宿したモンスターは自分の命と引き換えに子供を産み、産まれた子供達は親の血肉を喰らい尽くして成長する。そしてこうして産まれた子供達もまたすぐに親と同じ運命を辿る。
非常におぞましく、そして高速の自主繁殖。自主繁殖を繰り返して数を増やしながらこちらに向かってくるモンスターの大群に、操縦士は思わず吐き気を覚えて口元に手を当てた。
「う……！　ああやって数を増やしていたのか……！」
操縦士は吐き気を堪えながらも闘志を燃やした目でモンスターの大群を睨みつける。
あのモンスターの大群は危険だ。ここで退治しておかないと、最悪この国の全てを飲み込む災害となってしまうだろう。
そして今モンスターの大群を退治できるのは自分しかいない。そう自分に言い聞かせた操縦士はゴーレムトルーパーを操作してモンスターの大群へと突撃した。

「おおおっ！」
『……！』
操縦士の気合のこもった雄叫びに応えるかのように、大蛇に乗った騎士のゴーレムトルーパーは上半身の人型が持つ槍、または下半身の大蛇の尾を力強く振るう。それによってモンスターの大群は、槍か尾が振るわれる度に十匹単位で吹き飛ばされていく。
モンスターの大群も大蛇に乗った騎士のゴーレムトルーパーに反撃をするが、精々が装甲に軽いかすり傷やへこみをつける程度で、ゴーレムトルーパーは気にする事なく大群のモンスター達を時には切り裂いて貫き、時には薙ぎ払って押し潰していく。そして死んだモンスターからは子供が産まれ出る様子がなく、それに気付いた操縦士は勝機を見出した気がした。
「これなら……いけるか!?」
叫びながら操縦士は攻撃の手を更に強める。
モンスターの大群の攻撃はゴーレムトルーパーに全く通じず、逆にゴーレムトルーパーが一度攻撃すれば何十匹ものモンスターが倒れて、死んだモンスターからは新たなモンスターが産まれ出る心配もない。これだけを見れば大蛇に乗った騎士のゴーレムトルーパーの方が有利に見えるだろう。
実際、最初の内は大蛇に乗った騎士のゴーレムトルーパーが一方的にモンスターの大群を屠っていたのだが、時間が経っていくと戦況は逆にモンスターの大群の方が有利になっていった。
「く……！　いくら殺しても減らない……。いや、むしろ増えている!?」
操縦士はいくら屠っても一向に数が減らず、それどころかむしろ数が増えていくモンスターの大群を見て歯噛みする。
モンスターの大群はただでさえ最初から何百何千という数がいた上に、大蛇に乗った騎士のゴーレムトルーパーが一度の攻撃で何十匹以上のモンスターを倒しても、モンスターの大群はそれ以上速さで新たなモンスターを生み出すのだ。
当然、大蛇に乗った騎士のゴーレムトルーパーだけではモンスター

の大群の対処が追いつかなくなっていき、その隙を突いて十数匹のモンスターがゴーレムトルーパーの横をすり抜けた。
「っ!? しまった!」
横をすり抜けて行った十数匹のモンスターを見て操縦士が焦った声を出す。大蛇に乗った騎士のゴーレムトルーパーは、モンスターの大群の大部分を相手にしていてこの場を動くことができず、もしこの場を動いたらより多くのモンスターが街に向かってしまうだろう。
もはやあの十数匹のモンスターが街を襲うのは止められない。
街の一般市民の避難は完了したのか? 街にいる警備隊はどれだけモンスターの足止めができる? 警備隊が戦っている間にこのモンスターの群れを退治できるか?
操縦士がモンスターの大群と戦いながら焦った頭でそんな事を考えていたその時、突然空から炎が降ってきた。空から降ってきた炎は、街へと向かっていた十数匹のモンスターを一瞬で焼き尽くして灰にする。
「……何?」
いきなりの出来事に操縦士、そしてモンスターの大群までもが思わず動きを止めると、次は空から巨大な影が降ってきた。
炎に続いて空から降ってきたのは、人型の上半身と背中に翼を生やした竜の下半身を持つ、竜に乗った騎士のような外見のゴーレムトルーパーであった。

戦闘開始前に……

「マスター、よろしかったのですか？」

空から降ってきた竜に乗った騎士のゴーレムトルーパー、ドランノーガの操縦席でピオンは自分の隣に座っているサイに話しかける。

「何がだ、ピオン？」

ピオンの言葉の意味を理解していないサイが聞き返すとホムンクルスの少女が説明をする。

「あのゴーレムトルーパーの前でドランノーガの姿を見せたことです。ゴーレムトルーパーに乗って無断で隣国にやって来た事が分かれば、最悪侵略行為をしに来たと思われますよ？」

自分と同じ存在でしか倒される事がない惑星イクス最強の兵器ゴーレムトルーパーは単騎で都市を壊滅させるだけの力を持つ。その為、自国のものではない正体不明のゴーレムトルーパーが現れたら今ピオンが言った通り、そこにいる人間は侵略行為をしに来たのではないかと警戒するだろう。

そして加えて言えば、ゴーレムトルーパーの操縦士はどの国でもほぼ間違いなく重要な地位にいる存在だ。あの大蛇に乗った騎士のゴーレムトルーパーの前でドランノーガを見せた以上、ドランノーガの存在はこの国に知れ渡り、ドランノーガの操縦士であるサイがフランメ王国に所属していると分かると、フランメ王国が侵略行為を行なってきたのではないかと言う者も出るかもしれない。

「っ！　……だけど、こんなの無視できるはずないだろ？」

ピオンに説明されてサイは、自分がとった行動がどのような結果を生むか理解するが、それでも反論する。

飛行訓練中にバランスを崩してどこか着地できる場所がないか探していたサイは、街を襲撃しようとしているモンスターの大群を見つけると、考えるより先にその場にドランノーガを移動させた。その後、大蛇に乗った騎士のゴーレムトルーパーの横をすり抜けて街に向かおうとする十数匹のモンスターをドランノーガの武装を使って焼き払い今に至る。

ピオンが言っている事も理解できるのだが、サイは自分のとった行動が間違っているとは思っていなかった。
「ここで無視なんかしたらあの街はモンスターに襲われていたし、このまま放っていたらイーノ村にもあのモンスターが来るかもしれないだろ？」
（確かにマスターのご家族がいるイーノ村は守るべきですけど、あの街まで守る必要はないのでは？）
サイの言葉を聞きながらピオンは心の中でそう呟いた。
ピオンは自分の主人であるサイと彼が心を許した周辺の人間達には深い愛情を持つが、それ以外の人間は必要であればためらう事なく切り捨てる非情さを持っていた。そんなホムンクルスの少女には、やはりドランノーガの姿を見せてまで街を守る理由が見出せなかった。
（でも、もう姿を見せてしまいましたし、ここからマスターの行動を助けていくのができる従者、そして伴侶というものですよね）
気持ちを切り替えたピオンは、サイがとった行動をどうすれば彼の有利に働くようになるのかを考える。
「そうですね。では折角ですから、戦闘訓練も兼ねて私達だけであのモンスターを退治しちゃいましょう。ドランノーガでしたらあの程度のモンスター、あれの倍の数がいても余裕ですし、ドランノーガ一機だけでモンスターの大群を倒したらマスターの名声を高める材料になるでしょう」
「分かった。やってみる……ん？　今『私達だけ』とか『ドランノーガ一機だけ』とか言わなかったか？」
ピオンの言葉に頷いてドランノーガを動かそうとするサイだったが、返事をして数秒遅れてホムンクルスの少女の言葉に気になる点があるのに気付いた。
「ええ、言いましたよ。ですから先ずは……マスター？　ちょっとだけドランノーガの操縦権を渡してくれませんか？」
「え？　ああ、いいけど……？」
サイが操縦権を隣の席に移すと、ピオンは自分の席の肘掛けにある球体を握り、ドランノーガに命令を出す。

「では、行きますよー♪」
『……！』
ピオンの命令を受けたドランノーガは、脚部と尻尾の噴出口から炎を噴き出して高速で前方に飛び出した。最初は遠くにいる為小さく見えていたモンスターの大群と、それと戦っている大蛇に乗った騎士のゴーレムトルーパーの姿が距離が近くなり大きく見えてきたところで突然、目の前の光景が高速で左へと移動した。
「……っ!?」
突然目の前の光景が高速で左へと移動してそれと同時に体の右からの力を感じたサイは、かろうじてピオンがドランノーガの機体を右へ高速で回転させたのを理解したが、何故彼女がそんな事をしたのか理解できなかった。そして回転が終わり視界が元に戻ると、そこには先程まで戦っていた大蛇に乗った騎士のゴーレムトルーパーの姿がなく……。

大蛇に乗った騎士のゴーレムトルーパーは、ドランノーガの右方で宙を舞っていた。

戦闘開始

「……？　……!?」

最初、サイは何が起こったのか分からなかった。ドランノーガの操縦をしていたピオンが機体を横に回転させたかと思えば、目の前にいたはずの大蛇に乗った騎士のゴーレムトルーパーがいなくなり、右の視界の端で宙を舞う巨大な影を捉えた時は思わず自分の目を疑った。

宙を舞う巨大な影……大蛇に乗った騎士のゴーレムトルーパーが空を飛んでいた時間はほんの数秒だけ。しかしサイにはそれが非常に長い時間のように感じられた。

大蛇に乗った騎士のゴーレムトルーパーは地面に激突するとあまりの勢いに二度跳ね飛び、地面に倒れるとそのまま動かなくなった。その姿を見てようやくサイは事態を把握した。

ピオンに操縦されたドランノーガが、その尻尾で大蛇に乗った騎士のゴーレムトルーパーを横から薙ぎ払い、遥か遠くまで吹き飛ばして戦闘不能にしたのだ。

「……えっ？　ちょっ……！　こ……れ……」

「うん♪　上手くいいのが当たりましたね。何気に私もドランノーガを動かすのは初めてだったんですけど、やればできますね、私♪」

驚きのあまり開いた口が塞がらずうまく話せないサイの隣で、いい仕事をしたと言わんばかりの爽やかな笑顔を浮かべるピオン。そんなホムンクルスの少女に青年は「ギ、ギ、ギ……！」という擬音が聞こえてきそうなぎこちない動きで顔を向けた。

「それではマスター、ここからはお願いしますね。ドランノーガの操縦権は戻して「ちょっと待てぇぇ！」……はい？」

ようやく話せるくらいには精神的に回復したサイは、ピオンの言葉を大声で叫んで遮った。

「どうしたんですか？　そんなに大声を出して？」

「どうした、じゃないよ！　何アレ!?　何だよアレはぁあ!?」

首を傾げるピオンに対してサイは思わず席から立ち上がって操縦席の壁が映し出す景色の一点を指差す。彼が指差す先にはドラン

ノーガの尻尾に一撃により戦闘不能となった大蛇に乗った騎士のゴーレムトルーパーの姿があった。
「どうしてぇ!?　ねぇ、どうして味方のゴーレムトルーパーを後ろから攻撃するのぉ!?　あれ、メチャメチャ勢い良く飛んで地面にぶつかったから操縦士の人、絶対気絶しているってぇ!　というか死んでいないよねぇぇ!?」
「ですからマスター名声を高める為にモンスターの大群を私達だけで倒すって言ったじゃないですか?　その為にはあのゴーレムトルーパーが邪魔でしたので、強制的に退いてもらっただけです。後、あのゴーレムトルーパーのコックピット……下半身の大蛇の頭部には損傷はなくて生体反応がありますから操縦士の方は生きていますよ」
「そういう問題じゃないだろぉぉぉっ!?」
　焦りのあまり語尾が延びるような大声で質問をしたサイは、マイペースに答えるピオンに向かって叫ぶと頭を抱える。
(どうする!?　どうしたらいいんだよコレェェェ!?　操縦士が生きていればいいってものじゃないだろ!?　他国のゴーレムトルーパーを背後から奇襲して一撃で戦闘不能にするなんて、もうコレ、宣戦布告じゃないの!?　侵略行為どころか宣戦布告だって!　普通これってあのゴーレムトルーパーと協力してモンスターの大群と戦うって場面じゃないの!?)
　サイが顔を青くして頭を抱えていると、ピオンはそんな自分の主人の心を読んだかのように話しかける。
「大丈夫ですよ、マスター。あのモンスターの大群をドランノーガを使って退治すればいいだけです。そうすれば私があのゴーレムトルーパーを吹き飛ばした事も誤魔化せますし、あの街も助かって、イーノ村がモンスターに襲われる恐れもなくなります」
　何でもないように言うピオンだが、それは逆に言えばサイ達やあの街の住民達、そしてサイの家族を含めたイーノ村の村人達の全ての運命がサイの戦い方次第ということで……。
「責任が大きすぎる!?　そんな大勢の人の命なんて俺には重すぎるってぇぇ!　やっぱりあのゴーレムトルーパーと一緒に戦った方がよ

かったんじゃないのおおおっ!?」
　自分の肩にのし掛かった重責の重さにサイが半泣きになって叫ぶと、ピオンは腕を組んで何かを考える表情となって口を開く。
「……ふむ。マスターが言いたいことも分かるのですが、それでもやっぱりあのゴーレムトルーパーでは足手まといにしかならないんですよ。ドランノーガの攻撃の余波にも耐えられそうにないっていうか……。マスター？　この時代のゴーレムトルーパーって全て『あんなの』なんですか？」
　ピオンの言葉の意味が分からないサイが、怪訝な顔となってホムンクルスの少女の顔を見る。
「ピオン？　お前、何を言って……」
「っ！　マスター！　モンスターが！」
「なっ!?」
　ピオンの言葉に反応してサイが周囲を見ると、モンスターの大群が街に向かって移動しようとしていた。モンスターの大群は、ドランノーガが大蛇に乗った騎士のゴーレムトルーパーを攻撃した時の轟音や衝撃によって混乱し、今まで動きを止めていたのだが、混乱が回復したことで行動を再開したようだった。
「……!?　分かったよ！　俺とドランノーガだけでモンスターを全て倒せばいいんだろっ!?　やってやるよ！」
　街を襲撃しようとするモンスターの大群を前に、もはや一刻の猶予もないと悟ったサイは自棄糞気味に叫ぶとドランノーガを操縦するのだった。

サイの決断

「飛べ！　ドランノーガ！」
『……！』
サイはドランノーガに命令を出して空へと飛ぶと、上空からモンスターの大群を見下ろした。
「マスター、あそこ」
「分かっている」
ピオンが指差したのは街へと向かうモンスターの大群の先頭。サイがそこに意識を集中させると、前方の景色を映し出している壁に四角い枠が浮かび上がってモンスターの大群の先頭を囲む。
【カロル・ディギトゥス】」
『……！』
サイがドランノーガの武装の一つの名前を口にすると、ドランノーガの上半身の人型が両腕を前に伸ばす。人型の両腕には「手」の部分がなく、代わりにそれぞれ左右に五つの砲身があって、そこから無数の炎の玉が発射される。
『ーーーーー!?』
人型の両腕から発射された炎の玉はモンスターの大群の先頭に命中し、上空から炎を浴びせられたモンスター達は悲鳴をあげる間も無く絶命して灰となった。更にそれだけには止まらず、平原の大地をも焼いて炎の壁を作り出してモンスターの大群の動きを鈍らせた。
「このまま続けて……え？」
「……うわ」
続けてドランノーガの武装で攻撃しようとした時、モンスターの大群の一部で起こった親の腹部を破って子供のモンスターが産まれる自主繁殖の光景が目に入り、その悍ましい光景に思わずサイとピオンは顔をしかめた。
「ああやって数を増やしていたのか。でも何なんだ、あのモンスターは？　あんなの聞いたことがないぞ」
ドランノーガの武装で燃やしてもそれ以上の数を増やしていくモ

ンスターの大群。そんなモンスターの大群を見ながら呟くサイにピオンが顔を向ける。
「そうなのですか、マスター？」
「ああ、そうだよ。あんなのいたら忘れる筈がないだろ。……ていうか、あんなモンスターが他にもいたら今頃人間は全てあのモンスターに食われているって」
　サイは自分で言いながら、あのモンスターの大群が数を増やしながら人間の国を全て食い荒らしていく光景を想像して顔を青くした。そしてその横では何かを考える顔をしたピオンが頷く。
「そうですか……。ではあの異常な繁殖力は以前より保持していた能力ではなく、ごく最近で獲得した能力ということですか。……全く、あの街の人達も災難でしたね」
「ピオン？　あのモンスターについて何か知っているのか？」
　モンスターの大群を冷静に分析するピオンにサイが尋ねるが、ホムンクルスの少女は小さく首を横に振った。
「大体の予想はつきますが、正確な事は分かりません。それよりも今はモンスターの大群を退治する事が優先です」
「分かっているって。だから今もやっているだろう」
　ピオンの指摘にサイが答える。先程から会話をしながらもドランノーガの武装でモンスターの大群の一部を燃やしてはいるのだが、それでも数が減らないどころか徐々に増えているモンスターの大群を見て、サイは一つの決断を下す。
「このままじゃ駄目だ……。ピオン、ドランノーガの最大火力であのモンスターの大群を吹き飛ばす。モンスターの全てを攻撃範囲に捉えられて、街への被害が出ないようにする場所を探してくれ」
「そのお言葉をお待ちしていました♪　【カロル・マーグヌム・コルヌ】発射地点の候補はすでに算出済みです」
　サイの発言はピオンが待ち望んでいたものらしく、ホムンクルスの少女は笑顔で答えると街の近くにあるいくつかの地点を指し示し、サイはその内の一つにドランノーガを移動させた。

常識からかけ離れた機体

「う、く……」

大蛇に乗った騎士のゴーレムトルーパーの操縦席で、ゴーレムトルーパーの操縦士はうめき声を上げて目を覚ました。

「ここ、は……？　身体中が、痛い……何故？」

身体中に走る痛みに耐えながら立ち上がる操縦士だったが、記憶が混乱していて自分が今何処にいて、何故身体中に痛みがあるのか分からなかった。しかし操縦士はすぐに自分の身に起こった事を思い出して理解した。

あの空から降って来た、翼を生やした竜に乗った騎士のゴーレムトルーパーに不意打ちをくらって一撃で戦闘不能にされた事を。

「あのゴーレムトルーパーめ……！」

操縦士は不意打ちを仕掛けて来た竜に乗った騎士のゴーレムトルーパーと、まんまと不意打ちをくらってしまった自分に強い怒りを覚えた。そして自分が乗るゴーレムトルーパーを動かそうとするが動かず、次に現在の機体の状況を知らせる画面を呼び出す。

「これは……！」

呼び出した画面を見た操縦士は驚きで目を見開いた。大蛇に乗った騎士のゴーレムトルーパーは不意打ちの一撃で大きなダメージを受けていて、自己修復機能を使っても動けるように回復まで長い時間がかかり、不意打ちとはいえ一撃でここまでのダメージを与えた竜に乗った騎士のゴーレムトルーパーに驚異を感じずにはいられなかった。

「尻尾を一振りするだけでこれだけの威力……あのゴーレムトルーパーは一体……っ!?　そうだ！　モンスターの大群は!?」

そこでようやく操縦士は自分が先程までモンスターの大群と戦っていたのを思い出し、慌てて周囲を見回す。すると自分に不意打ちを仕掛けた竜に乗った騎士のゴーレムトルーパーが、空を飛んでモンスターの大群へと炎を降らせている光景が見えた。

「な、何だ？　あれは……？」

操縦士は竜に乗った騎士のゴーレムトルーパーが戦う姿を見て思わず呟いた。それだけ竜に乗った騎士のゴーレムトルーパーの戦いは、現代のゴーレムトルーパーの常識からかけ離れていたのだ。

まず、これは竜に乗った騎士のゴーレムトルーパーの操縦士も言っていたのだが、現存するゴーレムトルーパーで空を飛ぶ機体など今まで見た事も聞いた事もなかった。ゴーレムトルーパーとは地上の戦場を高速で駆け抜け、敵陣に突入してこれを殲滅する兵器、巨大な鋼鉄の騎兵なのである。

それ故に「ゴーレム（動像）トルーパー（の騎兵）」。

そして竜に乗った騎士のゴーレムトルーパーが現代のゴーレムトルーパーの常識からかけ離れているもう一つの点。それは先程から上空からモンスターの大群に向けて無数の炎の玉を放っている上半身の人型の両腕。

空を飛ぶゴーレムトルーパーもそうだが、操縦士は「飛び道具を使うゴーレムトルーパーなんて見た事も聞いた事もなかった」のだ。

ゴーレムトルーパーには機体ごとに特殊な機能や武装があるが、それは全て機体の性能を上げたり、機体の装甲が剣や槍に変形するなどの白兵戦を有利にする為の機能や武装である。しかしあの竜に乗った騎士のゴーレムトルーパーは、無数の炎の玉を放つ武装を使いモンスターの大群を灰にしてその進行を防いでいる。

空を飛んで遠くから炎の玉を放ち攻撃をする竜に乗った騎士のゴーレムトルーパーは、操縦士が自分の機体を含めて今まで見てきた、地上を高速で駆けて剣や槍を振るって敵と戦うゴーレムトルーパーとは全く異質な存在であった。

「……」

操縦士は何か恐ろしいものを見るような目で、上空からモンスターの大群を攻撃している竜に乗った騎士のゴーレムトルーパーを見ていた。

大蛇に乗った騎士のゴーレムトルーパーと共に多くの戦いを経験した操縦士は「空を飛べて遠くから攻撃できる」ことが戦闘ではどれだけ有利で、敵に回れば手強いかを直感で理解したからだ。それと同

時に、何故あのゴーレムトルーパーが最初に自分を攻撃して遠ざけたのか、その理由が分かった気がした。
「？　どうしたんだ？」
　操縦士の視線の先でモンスターの大群に攻撃をしていた竜に乗った騎士のゴーレムトルーパーは、いきなり攻撃するのを止めると、操縦士が乗っているゴーレムトルーパーの近くに着陸した。そして竜に乗った騎士のゴーレムトルーパーは脚部を大きく開いて腰を下ろし、同時に前腕部を地につけて何かに備えるような体勢となった。
「な、何だ……？」
　地上に降りて何かに備えるような体勢をとった竜に乗った騎士のゴーレムトルーパーの姿に、それを見た操縦士は本能的な危険を感じて意味が無いとは分かりつつも操縦席の中で一歩後ずさった。

主砲発射

サイはドランノーガの武装を使うためにピオンが選んだ地点の一つに降り立った。そこは彼女が不意討ちで吹き飛ばした大蛇に乗った騎士のゴーレムトルーパーの近くであった。

ドランノーガを着陸させたサイは操縦席の中からモンスターの大群を見る。視線の先ではモンスターの大群は自主繁殖を繰り返して数を増やしながら街へと向かっていた。

あの大群を構成しているモンスターは、その一匹一匹が人間を初めとする多くの命を食い荒らし、時が経てば爆発的に数を増やして国をも飲み込む災害である。だが今のサイは、そのモンスターの姿を見ても恐怖を感じていなかった。

何故ならば今サイがいるのは惑星イクス最強の兵器ゴーレムトルーパーのドランノーガの中で、更に隣には自分の補佐をしてくれる博識で美人なホムンクルスの少女ピオンがいて、それらの事実が彼に恐怖に打ち勝つ強い自信を与えてくれていた。それでも恐怖を感じることがあるとするならば、それはこれからする攻撃でモンスターの大群を討ち漏らし、街やイーノ村を危険にさらすかもしれないという不安ぐらいだろう。

しかし当然サイはそのような失敗をするつもりなど毛頭もなく、大きく深呼吸をして気持ちを落ち着けるとドランノーガに命令を出した。

「ドランノーガ。【カロル・マーグヌム・コルヌ】発射準備」

『……!』

「了解しました。発射準備開始します」

サイの命令を受けてドランノーガが武装の発射準備を開始し、専用オペレーターであるピオンがそれの補助をする。

「両脚部、アンカー始動、足場を固定。両腕部、地面に接地、現体勢を維持」

『……!』

ピオンが言うとドランノーガがその言葉に従ったように動き出し、

脚部を大きく開いて腰を下ろすと脚部に内蔵された杭を勢いよく地面に突き刺して、同時に前腕部を地面につけて今の体勢を維持する。
「テールブースター、後部への垂直状態と噴出口の待機状態を維持。ジェネレーター、最大出力へ移行」
次にドランノーガが尻尾を後ろに向けて垂直に伸ばすと、尻尾の噴出口がいつでも火を吹けるように小さな光を灯し、続けて内部のジェネレーターが獣の唸り声のような音を立てて駆動して装甲と装甲の合間から緑色の光が漏れ出た。
「全エネルギー、頭部の主砲へ集中。照準補正、開始」
ジェネレーターから生み出された膨大なエネルギーがドランノーガの額にある角、主砲に集まり砲口から強い光が灯る。その時、街へと向かっていたモンスターの大群は、本能で異変を感知して動きを止めて、異変の元であると思われる光……ドランノーガの方へと視線を向ける。
前方を映し出す壁に大きな円が浮かび上がってこちらを見ているモンスターの大群を囲む。それを確認したピオンがサイに告げた。
「マスター。発射準備、全て整いました。いつでもいけます」
「……」
ピオンに発射準備が完了したと告げられたサイは僅かに気後れした表情を見せ見せたが、すぐに気を引き締めると、ドランノーガの武装を放つ引鉄となる言葉を言い放った。
「【カロル・マーグヌム・コルヌ】発射！」
『……！』
サイの言葉と共に、ドランノーガの頭部にある主砲から光が放たれた。
視界が白く染まり、続いて衝撃が襲い掛かってきて、最後に轟音が響き渡った。
主砲を放った反動の衝撃を凄まじく、ドランノーガは地面に杭を突き刺して固定した脚部で踏ん張り、尻尾の噴出口から炎を噴き出して何とか吹き飛ばされないように抵抗する。
「うおぉ!?」

「……！」
ドランノーガの操縦席にいるサイとピオンにも主砲の反動の衝撃が伝わり、二人は思わず目を瞑ってそれに耐える。そしてやがて衝撃の振動が収まりサイが目を開くと、目の前の光景に目を見開いた。
「……あ、あれ？　モンスターは？」
思わず呆けた声を出すサイの前方には何もなかった。つい先程までいた何百何千というモンスターの大群は一匹残らず影も形もなく無くなっていた。
今サイの目の前に広がるのは何百何千というモンスターの大群ではなく、所々で火が燃えている見渡す限りの黒く焼き焦げた焼け野原であった。

重大な事実

「な、何だよ……コレ……？」

ドランノーガの主砲によって焼け野原と化した目の前の光景を、サイは信じられないといった顔で見て、そんな彼にピオンが誇るような表情で話しかける。

「お疲れ様です、マスター。これで戦闘訓練は終了です。それにしても初戦闘であれだけの数のモンスターを退治するとは、流石はマスターとドランノーガです♪」

「……え？　いや、それよりコレって……本当に？」

満面の笑みで称賛をしてくれるピオンだったが、サイはそれに喜ぶ余裕はなく、ひきつった表情で彼女の方を見ながら外を指差した。

「？　何を言っているのかは分かりませんが、外が気になるのでしたら実際に出てみたらどうですか？」

「……ドランノーガ、外に出してくれ」

『……！』

首を傾げるピオンに言われてサイは、ドランノーガの下半身の竜の胸部装甲を展開させる。すると外から熱い空気が操縦席に流れ込んできた。

「……っ！」

熱い空気を肌で感じ、映像ではない実際の焼け野原を目にし、土が焼ける臭いを嗅いでサイはドランノーガが、いや、自分がこの惨状を生み出した事を理解した。

「何だよコレ……。冗談じゃないぞ。これじゃあモンスターなんかよりもドランノーガの方がよっぽど世界を滅ぼす災害じゃないか……」

焼け野原を見ながら呟くサイの言葉にピオンが苦笑する。

「気持ちは分かります。ですがマスター？　確かにドランノーガは強力な機体ですが、私に記憶された記録では前文明のゴーレムトルーパーは全て、ドランノーガのような武装を持っていたそうですよ？」

「嘘ぉ……」

ピオンの言葉にサイはそう返す事しかできなかった。

軍学校の歴史で前文明の人類は、モンスターと存亡を賭けた激しい戦争を繰り広げたと習った。ドランノーガのような武装を持つゴーレムトルーパー達とモンスターの戦い……それは一体どんな地獄のような戦いだったのだろうか？

（俺、前文明に生まれなくてよかった……。そんな戦いに巻き込まれたら生きていられる自信がない……）

「マスター、あれを見てください」

サイがそんなことを考えていると、ピオンが焼け野原のある一点を指差した。常人では何も見えないが、ナノマシンによって身体能力を強化された二人にはそこにあるものが見てとれた。

「あれは……ネズミの尻尾か？　……それにしては大きいような気がするけど？」

ピオンが指差した先にあったのは、所々焼き焦げてちぎれたネズミの尻尾らしきものであった。しかしそれはサイが言った通りネズミの尻尾にしてはあまりにも大きく、牛の尻尾くらいの大きさに見えた。

「多分、あの大群のモンスターの尻尾ですね。……あのモンスター、ネズミを食べて異常な繁殖能力を手に入れたのですね。まぁ、予想通りといえば予想通りですけど」

「ピオン？　それってどういうことだ」

一人で納得したように頷くピオンにサイが聞くと、ホムンクルスの少女は何でもないように答えた。

「いえ、ただあのモンスターの大群はどこかでネズミを食べて、異常な繁殖能力をもつ存在に進化していたという話です。ですがもう退治したから終わった話ですけどね」

食べる、そして進化。ピオンの口から出た二つの単語を聞いてサイの能力に一つの単語が浮かび上がった。

「食べて進化するって……それってゴーレムトルーパーの自己進化機能みたいじゃないか？」

「みたいな、じゃなくてその通りですよ。そもそもゴーレムトルーパーの自己進化機能は、モンスターの能力を元に開発されたものなの

ですから」
「……!?」
　何でもないように言うピオンの言葉にサイは思わず絶句。更に……。
「マスターは知っているか分かりませんが、モンスターって元は前文明が開発した生物兵器なんですよ。でも実験段階で今回みたいな繁殖能力が強い生物を取り込んだせいで異常繁殖した挙句に暴走をしてしまって……。それで暴走したモンスターに対抗する為に開発されたのがゴーレムトルーパーというわけです」
「……!?」
　続けて告げられたピオンの言葉にサイは再び絶句して目を見開いた。今までモンスターが何処から現れたのかは謎とされていたのだが、まさか前文明の人類が作り出した生物兵器だったとは予想外であった。
　思わぬ形であっさりと告げられた事実に、それを聞いたサイは固まってしまう。すると……。
「ほう？　それは中々興味深い話だな？　あいつが聞いたら喜びそうだ」
　と、聞き覚えのない声が下から聞こえてきた。
「え？」
「誰ですか？」
　サイとピオンが下を見下ろすと、そこには長く伸ばした艶のある黒髪をポニーテールにした二十代頃の女性が、好戦的な笑みを浮かべて二人を見上げていた。
「あの、貴女は？」
「私か？　私の名はビアンカ・アックア。お前達に吹き飛ばされたあのゴーレムトルーパーの操縦士だと言えば分かるか？」
「ええっ!?　貴女があのゴーレムトルーパーの!?　それは大変申し訳ありま……せ……」

今自分達を見上げているのが、戦いの最初でピオンが吹き飛ばした大蛇に乗った騎士のゴーレムトルーパーの操縦士だと知って頭を下げて謝罪をしようとするサイだったが、その時にある事に気付いた。気付いてしまった。

ビアンカ・アックア。

今自分達を見上げている女性が名乗った「アックア」という姓が、フランメ王国の隣国……つまり今サイ達がいるこの「アックア公国」を統べる大公の一族と同じ姓である事を。

「……!?」

重大な事実に気付いたサイは頭を下げて謝罪をしようとした体勢のまま彫像のように固まり、全身から滝のような汗を流すのだった。

登場人物紹介（1）

［サイ・リューラン］

物語の主人公。

男、十八歳。

フランメ王国の辺境にあるイーノ村の出身。

幼馴染のアイリーンに誘われたのと、軍で固定給を得て家族に楽をさせたいという考えで十五歳の時に王都にある軍学校に入学。三年間の学校生活を送った後に卒業し、入隊するまでの一ヶ月間の準備期間を使って実家に帰るが、実家の倉庫の奥で前文明の遺跡を発見してそこでホムンクルスの少女ピオンとゴーレムトルーパー「ドランノーガ」の所有者となる。

家族構成は父、母、妹で妹の名前はサーシャ。

生物以外ならどんな物でも自分だけの異空間に収納できる「倉庫」の異能が使える。

名ばかりであるが一応男爵家の長男で、将来は爵位を継ぐ予定。

ちなみに巨乳好き。

［サイの両親］

サイの両親。

父親は一応はリューラン男爵家の当主なのだが、男爵家と言っても名ばかりなので実際はイーノ村の村長ぐらいの権限しかない。

サイの曾祖父、つまり自分の祖父が生前大商人で大量の遺産を残してくれた為、生活にはそれほど困ってはいないが、サイの軍学校の学費と共にアイリーンの学費まで払ってしまった事を心底後悔している。

［サーシャ・リューラン］

サイの妹。

女、十五歳。

話す時に言葉を伸ばす癖がある。

兄であるサイが持つ「倉庫」の異能を羨ましがっている。ちなみに本人は自分や手に触れた対象を宙に浮かせる「浮遊」の異能が使える。

言葉には出さないが内心では姉を欲しいと思っており、密かに兄であるサイと幼馴染のアイリーンがくっつかないかと期待していたが、三年間ぶりに帰郷した兄の話を聞いて諦めている。
現在はピオンが兄とくっついて姉になってくれないかと期待している。
［アイリーン］
サイの幼馴染。
女、十八歳。
祖父の代で没落したフランメ王国の名門貴族の娘。
今は亡き祖父から貴族としての教育を受けて貴族としての精神を持っているのだが、そのせいで辺境の田舎であるイーノ村の人達と馴染めず嫌われており、彼女自身も自分の両親を含めたイーノ村の人達を下に見ている。
軍学校に入学するまではイーノ村のガキ大将みたいな感じで、よく面倒ごとを起こしていた。
かなり自己中心的な性格で家の復興を悲願としており、それ以外には興味を示さない。
サイを軍学校に誘った張本人なのだが、その理由は両親にサイを誘う事が軍学校に入る条件とされたからであり、幼馴染でありながら現時点ではサイに何の感情も抱いていない。
現在は軍学校で知り合った王族（女性）と行動を共にしており、士官学校に進学する予定。
ちなみにサイが成り上がったら「ざまぁ」をされる予定。
［アイリーンの両親］
アイリーンの両親。
父親はアイリーンの祖父にあたる父親が没落するまで貴族であったのだが、現在は平民としてイーノ村に馴染んでいる。
常識人であると同時に苦労人で、没落した心労で病床の身となった父の面倒を見ながら父やアイリーンがイーノ村で面倒を起こす度に面倒をかけた人達に頭を下げていた。そのせいもあってイーノ村でのアイリーンの両親の評価は娘とは逆に高い。

アイリーンが軍学校に入学したいと言い始めた時に「サイを一緒なら入学を許す」という条件を出したのは、サイも軍学校に入学したら彼の両親から軍学校の学費の借金をしやすいという打算から。結果、サイの両親はアイリーンの学費も支払ってくれたのだが、三年間ぶりに会ったサイの口からアイリーンが彼にした仕打ちを聞いて顔を青くした。

［ピオン］

サイが前文明の遺跡で発見したホムンクルスの少女。

ホムンクルスの中でも「ペオーニエ・タイプ」という特別製で、従来のホムンクルスと比べて非常に感情が豊か。

保存カプセルから前文明の知識を入力されている為、かなり博識である。

外見は鮮やかな赤紫の髪が特徴の十代後半くらいの美少女。

自分を目覚めさせた主人であるサイの補助を自らの役目としていて、自分からゴーレムトルーパーのドランノーガに吸収されてゴーレムトルーパーの専用オペレーターとなり、私生活でも戦闘でもサイの補助をする。

ちなみにロリ巨乳。

機体解説（1）

［ドランノーガ］
全長：２５．０ｍ
全高：１８．８ｍ
最高速度：Ｍ２．０
乗員人数：二名
搭乗者：サイ・リューラン、ピオン
機体色：紺
武装：カロル・ディギトゥス
■■■・■■■■■
カロル・マーグヌム・コルヌ
パイルアンカー×２
ホムンクルス製造ユニット

ゴーレムトルーパーのコアユニットであるゴーレムオーブにサイの血液が付着したことによって生み出された機体。

ゴーレムトルーパーの機体設計や武装は、ゴーレムオーブに血液を与えた者の遺伝子情報に大きく左右される。つまりドランノーガの機体設計や武装は、サイの遺伝子情報を読み取ったゴーレムオーブが「サイにとって最適」と判断したものであり、そういう意味ではドランノーガはサイの半身と言えるだろう。

上半身が人型で下半身が竜という外見をしている。しかし下半身の竜は、強靭な両脚と棍棒のように太くて長い前腕部を持ち基本的には二足歩行で、竜ドラゴンと言うよりは「背中に翼を生やした恐竜」に近い。

上半身の人型の両腕、下半身の竜の前腕部と額の角が強力な熱光線兵器となっており、遠距離からの砲撃を行うことが出来る。更に下半身の竜の背中にある翼を使用する事で飛行も可能で、移動砲台のような戦い方をメインとしている。下半身の竜の前腕部と尻尾を使う事で格闘戦をする事もできるのだが、あくまで自衛レベルでしかない。

現存しているゴーレムトルーパーはとある理由から「遠距離の敵を

攻撃する武装」と「空を飛ぶ機能」が失われており、今のところ遠距離からの砲撃が出来て空を飛べるゴーレムトルーパーはドランノーガだけである。

コックピットは下半身の竜の胸部。元々は一人乗りだったのだが、ピオンが自らドランノーガに吸収されてドランノーガの自己進化機能が発動した事により二人乗りに変化した。

操縦方法はコックピットにある椅子の肘掛けの先端にある球体に手を触れて念じること。すると機体が操縦士の思念波を読み取ってその通りに動いてくれる。また音声による指示も可能で、戦闘中に武装を使用する時は機体は思念波で、武装は音声指示によって操作するのが基本。

ドランノーガは他のゴーレムトルーパーよりも重装甲な上に高出力である為、最大速度を出す時は機体のバランスを取るのが非常に難しい。操縦の仕方を脳に焼き付けられたとはいえ、ゴーレムトルーパーに乗ったばかりのサイはまだ完全にドランノーガを乗りこなせておらず、現在はピオンが機体制御等のサポートをしてくれている。

機体はナノマシンの集合体であるから損傷を受けても核であるゴーレムオーブさえ無事なら自己修復が可能。ただし修復が完了するまでの時間は損傷の具合によって異なる。

エネルギー源は機体を構成しているナノマシンの自己発電と太陽光発電。エネルギーを全て使い切っても半日休ませればエネルギーは充填され、日向で休ませれば充填の時間は半分となる。

「カロル・ディギトゥス」

ドランノーガの上半身の人型の両腕に装備されている武装。

手の部分に左右それぞれ五門の砲身があり、そこから熱エネルギーの弾丸を発射する。

取り回しが非常に良く、移動しながらの攻撃や接近してくる敵の迎撃等に使用される。

武装内部にある充填装置にエネルギーを溜め込み、そのエネルギーを使用するカートリッジ式の武装で、充填装置のエネルギーを使い切ってしまうと、充填装置にエネルギーを充填する必要がある。

ちなみに武装名の「カロル」はラテン語で「熱」、「ディギトゥス」は「指」を意味する。

「■■■・■■■■■」

ドランノーガの下半身の竜の前腕部に装備されている武装。

本編未使用。

「カロル・マーグヌム・コルヌ」

ドランノーガの下半身の竜の額にある角に装備されている武装。

ドランノーガの主砲で、機体の全エネルギーを集中させた後、熱エネルギーに変換して発射する。

その威力は非常に強力なのだが反動が大きく、足場を固定して尻尾にある推進装置を使用しないと機体の体勢が維持出来ず、発射には準備が必要。

ちなみ武装名の「カロル」はラテン語で「熱」、「マーグヌム」は「大きい」、「コルヌ」は「角」を意味する。

「パイルアンカー×2」

ドランノーガの下半身の竜の脚部に装備されている巨大な杭を地面に打ち込んで足元を固定するカロル・マーグヌム・コルヌ発射時の耐衝撃用装備。

「ホムンクルス製造ユニット」

ドランノーガの下半身の竜の背部後方、上半身の人型の後ろ辺りにある装備。

ピオンを吸収した時に自己進化機能によって作り出された装備で、ピオンの予備の肉体を製造して保存しておく機能を持つ。

またピオン以外の三人のホムンクルスを製造、保存する事も出来るのだが、こちらの方は現在製造中でどのようなホムンクルスなのかは分かっていない。

ビアンカとの会話

アックア公国。
フランメ王国の東方に位置する国で、フランメ王国とは古くから同盟関係を結んでいる同盟国である。
国土はフランメ王国よりも多少広く、国内には大小合わせて多数の川があり、その豊富な水源を使って農作物を育てる農業が主な産業である。更に言えばアックア公国は、惑星イクスの右半分「人類の生活圏」のほぼ中央に位置している為に周囲の国々との貿易が盛んで、この貿易も国の大切な収入となっていた。
そんなアックア公国の南西の地に、南の国々との貿易の拠点となる一つの街があり、サイとピオンの二人は今そこに訪れていた。
「……」
街にあるこの地を治める領主の館に案内されたサイは、応接間のソファにまるで彫像のように体を硬くして座っていた。そんな彼の隣にはホムンクルスの少女ピオンが、テーブルを挟んだ向かい側には長く伸ばした艶のある黒髪をポニーテールにした二十代頃の女性が座っていた。
「固いな。そんなに緊張していないで、もっとくつろげばいい」
「……」
黒髪の女性は面白がるような表情を浮かべてそうサイに言うが、そんな事は彼に出来る筈もなかった。まず間違いなく彼女が面白がっているのは緊張している自分のこの姿なのだろうが、それを反論する余裕なんてサイにはなく、隣で何でもないように座っているピオンが羨ましく思えた。
元々この屋敷の物は黒髪の女性の物ではなく、本来の持ち主であるこの地の領主から使わせてもらっているだけなのだが、彼女はまるで本来の所有者のようにソファに座ってくつろいでおり、その姿には何の違和感も感じられなかった。しかし黒髪の女性の肩書きと実績を知っているサイは、それも当然だと思えた。
ビアンカ・アックア。

それが今サイの目の前にいる黒髪の女性の名前。
現在アックア公国を治めている大公の実の妹であり、アックア公国に三機しかないゴーレムトルーパーの内の一機の操縦士。ナノマシンの力によって外見こそは初めてゴーレムトルーパーに乗った二十代のままだが、実際はその倍は生きていて今日まで多くの戦いを経験してきた歴戦の軍人であった。
「あ、あの……。び、ビアンカ様には、大変無礼な事を……」
サイは緊張で震える声でビアンカに謝罪を述べようとする。
サイとピオンが乗るドランノーガは、この街を襲おうとしたモンスターの大群と戦う前に、ビアンカの乗るゴーレムトルーパーを後ろから奇襲して戦闘不能にしたのだ。実際にそれを実行したのは隣に座っているピオンなのだが、それでも謝罪をしようとするサイをビアンカは手で制した。
「無理に謝る必要はない。あの時、何故お前達が私を強引にあの場から引き離したのかは理解しているつもりだ」
あの際限なく増え続けるモンスターの大群との戦いでは、広範囲に攻撃が出来るドランノーガの武装が有効であった。しかし地上で近接攻撃しか出来ないビアンカの乗るゴーレムトルーパーとは連携が取り辛く、最悪攻撃に巻き込んでしまう可能性もある。
だからピオンはモンスターの大群と戦う前に、攻撃に巻き込まないようビアンカの乗るゴーレムトルーパーを戦場から引き離したのだ。
……そのやり方は乱暴極まりなかったが。
「この街をモンスターの大群から守ってくれた事には礼を言おう。しかしこの国の人間ではないお前達が、あんな正体不明のゴーレムトルーパーでやって来た事は見過ごす事は出来ない。……お前達が何者で、何処であのゴーレムトルーパーを手に入れたのか説明してもらえるか？」
「は、はい。勿論です。まず俺の名前は……」
ビアンカに聞かれてサイは、自分達の素性を始めとしてこの国にやって来た経緯を説明した。
「サイ・リューラン。フランメ王国のリューラン男爵家の嫡男で、軍学

校を卒業して軍に正式入隊するまでの準備期間を使って実家に帰省。
『その道中で気まぐれに立ち寄った前文明の遺跡でゴーレムオーブオーブを発見』してあのゴーレムトルーパー、ドランノーガを手に入れた。そしてそこにいるピオンという少女はホムンクルスで曽祖父が遺した遺品であり、実家の倉庫から発見した……と。それでドランノーガの操作を訓練している時にあのモンスターの大群を見つけて駆けつけてくれた。……そうだな？」
「はい。そうです」
今さっき聞いた説明を声に出して確認を取るビアンカに、サイは出来るだけ内心の感情が表情に出ないように気をつけて返事をする。
サイがビアンカにした説明は一部を除いて全て本当の事だ。ただ、曽祖父が発見して自分達に遺してくれた前文明の遺跡の情報だけは秘密にした。
これは事前にピオンと話し合って決めた事で、実際フランメ王国の王都リードブルムとイーノ村との間には、発掘され尽くして観光名所みたいになっている前文明の遺跡があるので、ドランノーガとなったゴーレムオーブはそこで偶然発見した事にしたのだ。
（ふむ……。大体は本当の事を話したが一部に嘘が混じっている……あるいは肝心な部分を話していない、という感じか）
サイの話を聞いたビアンカは、彼の嘘をあっさりと見抜いて結論を出した。
（まぁ、どこまでが嘘かなんてどうでもいい。そんなのは些末な問題だ。肝心なのはあのゴーレムトルーパー、ドランノーガの力だ）
そこまで考えてビアンカはあのモンスターの大群と戦っていたドランノーガの姿を思い出す。
空を自由に飛び、遠距離から炎の玉を飛ばして敵を一方的に攻撃して、最後には平原が焦土と化すような凶悪な熱線を放ち何百何千といたモンスターを一瞬で消滅させたあの戦いの光景。あの力がもし自分達に向けられたらと思うと考えただけで恐ろしくなる。
そして次は逆に、ドランノーガが自分達の味方になったら、一体どれだけの戦力になるかビアンカは考える。

（フランメ王国とは古くからの同盟国だ。……しかしあのドランノーガ、この同盟国の男爵家嫡男を殺してでも手に入れる価値はあるかもしれないな）

未来予知

ビアンカは表情を変えることなくサイとピオンの二人を殺害してドランノーガを奪取することを検討する。

サイとピオンは同盟国のフランメ王国の貴族とその従者であり、この街の恩人である。それを害するのは同盟国との関係にヒビが入る可能性がある上に、人として最低なことであるのはビアンカも理解している。

しかしそれでもその様な事を考えてしまうくらいにドランノーガは凶悪な魅力を持っているのだ。

（幸いフランメ王国はドランノーガの事を知らなくて、彼は無名な貧乏男爵家の嫡男でしかない。我が国で違法な取引を行なっていたとするなり、事故を装うなりいくらでもやりようがある。彼を始末したらフランメ王国から面倒な手続きや何らかの賠償を求められるだろうが、それであのドランノーガが手に入るなら安いものだ。……ん？）

「……」

秘密裏にサイを始末してドランノーガを手に入れる方法を考えていたビアンカは、そこで今まで一言も話していないピオンが瞬き一つせず自分を凝視している事に気付いた。ホムンクルスの少女は自分の主人を害なす行動や考えを絶対に見逃すまいといった感じで、その眼の奥には強い警戒の光が見えた。

（ほぅ……。このサイの方は全く警戒心というものがなかったが、その分彼女が周囲を警戒して彼を補助しているのか。いい従者だな）

ビアンカはピオンを見て僅かに感心すると少し冷静になった。

（そうだな。いきなりこの二人を殺すというのは性急すぎるな……。ここはいつも通りに『我が異能』にどうするのが最善か尋ねてみるか）

そこまで考えるとビアンカは、サイとピオンに紅茶と菓子をすすめ（ただし紅茶と菓子に手をつけたのはサイだけ）その間に自分の異能を発動させた。

ビアンカの異能の名は「解答」の異能。

自分が取ろうとしている行動によって起こる未来をほんの少しだけ見る事が出来る未来予知の異能である。あまり遠くの未来は見えないのだがそれでも予測した未来は必ず起こるので、ビアンカはこの自分の異能を戦闘や政治の場で大いに活用していた。
（まずはサイを殺そうとした場合はどうなる？）
ビアンカは自分に問いかけるようにサイを殺害しようとした場合の未来を予測する。
すると主人の危険を察知したピオンの機転により、二人はドランノーガに乗ってこの国から脱出。しかもその時の反攻により街に決して小さくない被害も出るという未来が浮かび上がった。
（これは駄目だな。では先にピオンから殺そうとした場合はどうなる？）
次にビアンカは先にピオンから殺害しようとした場合の未来を予測する。
この未来だとビアンカはピオンをうまく殺害する事が出来て、続いてサイも殺害する事に成功していた。しかしその直後にドランノーガの操縦席から殺害した筈のピオンが現れて、怒り狂ったホムンクルスの少女はドランノーガを使ってこの街を破壊し、ビアンカもこの時に殺されてしまう。
しかも殺される方法も普通ではなかった。未来のピオンはビアンカの四肢を切り裂いて行動を封じると、彼女の目の前で愛機のゴーレムトルーパーや生き残った街の住民をドランノーガの武装で灰にし、その後でビアンカの体を数え切れない程殴りつけて長い時間をかけて文字通りの「挽き肉」にするのだった。
（な、何だこの未来は……!?）
異能の効果により脳裏に浮かんだ最悪の未来にビアンカは内心で冷や汗を流す。それでも表情を変えず、目の前のサイとピオンに動揺を悟らせないのは流石と言えた。
（どうやら彼らを殺してドランノーガを奪おうとするのは諦めた方が良さそうだな。……では最後に彼らの協力が得られ易くなるように友誼を結んだ場合はどうなる？）

サイとピオンを殺害しようとした場合、最悪な未来しか見えなかった為、ビアンカは二人を殺害してドランノーガを奪取する事を諦めることにした。しかしドランノーガの力を諦めきれない彼女は、最後にサイ達と友好関係になった場合の未来を予測する。

そうして三度目の未来予知で見た未来の光景は、先の二度の未来予知と大きく結果が異なっていた。

三度目の未来ではサイが友好的にビアンカに接しており、ピオンは相変わらず警戒しているが今よりは警戒心が薄れているように見えた。そして未来のビアンカ本人はというと……。

何やらひどく上機嫌、というか興奮していてサイとピオンをフランメ王国ではなくアックア公国に仕官しないかと口説いていた。

（一体私に何が起こった？）

おそらく、この三度目の未来は今からそれほど時間が経っていない未来だろう。そんな短い時間で自分にどんな変化が起こったのかと、ビアンカは内心で首を傾げながら目の前のサイとピオンに向かって口を開いた。

一つしかない選択肢

「随分と気に入ってくれたようだな？」
　ビアンカの口から最初に出たのは、紅茶の香りと菓子の味に瞳を輝かせているサイを見た感想であった。客人をもてなすために今この街にある最高の茶葉と菓子を用意させた自覚はあるが、彼のように見ただけで分かるくらい喜ばれては悪い気はしなかった。
「あ……！　その、すみません。こんな美味しいお茶や菓子なんて王都にいた時でも味わったことがなくてつい……」
　恥ずかしそうに頭を下げるサイに、ビアンカは首を横に振ってみせた。
「構わんさ。気に入ってくれたならなによりだ。……それで本題に入るが、確かにお前達はこの街の住民達をモンスターから救ってくれた恩人だ。しかし同盟国とはいえ他国の人間であるお前達が、あの様な強力なゴーレムトルーパーに乗って無断で我が国にやって来た事を不問にする訳にはいかない。……ここまでは分かってもらえるな？」
「……はい」
「……」
　ビアンカの状況を確認をするような言葉に、サイは恥ずかしさで僅かに赤くしていた顔を今度は青くして頷き、隣に座るピオンも無言で頷いた。そんな二人にビアンカは安心させるような笑顔を浮かべて見せる。
「そんな怯えた顔をするな。悪いようにはしないから安心しろ。とりあえずお前達には私と一緒に首都へ行き、兄上と会ってもらう」
「ビアンカ様の兄上って……大公陛下とですか!?」
　サイはビアンカの言葉に思わず驚きの声を上げる。
　一応貴族とは言え、名誉も実績もない事実平民の貧乏男爵家の長男が、いきなり他国の頂点の人間に会えと言われたら驚いても仕方がないだろう。しかしそれを言った大公の妹である女性は、当然だと言わんばかりの表情で頷く。
「そうだ。ゴーレムトルーパーの情報は、国の防衛という面で国家の

存亡に関わる最も重要なものだ。新たに生まれた強力なゴーレムトルーパー、ドランノーガの性能がどれ程のものなのか。そしてそれを操る操縦士であるお前達サイ・リューランとピオンがどの様な人物なのか。ゴーレムトルーパーの操縦士として国の防衛に携わる私はそれを兄上である大公陛下にお伝えする義務がある」
「そ、それは分かりますが……その……」
「……」
ビアンカが言うことも分かるのだが、それでも気後れしてしまうサイは隣にいるピオンを横目で見る。だが頼りになるはずのホムンクルスの少女は、目を閉じて何かを考えているようで、自分の主人の視線に気づいていなかった。
「もう一度言うが、悪いようにはしないから安心しろ。報告が終わったら、この街を守ってくれた件でアックア公国からフランメ王国へ何らかの謝礼を出すように、私から兄上にかけあってみる。サイ・リューラン、お前は軍人志望なのだろう？　だったら『国に貸しがある』という事実は今後の軍人生活で大きな助けになると思うぞ？」
「分かりました。その話、お引き受けします」
それまでずっと沈黙を守っていたピオンが、ビアンカの話が終わると同時に目を開いて返事をした。
「おい、ピオン？」
「勝手に返事をして申し訳ありません、マスター。しかしこの話は受けるしかないと私は思います。ここで話を受けずにこの場から去っては国を巻き込んだ大きな問題になりますし、国に貸しを作ることは確かにマスターの出世の大きな助けになります。……マスターも本当は分かっているのでしょう？」
「……」
こちらを見て聞いてくるピオンにサイは無言になるが、その態度は「肯定」と見てとるには充分であった。
ピオンが言う通りサイも本当は分かっている。この話には、ビアンカに従うという選択肢しかないことに。
しかし事態が際限なく大きくなっていく現実に頭がついてこれな

かったのだ。
「話は決まったようだな。では早速で悪いが明日から出発するぞ。ここから首都まで片道三日はかかるがよろしく頼みぞ」
「……分かりました」
目の前の主従の会話を聞いていたビアンカがそう言うと、サイは今にもため息を吐きそうな声で返事をした。その表情は今からアックア公国の大公に会う事を想像したのか、緊張で顔色が悪くなっていた。

王都での噂話

サイが実家の倉庫から前文明の遺跡に通じる道を見つけ、前文明の遺跡でピオンとドランノーガと出会った日から半月ほどの時間が経った頃。フランメ王国の王都リードブルムの城下町を二人の女性が歩いていた。

一人はフランメ王国の貴族で王弟の娘、クリスナーガ。

そしてもう一人は同じくフランメ王国の貴族でサイの幼馴染であるアイリーン。

「うん。やっぱり人が多いところは楽しいわね」

「……そうですね」

回りを見回しながら上機嫌で歩くクリスナーガが言うと、その後ろをついて行くアイリーンが同意する。しかしアイリーンの表情と声音は、口から出た言葉とは逆につまらなそうであった。

王都の城下町とは言え、貴族でない平民が暮らす場所に全く興味のないアイリーンは、本当は来週から始まる士官学校生活に向けての訓練をしたかった。しかし恩人であり、後援者でもあるクリスナーガの言う事なら自分の心に嘘をついてでも彼女の言葉に同意して行動を共にするしかなかった。

そんなアイリーンの嘘をすぐに見破ったクリスナーガは苦笑を浮かべる。

「別に嘘なんてつかなくていいわよ。貴女にはつまらなくても私には楽しいのよ。ここに来たお陰で面白そうな噂を聞けたのだし」

「面白そうな噂、ですか……？」

「アイリーン……。貴女って本当に自分が興味ない事には注意力が働かないのね？　さっき花屋で私が噂を聞いていた時、貴女もそこにいたでしょう？」

歩きながら首を傾げるアイリーンに、クリスナーガは歩きながら顔だけを振り返って呆れたような視線を向ける。どうやらクリスナーガが花屋でその面白そうな噂を聞いていた時、アイリーンは平民の言う事だからと右から左へと聞き流していたらしい。

「も、申し訳ありません！」
　呆れたような視線を向けられてアイリーンは慌てて頭を下げる。
そんな彼女を見てクリスナーガは気を取り直して口を開く。
「……まあ、いいわ。それでその面白そうな噂っていうのはね？　この最近、空を飛ぶ巨大な影を王都の近くで見るんだって？」
「空を飛ぶ巨大な影？」
「そう。巨大な影が東の方からこの王都にやって来たり、逆に王都から東へと向かって空を飛んでいくのを見たって人が結構いるんだって。それで目撃者の人達の中にはその巨大な影がゴーレムトルーパーなんじゃないかって言う人も……」
「馬鹿馬鹿しい」
　クリスナーガの言葉を遮ってアイリーンは一言で切って捨てる。
その時のアイリーンの表情は強い不快感が現れていた。
「アイリーン？」
「どんな噂かと思えば本当に馬鹿馬鹿しい。やはり平民の話なんて聞く価値もありませんね」
　思わずクリスナーガが振り返って見ると、アイリーンは明らかに不機嫌な表情のまま言葉を続ける。
「ゴーレムトルーパーが空を飛ぶ？　ゴーレムトルーパーは戦場を駆ける陸の兵器です。隣国のアックア公国などには水場も移動出来るゴーレムトルーパーもあるみたいですが、空を飛ぶゴーレムトルーパーなんて存在しません。……空を飛ぶなんて『あの機体』でも無理だったのですから」
「あ……」
　アイリーンのほとんど独り言のような言葉を聞いたクリスナーガは、何故彼女がこの様に不機嫌になったのか、その理由に思い至った。知らない内に自分が目の前にいる友人の、触れられたくない心の闇に触れてしまった事を理解したクリスナーガは、何か別の話題を話す事にした。
「あ～、そういえば話は変わるけど、家族や例の幼馴染の様子はどうなの？　手紙とかで連絡をとっていないの？」

「……いいえ。この王都に来てからは私から家族に手紙を出した事などありません。時間と郵送の代金の無駄ですから。……そういえば先日手紙が来た気がしましたが、読んでいませんし……どこにいったのでしょうね」
（家族からの手紙くらい読んであげなさいよ……）
　別の話題を出してそれに乗ってくれたのは助かるのだが、アイリーンの返事の内容の酷さにクリスナーガは思わず内心でそう呟いた。
「あと『アレ』は今頃イーノ村からこの王都に向かっている途中ではないでしょうか？　一体どの部隊の配属になるのかは分かりませんがそうですね……もし万が一、出世でも果たしたら下につけてもいいかもしれないですね？」
　アレとは恐らくアイリーンの幼馴染のサイの事だろう。仮に幼馴染なのに物扱いした挙句、まだ士官学校生（それもまだ入学もしていない）なのにこの上から目線。
（う～ん……。アイリーンって、確かに強いし面白そうなんだけど……もしかしたらハズレだったかなぁ……）
　家族や幼馴染にすらも親愛や友愛の情を欠片も懐いていないアイリーンに、クリスナーガは内心でため息を吐き彼女の評価を僅かに下げたのだった。
　そしてクリスナーガとアイリーンの会話にほんの少しだけ名前がサイはというと……。

　フランメ王国の東にある同盟国、アックア公国の首都にある高級宿のスイートルームで、士官学校の学生服を着ていた。
　それもフランメ王国ではなく「アックア公国の士官学校の学生服」を。
「学生服を着たマスターも素敵ですよ♪」
「……一体どうしてこうなったんだ？」

激動の半月

アックア公国の首都ヴァンリスク。そこにある国の要人や貴族が宿泊する高級宿のスイートルームにサイとピオンの二人はいた。

「……」

サイは部屋の壁に備え付けられている姿見を見ていた。姿見の中には、アックア公国の士官学校の学生服を着た自分の姿があり、それを見つめながらサイは一人呟く。

「本当に、一体どうしてこうなったんだ？　俺、来週にはフランメ王国の軍に正式入隊して、輜重兵科（兵站を担当する後方支援の兵科）の輸送部隊に配属される予定だったんだぞ？　それがどうしてアックア公国の士官学校に留学することになったんだ？」

「一体どうしてって……。マスター、この留学が決まった理由を忘れてしまいました？」

アックア公国の士官学校の学生服を着て、着心地を確認していたピオンがサイの一人言を聞いて訊ねると、学生服を着た青年は首を横に振る。

「いや、覚えている……。でもあの半月の出来事が濃すぎて、まだ頭のどこかであの半月が夢なんじゃないかって疑っているんだよ」

サイはピオンにそう答えると、ここに至るまでの経緯を思い返した。

事の始まりは半月前。サイとピオンがビアンカと共にアックア公国の大公に会うことを了承した後の事である。

あの話の後、サイ達はビアンカの乗るゴーレムトルーパーが走行機能に不具合が生じて満足に動けないという報告を受けた。言うまでもなく原因となったのは、ドランノーガからの奇襲によるダメージであった。

ビアンカとしては一刻も早くサイ達とドランノーガを大公の元へ連れて行きたいのだが、愛機であり国の防衛の要であるゴーレムトルーパーをこの街に置いていく訳にもいかなかった。どうしたものかと彼女が頭を悩ませていると、責任を感じたサイが一緒にドラン

ノーガに乗ってはどうかと提案する。
ドランノーガの操縦席は無理をすれば三人か四人くらい入れるし、空を飛べるドランノーガならば三日どころか一日もあれば首都へ行くことが出来る。更に言えばサイの「倉庫」の異能を使えば、動けないゴーレムトルーパーも何の問題もなく首都に運べる。
ビアンカは最初、「倉庫」の異能の説明を聞いても半信半疑であったが、実際にサイがゴーレムトルーパーを異空間に収納してみせると目を丸くして驚き、驚いた後は興奮した様子でサイをスカウトしてきたのだ。どうやらビアンカは「倉庫」の異能がどれだけの価値があるか一目で理解したらしく「貴族の爵位も軍の地位も好きなだけやるからアックア公国に仕官しろ！」と言ってきたビアンカに、サイは一瞬何を言われたのか分からなかった。
興奮するビアンカ何とか落ち着かせてサイ達がアックア公国の首都ヴァンリスクに行くと、そこで事態は一気に加速する。
緊張で体を固くしてアックア公国の大公と対面したサイは、ドランノーガの性能や「倉庫」の異能を含めて大公に大いに気に入られ、国賓の様な待遇で大公の屋敷に招かれた。そんな貧乏男爵家の長男には不釣り合いな生活を一週間程送っていると、今度はビアンカが街を出る時にフランメ王国へと送った脚力特化の「超人化」の異能を持つ使者と共に、フランメ王国の国王本人が大公の元に乗り込んで来たのだ。
自国の王がいきなり自分の前に現れた事実にサイは頭が真っ白になり、ものを言わぬ石像と化した青年の前でフランメ王国の国王とアックア公国の大公は、サイ達とドランノーガがどちらの国のものかを言い合う。もちろん本人の意思を完全に無視である。
幸いにもフランメ王国の国王とアックア公国の大公は昔からの旧知の仲で、言い合いはそれ程険悪にはならず、話し合いの結果で決まったのが「サイとピオンのアックア公国の士官学校の留学」であった。
アックア公国の大公が言う表向きの理由は両国の友好を深める為に留学生を招き入れる事であったが、実際の目的はサイ達がアックア

公国に仕官する様に意識を持っていかせるきっかけと時間作りである。フランメ王国の国王は最初これに反対したのだが、サイ達がアックア公国にその気はなくとも密入国した事実を突きつけられ、加えて留学を認めてくれたら貿易で他の国よりも優遇するという条件を出されてこれを了承した。

ここまで自分の意思を完全に無視されたサイであるが、二つの国のトップが出した結論に異論を挟める筈もなく、士官学校の学費もアックア公国が全て出してくれるという事から本人もこれを了承し、こうしてサイとピオンのアックア公国の士官学校の留学が決定したのだった。

ちなみにこれらの話が決まった後、サイとピオンは一度イーノ村に帰ったのだが、家族は長い間帰らなかった事を全く心配していなかった。それどころか「長い間ピオンと一緒にいたのに何もしなかったのー？」と妹のサーシャに軽く責められるように言われてサイが少し落ち込んだのは別の話。

「二つの国のトップに熱烈に求められだなんて……。マスターってば素敵すぎます」

「……あまりにも上手くいきすぎていて現実感がないっていうか、逆に不安だよ。俺は」

この半月の出来事を思い出してピオンがうっとりとした表情で言うが、当のサイは不安そうな表情を浮かべる。

「まあまあ、そんな事を言わないで……。それよりマスター？ちょっとコレ、見てもらえませんか？」

「どうした？　……おおぅ!?」

今までずっと姿見に映る自分の姿を見ていたサイは、ピオンに声をかけられて振り返ると彼女の姿を見て驚きの声を上げた。

サイの目の前にいるピオンは、彼と同じ士官学校の女学生用の学生服を着ているのだが、胸元を大きく開けている上に学生服の上着の下には何も着ておらず、大きく開けた胸元から二つの肉の果実が覗かせていた。

「どうでしょうか、マスター？　似合いますか？」

「最高です！」
胸の下で腕を組み、その豊かな乳房を強調するポーズをとって聞いてくるピオンに、輝かんばかりのイイ笑顔を浮かべて即答するサイ……ではなく巨乳好きな馬鹿。その顔からは先程までの不安は全く見えなかった。

最悪のスタート

そしてサイがピオンの学生服姿を絶賛した日から数日後。その日の朝、高級宿のスイートルームで眠っていたサイは、息苦しさから目を覚ました。

「……ん？　んん!?」

目を開いても何も見えず、顔中に温かくて柔らかい感触を感じたサイは意識を一気に覚醒させる。そして意識を覚醒させた青年は自分の顔と、顔の上にのしかかっている「何か」の間に両手を潜り込ませると、両手に力を込めて顔にのしかかっている「何か」を持ち上げた。

「やん♪」

聞き覚えのある女性の甘い声が聞こえるのと同時に、それまで何も見えなかった視界に光が差し込んでくる。光を取り戻したサイの目の前にいるのは一糸纏わぬ裸の姿のピオンで、先程まで顔にのしかかっていたのは彼女の胸にある豊かな乳房であった。

ちなみにピオンの豊かな乳房はサイの両手の中で卑猥に変形しており、サイの視線は自分の手の中にある肉の果実に釘付けとなっていた。

「おはようございます、マスター♪」

「ああ、おはよう」

朝の挨拶をするピオンにサイも目線は自分の両手に向けながら挨拶を返す。

「ふふっ♪　マスターってばこの起こし方をするとすぐに起きるのですね♪」

ピオンはサイに向けてからかうように言う。このホムンクルスの少女は、このアックア公国に来てからずっと主人である青年と同じ部屋で寝て、朝になると今日のように胸を顔に押し付けて起こしてくるのだ。

「こんな事されたら誰だって起きるに決まっているだろ？　顔ごと口を塞がれて死んだらどうするつもり……」

「あら？　私の胸はお気に召しませんでした？　それではもうしない

ほうがいいですか？」
「そんなわけないだろ。ピオンの胸、最高に気持ちよかったです。これからも毎朝お願いします」
苦情を言おうとしたのにピオンにもう止めようかと言われた途端、無駄に凛々しい顔で手の平返しをするサイ……ではなく巨乳好きな馬鹿。
自分の命よりも巨乳の感触を優先。
この辺りがサ……巨乳好きな馬鹿が巨乳好きな馬鹿である所以だろう。
そしてピオンはサイの言葉に満足したのか満面の笑みを浮かべる。
「それはよかったです♪　ではそろそろ準備をしましょう。何せ今日は士官学校の入学日なのですから」
X　X　X
アックア公国の士官学校は、首都の外れの方にあって非常に広い敷地を持ち、その広さはサイの故郷のイーノ村が二つ入るくらいであった。
これはここにあるのは軍人を育成する士官学校だけでなく、専門の学問を学ぶ大学も一緒になって一つの学園となっている為で、ここでは「武」と「文」と分野は異なるがアックア公国の次代を担う若者達が、顔を合わせてお互いに訓練や学問に励んでいた。
そんな場所に表向きは留学という形で入学する事になったサイは、学園の入り口である門の前で学園内に建ち並ぶ建物を驚いた顔で見上げていた。
「凄い立派な建物だな……。リードブルムの城と同じくらい立派なんじゃないか？　今日からここで学園生活を送るのか……大丈夫かな？」
フランメ王国の軍学校では家が貧乏男爵家である事と異能が戦闘向けではない事から差別されてきたサイは、これから始まる第二の学園生活に不安そうな表情を見せる。
「大丈夫ですよ。マスターでしたらきっと上手くいきますって。ほら、行きましょう」

ピオンは不安そうな顔をするサイに明るく言うと、彼の先を行き学園へ入ろうとする。……その時、悲劇が起こった。
今サイとピオンが学園の入り口である門の前。当然そこには二人だけでなく学園の在校生や今日から入学する生徒も大勢いる。
そんな生徒達に混じってピオンが学園に入ろうとした時、一陣の風が吹いた。
「きゃ！」
突然の風にピオンはとっさにスカートの前を押さえるのだが、後ろがめくれてスカートの中が見えてしまった。
それだけならまだいい。それだけならピオンには災難で、後ろにいた男子生徒達には幸運の、ちょっとしたハプニングで済んだだろう。
だが問題はピオンのスカートの中にあった。
風によってめくれたピオンのスカートの中にあったのは下着をはいていない裸の尻であった。
『……!?』
サイを初めとするピオンの後ろにいた生徒達は彼女のスカートの中を見てしまい揃って固まってしまう。そして固まってしまった生徒達は先程見た光景の衝撃から立ち直ると、ホムンクルスの少女とその隣にいる男子生徒、つまりサイに視線を集中させる。
男子生徒からは嫉妬と僅かな尊敬の、女生徒からは侮蔑と嫌悪の視線を一斉に向けられたサイは……。
「さ、さ、最っっっ悪じゃぁぁーーーーーーっ！」
と、空に向かって大きく叫んだ。
こうしてサイは、風のイタズラにより第二の学園生活で最悪のスタートを切る事になったのだった。

砲兵科入学

士官学校と大学が一つになったアックア公国の学園は、敷地の左半分に大学関係の建物が、右半分に士官学校関係の建物が建てられている。

士官学校とかつてサイが通っていた軍学校は、その教育内容が大きく異なっていた。軍学校が全ての兵科で共通している基本的な知識や技術を教える「兵士を育成する」教育であるのに対し、士官学校はその兵科でしか適用されない兵器や兵士の運用等といった専門的な知識や技術を教える「指揮官を育成する」教育なのである。

その為、士官学校では合同のものではない訓練や授業は、兵科ごとに違う建物で行われていた。士官学校の敷地内でいくつもの建物が建ち並んでいたのはそういう意味もあった。

そんな士官学校の建物の一つ、砲兵科の授業が行われる建物の中をサイとピオンが歩いていた。二人がここにいる理由は言うまでもなく、砲兵科の生徒として入学したためである。

「ここが今日から私達が通う砲兵科ですか。中々よさそうな所ですね、マスター？」

「ああ、そうだな」

「砲兵科を選んだのはいい選択だと思います。私達が乗るドランノーガは砲撃戦に秀でた機体ですから、ここで学ぶことはきっとマスターのためになるはずです」

「ああ、そうだな」

「気になるのは暮らす場所ですよね。昨日までは大公様のお屋敷に高級宿のスイートルームだったのに、今日から学生寮だなんて……。仕方がないとはいえ差が大きいですよね」

「ああ、そうだな」

「……？　マスター？」

「ああ、そうだな」

ピオンが気になって隣を歩くサイを見てみると、サイは心ここに在らずといった表情で同じ言葉を繰り返していた。

「マスター？　おーい？」
「ああ、そうだな」
「むー。マスター、ちょっと手をお借りしますね？」
「ああ、そうだな」
「うりゃ」
　むにゅ♪
「……!?　な、何をするんだよ、ピオン！」
　ピオンは何を言っても同じ言葉しか繰り返さないサイの手を取ると、その手を自分の谷間に突き刺した。するとホムンクルスの少女の乳房の感触で正気に戻ったサイが顔を赤くして彼女を見る。
　流石巨乳好きな馬鹿。どんな状態になっても胸（巨乳限定）を触るだけですぐに回復するとは便利な体質である。
「ようやく元に戻りましたね。全く……一体何をそんなに落ち込んでいたんですか？」
「何を……て。あの門の前の事だよ」
　少し呆れたような顔で聞いてくるピオンにサイは視線を逸らしながら答える。彼が言っているのは、学園の入り口の門の前で風によってホムンクルスの少女のスカートがめくれて、彼女の裸の尻をその場にいた生徒達に見られた件である。
「ああ、そんな事ですか。別にいいじゃないですか？　下着なんて着るの面倒臭いですし、それにマスターだってこの方がうれしいでしょう？　……ほら？」
「ちょっ!?　ピオン、お前何をやっているんだ！」
　サイが落ち込んでいる理由を理解したピオンはそう言うと右手で胸元を広げ、左手でスカートを軽く持ち上げて見せる。それによってサイが顔を赤くして後、慌てて周囲に誰もいないか確認しだすと、彼女は楽しそうな表情となる。
「それよりも早く行きましょう、マスター。大丈夫ですって。生徒の皆さんは私を珍しがるかもしれませんが、見た目地味なマスターをそこまで注目しませんって。門の前では注目を集めましたが、あんなのは最初だけですよ」

「今、サラッと失礼な事を言われた気がしたけど……まあ、それもそうか」
ピオンとの会話でいくらか気が軽くなったサイは、彼女と一緒に自分達が授業を受ける教室へと向かった。

結論から言うと思いっきり注目された。
どうやら門の前での出来事はすでに砲兵科の生徒達にまで広まっていた様で、サイとピオンが教室に入るとすでに教室に来ていた生徒達は全員二人に注目した。その中でも特に強い視線を向けて来たのはサイの隣に座るボインスキーという男子生徒で、彼は午前の授業中ずっと血の涙を流さんばかりの表情でサイを睨みつけていたのだった。

図書館での出会い

「あ～！　疲れた～！」

士官学校初日の授業を終えた夕方。サイは学園内にある士官学校と大学が共有する図書館の机に突っ伏した。

「お疲れ様でした、マスター」

「本当に疲れたよ。体や頭じゃなくて精神的に疲れたよ……」

ピオンの労いの言葉に、サイは机に突っ伏したまま心底疲れきった声で呻くように応えた。

士官学校の授業や訓練は確かに厳しかったが、一月前までフランメ王国の軍学校に通っていたサイは何とかついて行く事が出来て、それほど疲れは溜まらなかった。彼がここまで疲れる事になった原因は、授業や訓練ではなく周囲の環境にある。

朝に学園の門の前で起きた出来事により「美人なホムンクルス少女を連れているのをいいことに、そのホムンクルスの少女に場所も時も選ばずに人前では言えない行為をしている」と、士官学校の生徒全員に思われたサイは、一日中周囲から好奇心や嫉妬に嫌悪等といった様々な感情の視線に晒されて精神的に疲れてしまったのだ。

「ボインスキーの奴なんかずっとこっちを睨んでいたしさぁ……」

授業も訓練も全く気にすることなく、ただ人を射殺さんばかりの目で一日中こちらを睨んでいた生徒の事を考えてサイが愚痴をこぼすと、それを聞いたピオンが思い出したようにな表情となる。

「ボインスキー……。ああ、マスターを見るときは鬼のような顔でしたが私……というか私の胸を見るときは緩みきった顔になって鼻息を荒くしていた、あの見るからに汗臭そうで近寄っただけで妊娠させられそうな豚ですね」

「……お前、今日初めて会った人間をよくそこまで言えるな？」

まるで息をするかのようにボインスキーを罵倒するピオンに、サイは思わず自分が疲れているのも忘れて顔を上げる。

「本当の事ですから。……それにしてもマスターが注目を集めるのは喜ばしいことですが、不快な感情を向けられるのはよくありません

ね。ここはフランメ王国の学生達をぶっ殺す予行演習として潰しておきますか？」
「物騒なことを言うのはやめてくれ」
　フランメ王国の軍学校時代にサイを見下してきた学生達への復讐を諦めていなかったピオンの発言をサイが即座に止める。するとその時、本棚の陰から一人の女性が現れて、女性はサイとピオンに気づくと二人に話しかける。
「あの……もしかしてサイ・リューラン様とピオン様でしょうか？」
「そうですけど？」
「貴女は一体……ぬおおおぅっ!?」
　話しかけられたピオンとサイが女性の方を見ると、突然サイが奇声を上げた。
　その女性は年齢はサイと同じくらいで、背丈はサイとピオンの中間くらい。艶のある黒髪を腰まで伸ばし、どこかで見たような整った顔立ちをしていた。
　そして何よりサイの目がいったのはその胸部。ピオンのよりも一回り大きな乳房が服の下からその存在を主張している。それを見てサイ……ではなく巨乳好きな馬鹿が黙っていられるはずがなかった。
「えっ？　な、何ですか？」
「マスター、あまり怯えさせるとせっかくの胸の大きな方との会話ができなくなりますよ」
「はっ!?　す、すみません。つ、疲れていたのかちょっと混乱していて……」
　ピオンの言葉で正気に戻ったサイが女性に頭を下げて謝る。そんな青年にピオンがからかうように声をかける。
「マスターは巨乳がからむといつでも混乱していますけどね」
「ピオンは黙っていろよ。それでその……」
「ブリジッタです。ブリジッタ・アックア」
　サイに黒髪の女性、ブリジッタが名乗り、その名を聞いたサイとピオンが思わず目を見開いた。
「ブリジッタ・アックア……。アックアってもしかして……？」

「アックア公国の大公様の第三女。しかし大公様のお屋敷にいた時はお会いした事がありませんでしたが……？」
サイとピオンの言葉にブリジッタは恥ずかしそうな顔となって答える。
「その……お二人が実家にいる時に何度かご挨拶をしようと思ったのですが……緊張して声をかける事ができませんでした」
ブリジッタの言葉を聞いてサイは以前ビアンカが、彼女がゴーレムトルーパーとその操縦士を心のどこかで怖がっていると寂しげに話していたのを思い出した。
「そうなん……ですか。それで今は話しても大丈夫なのか……いや、ですか？」
言葉使いを正しながら話すサイにブリジッタは首を横に振ってみせる。
「敬語でなくても構いませんよ。ええ、大丈夫です。それで私、大学の授業が終わるとよくこの図書館に来るのですけど、よかったら今後も会ってくれませんか？」
「ああ、いいよ」
「私も構いませんよ」
「ありがとうございます」
サイとピオンから快い返事をもらえてブリジッタは嬉しそうな笑顔を浮かべるのだった。

サイとピオン、そしてブリジッタが話をしていた時、本棚の陰からその様子を見ている一人の女性がいた。
「ふぅん……。あれが噂のサイ・リューランか……」
女性は小声で呟くと本棚の陰からサイの顔を盗み見る。
「ホムンクルスを連れているから大貴族や商人の息子かと思ったんだけど……。お金を持っているようには見えないかな？　お金を持っていそうだったら『本命』のついでにツバをつけとくつもりだったけど……やっぱりやめとこ」

そこまで小声で言うと女性は足音を立てないままサイ達に気づかれないように図書館を後にするのだった。

呼び出し

「サイ・リューラン！」

サイとピオンがブリジッタと分かれて学生寮にある自分達の部屋に向かっていると、突然何者かに呼び止められた。二人が声をした方を見るとそこにいたのは、入学式の時に見た砲兵科の教官の一人だった。

「探したぞ、サイ・リューラン。校長先生がお呼びだ、ついてこい。そこのホムンクルスもだ」

教官はそれだけ言うと返事も待たずにサイとピオンに背を向けて歩きだし、二人もその後について行く。

先程の教官の声に、周囲にいた士官学校の学生達が何事かと教官とその後ろをついて行くサイとピオンを見る。しかしその視線は決して友好的なものではなかった。

何しろ同盟国とは言え他国からの留学生で、入学初日から従者代わりのホムンクルスの少女に性的な悪戯をしているという噂が立てば、悪印象を持たれても仕方がないだろう。……それにサイは、ピオンに胸を押しつけられたり裸を見せつけられたりと、性的な悪戯を「している」ではなく「されている」という違いはあれど、噂のほとんどが事実なので反論する事が出来ずにいた。

その為、周囲の学生達はサイとピオンを入学初日から問題を起こした問題児と考えて見ており、そしてそう考えていたのは学生達だけでなくサイ達の前を歩く教官もであった。

教官は歩きながらサイ達の方へ振り向きもせず「入学初日から校長に呼び出されるとか前代未聞だぞ」とか「何でフランメ王国からの留学生がお前みたいのなんだ」とか愚痴のような小言を繰り返し、それを聞いているピオンの中で怒りが高ぶっていくのを隣にいるサイだけが感じていた。

「（ふふ……。この男、どの様に始末してヤりましょうか？）」

「（落ち着け、ピオン。そんな物騒な事は言うな）」

怒りのあまり目が笑っていない黒い笑みを浮かべたピオンが小声

でそう呟くと、それを聞いたサイは小声で宥めようとする。このまま放っておくと教官に襲いかかって、素手で首をねじ切りそうなくらい凄まじい怒りをホムンクルスの少女は放っていたが、怒りを向けられている教官は気づいていない様であった。
「おい、何を話している？」
「い、いえ、何でもありません」
「ふん。まったく……」
まさか自分がホムンクルスの少女に殺されそうになって、それをホムンクルスの少女の主人に助けられているとは思ってもいない教官は、忌々しそうにサイとピオンを見る。そしてそんな教官の態度がピオンの怒りを更に強くする。
「着いたぞ。お前達、静かにしていろ」
いよいよピオンの怒りが爆発するかと思った時に校長室の前に辿り着き、サイが内心で胸を撫で下ろしていると教官が校長室の扉を叩く。
「校長先生。サイ・リューランとピオンを連れてきました」
「うむ。入りたまえ」
「失礼します」
教官が扉を開けると、校長室には士官学校の校長とアックア公国軍の軍服を着た一人の男がおり、サイとピオンはその軍服を着た男に見覚えがあった。以前、大公の屋敷に泊めてもらっている時に一度だけあったビアンカの部下で、階級は確か中将であったとサイは記憶していた。
「ご苦労。わざわざすまなかったね」
「いえ。……しかしこの様な問題児達に一体どの様な用があるのですか？」
「っ！　貴様！」
校長と教官の会話を聞いて軍服を着た男、中将が教官に向かって怒声を上げる。
「ひっ!?　な、何でしょうか？」
「何だ、ではない！　仮にも未来の軍人を育てる士官学校の教官が、学

生とは言え軍属少佐待遇の彼らになんという口に聞き方だ！」
「ぐ、軍属少佐待遇!?」
　中将の言葉に教官は絶句する。軍属とは軍人ではないが軍に雇われている事を意味し、少佐待遇とは軍の作戦に従事している時は少佐と同様の権限を与えられている事を意味している。
「校長。これはどういう事でしょうか？」
　まさか問題児だと思っていた二人が軍属少佐待遇の人物であったとは知らず教官の顔が一瞬で青くなると、中将はそんな教官を無視して今度は校長の方を見る。中将の鋭い視線を向けられて校長はしどろもどろになりながらもなんとか答えた。
「も、申し訳ありません。その……彼らに関しては事情があまりにも特殊なので、それを知っているのは士官学校でも私を含めて数名だけなのです……。それとサイ君……いえ、サイ殿とピオン殿には朝にあまり印象のよくない噂がたったみたいでして……」
　校長の弁明に中将は一度頷いてから教官に視線を向ける。
「成る程。確かにそれはもっともだ。しかし仮にも教官である人物が噂一つで生徒を決めつけるというのは問題があるのでは？」
「分かっております。彼についてか後日相応しい処分を下します」
「そ、そんなぁ……」
（教官も災難だな。可哀想に……）
　校長と中将の会話に教官は顔を青くしたままその場でへたり込む。その姿を見てサイは内心で教官に同情していたのだが、隣にいるピオンは……。
「ざまぁ♪」
　と、それはそれは心底嬉しそうな笑顔で教官向けて小さく舌を出していた。
「ピオン。お前なぁ……」
「さて、それでは本題に入ろう。サイ君。ピオン君」
　サイがピオンに何かを言おうとした時、中将が二人の前に立ってここにやって来た要件を口にする。
「士官学校入学初日からすまないと思うが、君達には今からビアンカ・

アックア『元帥』の代わりとして哨戒任務に出てもらいたい」

夜空の会話

ゴーレムトルーパー。

それは惑星イクス最強の兵器であり、人類がモンスターを撃退できる唯一の手段。

剣や槍、弓矢や銃に大砲、異能を使った攻撃。軍隊の主な戦い方はこれらの力を多く集めて上手く使いこなす事で、この戦い方でもモンスターの群れを少しの間足止めする事は出来るし、十にも満たないモンスターくらいなら戦って倒す事は出来る。……だがそれだけだ。

軍隊の主な戦い方ではモンスターの群れを長時間相手するのは不可能で、百や千を超えるモンスターと戦えば全滅する未来しかない。モンスターの群れを倒し、人類を守る事が出来るのはゴーレムトルーパーだけなのである。

そんなモンスターを圧倒できるゴーレムトルーパーを人間同士の戦いに投入すると「先にゴーレムトルーパーが戦場に到着した陣営が勝つ」、「ゴーレムトルーパー同士の戦いで戦争の決着が決まる」という流れができるのも当然な話であり、ゴーレムトルーパーの活動に無駄な制限がかからない様にどの国の軍隊でもゴーレムトルーパーの操縦士には戦場で大きな権限が与えられるようになるのもある意味当然な話と言えた。例えそれが軍学校で基本的な訓練と授業しか受けておらず、実戦経験なんて皆無の二十にもなっていない青年でも、ゴーレムトルーパーの操縦士に選ばれれば、どの国の軍でも少佐以上の待遇で迎えられるのだ。

そしてゴーレムトルーパーの操縦士には、定期的に国内を巡回する哨戒任務が義務付けられていた。

前述したようにモンスターを撃退出来るのはゴーレムトルーパーだけだ。その為、国内にある村や街がモンスターに襲われたらゴーレムトルーパーがそこに向かわなければならないのだが、襲われているという連絡を受けてから向かっては間に合わない場合もある。

それを防ぐ為にゴーレムトルーパーの操縦士は、定期的に国内を巡回して、もしモンスターを発見したらこれを即座に退治する哨戒任務

が義務付けられていたのだった。
　しかしアックア公国が保有しているゴーレムトルーパーの一機、ビアンカ・アックア元帥が乗る「ヴァイヴァーン」は、三週間くらい前にモンスターの大群との戦いで起きた「とある事故」により機体に大きなダメージを負い、今も満足に動けないでいた。その穴を埋めるべく、アックア公国はフランメ王国から留学して来たゴーレムトルーパーの操縦士サイ・リューランとその従者であるピオンに軍属少佐待遇の身分を与え、本来ならビアンカが行うはずだった哨戒任務の代わりを依頼したのである。
　ビアンカのゴーレムトルーパー、ヴァイヴァーンが完全に回復するまでの戦力の穴埋め。これもアックア公国がサイ達を強引に留学させた理由の一つであった。
　そして哨戒任務の最中、夜空を飛ぶドランノーガの操縦席ではピオンがこれ以上ない上機嫌で笑っていた。
「ふふふっ♪　それにしてもあの教官の顔、傑作でしたよね、マスター？　マスターと私が軍属少佐待遇だと知った途端顔を青くして……今思い出しても笑いが止まりませんよ。ふふっ♪」
　ピオンが言っているのは数時間前に士官学校の校長室で起きた出来事の事で、問題児だとサイ達を侮っていた教官が驚愕の事実を知って顔を青くする様を思い出して、ホムンクルスの少女はそれはそれは楽しそうに笑う。
「やっぱり権力があると人を黙らせるのに便利ですね♪　士官学校を卒業するとフランメ王国もアックア公国も正式に少佐待遇で迎えてくれると言ってくれてましたし……そうなるとマスターを馬鹿にしていたアイリーン達への復讐もやりやすくなりますよね♪」
　笑顔で言うピオンの頭の中では、アイリーンを初めとするフランメ王国での軍学校時代にサイを見下してきた生徒達を、将来得るであろう権力をどの様に使って復讐するか考えているのだろう。そんなホムンクルスの少女にサイは、額に一筋の汗を流しながら話しかける。
「なぁ、ピオン？　お前、前に俺が望んでいない復讐はしないって言ってなかったか？」

「はい、勿論言いましたよ？　ですが向こうからやって来る分には話は別です。マスターの話を聞く限り、その生徒達はかなり歪んだプライドを持っていると予測され、そんな人間はマスターの事を知ると自らの格の違いも考えずに突っかかって来ることも予想されます。そうなったら私はマスターを守る為に仕方なく……ええ、仕方なく彼らを迎え討たなくてはならないのです」

サイは「仕方なく」の部分を強調して言うピオンの顔を見て確信する。このホムンクルスの少女は、かつての同級生達が自分に突っかかって来たら、それを口実に彼らを完膚なきまでに叩き潰すつもりだと。

確かにサイだってフランメ王国での軍学校時代を思い出すと若干腹が立つし、かつての同級生を見返してやりたいという気持ちもある。しかしその為に相手を再起不能にするつもりはない。

だがピオンの手にかかればサイに突っかかって来た者は肉体的にも、精神的にも、社会的にも抹殺されかねない。そう思ったサイは、軍学校時代の同級生達に出来得る限り接触を取らないでおこうと決めたのだった。

「……ん？」

サイがそこまで考えた時、ドランノーガの操縦席に異変が起こった。

ピー！　ピー！　ピー！

「何だ？　何が起こっている？」

「ちょっと待ってください。……これは」

突然ドランノーガの操縦席にアラームが鳴り響き、サイが周囲を見回すとその隣に座るピオンが素早くドランノーガの機体状態をチェックする。

「ピオン？　これは一体どうしたんだ？」

説明を求めるサイにピオンは、操縦席に鳴り響くアラームが報せる事態の内容を告げる。

「どうやら、今まで製造中だった三人のホムンクルスの身体が完成したみたいですね」

新たな三人のホムンクルス

深夜。士官学校の敷地内にある、とある兵科の女子寮の一室で、一人の女性が机に座って一冊の本を眺めながら呟いていた。

「『計画』の実行は半年先にある全兵科合同の軍事演習で決まり。そこでターゲット達に私がデキる女だってところを見せつけてメロメロにしてからまとめてゲット。……うん。余裕余裕。私なら出来る」

女性は自信に満ちた笑みを浮かべて一人呟くと、手元にある本に意識を移した。

「それでターゲットの中で本命はやっぱりアルベロ・ワーキウね。ワーキウ侯爵家の嫡男で騎兵科一の美形。それで彼以外のターゲットは……」

今女性が見ている本は、士官学校に入学している全ての兵科の男子生徒の情報が記された資料であった。本来ならば一生徒が自室に持ち込むどころか閲覧すらも許されないものなのだが、女性はそんな事を気にする事もなく資料の情報に目を通していき「ターゲット」を選別していく。

「めぼしいのはこれくらいかな？　……それにしてもやっぱり全員婚約者がいるみたいね」

女性は自分がターゲットに選んだ数名の男子生徒の名前を書いた紙を見て面白くなさそうな顔をする。

女性がターゲットに選んだ男子生徒達は、アックア公国でも指折りの名家や大商人の家に生まれた、外見に能力に家柄と全てが備わった、士官学校の男子生徒の中で特に有望視されているエリートばかりであった。そしてそんな彼らには、すでに家同士で決められた婚約者がいた。

「どのターゲットの婚約者もいいところのお嬢様ばかり。特にアルベロ・ワーキウの婚約者なんて大公の第三女のブリジッタ・アックア……」

そこまで言ったところで女性はブリジッタの姿を思い出して、非常に不愉快な表情となる。

「生まれながらのお姫様で、美人で、その上美形の婚約者までいて……恵まれすぎじゃない？　他のターゲットの婚約者達もそう。私なんて……！」
　不愉快な表情から憎しみの表情となった女性は、自らの胸の内に渦巻く嫉妬と憎悪を言葉に込めて吐き出すと、その目に強い怒りの光を宿らせた。
「決めた……！　ブリジッタを初めとするお姫様達から婚約者の愛情を全部奪い取ってやる。『計画』を実行する前に自分達の婚約者が私の物になるところを見せつけてやる」
　そう呟いた女性は、口を三日月の形にした酷く歪な笑みを浮かべていた。
　Ｘ　Ｘ　Ｘ
　ドランノーガの下半身の竜の背部後方、上半身の人型の後ろ辺りには「ホムンクルス製造ユニット」という装備がある。
　これはサイが前文明の遺跡でゴーレムオーブからドランノーガを作り上げたばかりの時、ピオンの操作によってドランノーガが彼女を保存していた保存カプセルを吸収した事により、自己進化機能が働いて作られた装備である。この装備はピオンの予備の肉体を製造して保存しておく他に、彼女と同じ場所に保存されていた三人のホムンクルスの肉体も製造して保存する機能があった。
　しかしピオン以外の三人のホムンクルスは、保存カプセルに何かの不備があったらしく、サイが見つけた時にはミイラのような干からびた死体となっていた。その為、保存カプセルごと吸収した死体から得たデータを元に新しい肉体を製造していたのだが、それが完成したとピオンは言う。
　それを聞いたサイは周囲にモンスターの反応がない事から哨戒任務を切り上げ、人気の無い平原にドランノーガを着陸させた。着陸した後、サイとピオンは操縦席から出てドランノーガの背部後方にあるホムンクルス製造ユニットの前に移動した。
「それでは起動させますがよろしいですか、マスター？」
「ああ、やってくれ」

サイが頷いて見せるとピオンはホムンクルス製造ユニットに指先を接触させる。すると指先が接触した箇所が一瞬だけ光り、続いてホムンクルス製造ユニットが起動した。

ホムンクルス製造ユニットには三つのドアが横に並んでいて、その三つのドアが一斉に上にと開く。開かれたドアの奥にはそれぞれ一人の人影が見えた。

「「……」」

ドアの奥に見える三人の人影は最初は全く動きを見せなかったが、しばらく経つと三人とも動き出して、三人同時にホムンクルス製造ユニットの外に出てその姿を見せた。

「おおおっ!?」

ホムンクルス製造ユニットから出てきた三人のホムンクルスは全員女性で、彼女達の姿を見てサイが思わず声を上げる。

まず向かって右側にいるのは金髪の女性で、背丈はピオンと同じくらいであり、幼さを見せる顔立ちはサイよりも少し歳下の印象を抱かせた。

次に真ん中にいるのはほとんど黒に近い紫の髪の女性で、背丈はサイよりも高く、憂いを帯びた大人びた表情はこの中で最も歳上、二十代前半くらいの大人の女性のように見えた。

最後に左側にいるのは白い髪に褐色の肌をした女性で、背丈はサイよりも高いが真ん中のホムンクルスの女性よりも低いくらいで、サイよりも少し歳上のような感じをさせた。

三人とも同じホムンクルスであるピオンと負けず劣らずの、頭に「絶世の」がついても可笑しくないくらいの美女、美少女揃いであった。しかしサイの関心はそこではなかった。

サイが見ているのは三人の顔ではなくやはり胸。三人のホムンクルスの女性達は、形や大きさは異なるものの、全員が見事な巨乳なのであった。

そしてこれは今更ではあるが、三人のホムンクルスの女性達は今肉体が完成されたばかりなので衣服を着ておらず、サイは隠すものがない六つの肉の果実を瞬き一つせず凝視していた。そして……。

「お、お、お……。男の夢の！　巨乳ハーレムがここに実現した！　ドランノーガ、ありがとぉーーーーー！」

三人の裸の巨乳に感動したサイ……もとい、巨乳好きな馬鹿は夜空に向かって叫んだのだった。

三人の名前

「ふむ。よく分かりませんが、マスター殿が喜んでくれてよかったです」
「そうですね。愛しのマスターが哀しんでいないのはよいことです」
「ふふっ♪　マスター様はとても楽しそうな方ですね。これは先が楽しみです♪」
　夜空に向かって叫んだサイという名の巨乳好きな馬鹿の姿に、三人のホムンクルスの女性がそれぞれの感想を口にするが、その表情と口調から見ても好印象を懐かれているのが分かる。……非常に不可解で羨ましいことに。
「マスター、喜ぶのはそれくらいに。皆もマスターに挨拶をしてください」
　そんなサイと三人のホムンクルスの女性にピオンが声をかける。
　ピオンはドランノーガの自己進化機能を使ってホムンクルス製造ユニットを作る時、自分がそこから肉体を製造される四人のホムンクルスのリーダーになるように設定していた。その為、肉体を製造され時にサイとピオンの情報を与えられた三人のホムンクルスの女性は、彼女の指示に従い挨拶を始めた。
「はい。まずは私から。『ヴィッケ・タイプ』のホムンクルスです。精一杯尽くしてマスター殿に喜んでもらいたいと思います」
　最初に挨拶をしたのは右側の金髪の少女で、曇りのない瞳でサイを見て挨拶をする姿は、主人に尻尾を振る子犬のように見えた。
「では次に私が……。『ヒュアツィンテ・タイプ』のホムンクルスです。愛しのマスターを哀しませないよう努力させていただきます」
　次に挨拶をしたのは真ん中の黒に近い紫の髪の女性で、どこか儚げな笑みを浮かべて挨拶をするその姿からは、サイが今まで感じた事がない大人の色香が感じられた。
「最後は私ですね？　私は『チュベローズ・タイプ』のホムンクルス。いつでもお側にいますので一緒に楽しい時を歩みましょうね、マスター様？」

最後に挨拶をしたのは左側の白い髪に褐色の肌をした女性で、蠱惑的な笑みを浮かべる彼女は他のホムンクルスの女性とはどこか毛色が違うような印象であった。
「……ピオン」
そんな三人のホムンクルスの女性の挨拶を無言で聞いていたサイは、視線を目の前の三人に向けたまま自分の隣に立つホムンクルスの少女に声をかけた。
「はい。どうしましたか、マスター？」
「凄い事を発見したぞ！　女性の胸って大きさや形の違いによってその揺れ方も微妙に異なるんだ！」
まるで世界の真理を解き明かした学者のような顔で叫ぶサ……巨乳好きな馬鹿。三人のホムンクルスの女性がホムンクルス製造ユニットから出てきた時から彼、巨乳好きな馬鹿の視線は彼女達の胸に釘付けで、それは三人が挨拶をしている時も変わらなかったようだ。
「マスター……。三人の挨拶、ちゃんと聞いていました？」
「え？　ああ、それはもちろん聞いていたって。……それにしてもピオンと初めて出会った時もそうだったけど、ホムンクルスって自分の名前を持っていないんだな」
流石にジト目になるピオンに返事をしてからサイは、前文明の遺跡で初めて彼女と出会った時の事を思い出す。初めて会った彼女は自分の名前を持っておらず、今の名前もサイが考えてつけたものであった。
その時の事を思い出したサイは、目の前にいる三人のホムンクルスの女性に提案する。
「なぁ？　ヴィッケとヒュアツィンテとかだと俺が呼びづらいから三人に名前をつけていいか？」
サイの名前をつけるという提案に対して三人のホムンクルスの女性は……。
「本当ですか!?　マスター殿から名前をいただけるなんて嬉しいです！」
金髪の少女は今にも跳ね上がらんばかりに喜び、

「私は構いません。どうぞ愛しのマスターのお好きなように」
黒に近い紫の髪の女性は微笑を浮かべて小さく頭を下げ、
「ふふっ。素敵なお名前をお願いしますわね、マスター様」
白い髪に褐色の肌をした女性は先程と同じ蠱惑的な笑みを向けてくる。
どうやら三人とも名付けらてもよさそうなので、サイはしばらくの間考えた後、三人の名前を決めた。
「……よし、決めた。金髪の君。君の名前はヴィヴィアンだ」
「はい。ヴィヴィアンですね。覚えました」
サイに名付けられた金髪の少女、ヴィヴィアンが元気よく返事をする。
「貴女の名前はヒルデで」
「分かりました」
黒に近い紫の髪の女性、ヒルデは小さく頭を頭を下げて了承の態度を示した。
「それで貴女の名前はローゼ」
「承知しました。名前という素敵なプレゼント、ありがとうございます」
白い髪に褐色の肌をした女性、ローゼは頷いて感謝の言葉を述べる。
「全員マスターから名前をつけてもらいましたね。これで貴女達も正式にマスターの『モノ』です。これからはマスターの為に、力を合わせて全力でマスターをサポートしていきましょうね」
「「はい」」
サイが名付け終わるの見てピオンがヴィヴィアン、ヒルデ、ローゼの三人に声をかけ、三人のホムンクルスの女性はそれに声を合わせて返事をした。

サイの選択

「み、皆、ちょっと大げさすぎないか？」
　ピオン達の力を合わせてサイのサポートをするという発言に、当の本人が若干気圧されたように呟いた。ホムンクルスが自分の主人に尽くす存在だという事は、この一月にも満たない期間で充分すぎるほど理解したつもりのサイだったが、こうして改めて絶世の美女である四人に言われると気後れしてしまう。
「いいえ。ちっとも大げさではありません。私達ホムンクルスにとって様々な場面でマスターのお役に立つ事こそが存在意義であり、至上の喜びなのですから」
　ピオンがサイに向かって言うと他の三人のホムンクルスも同意するように頷き、次にローゼが口を開く。
「それでは早速マスター様のお役に立ちたいと思います」
「え？　何をするんだ？」
「はい。まずは……」
「え……？」
　サイが聞くとローゼは妖艶な笑みを浮かべて彼に近づき、服を脱がせようとしてきた。一瞬、彼女が何をしてきたか分からなかったサイだったが、慌ててローゼの手を捕まえて止める。
「ちょっ!?　ちょっと待てローゼ！　一体何をするつもりだ!?」
「何を、と言われましても……。今は夜で、殿方の前に裸体を晒した女性が三人もいるとなれば、する事は一つしかないでしょう？　……それに、マスター様の『そちら』も苦しそうですし？」
　ローゼはそう言うと意味ありげな視線をサイの股間にと向ける。
「ど、どこを見ているんだよ!?」
　サイは左手で股間を隠してローゼに怒鳴るが、先程からローゼ達の裸を見て興奮していたのは事実であったので、その怒声にはあまり勢いがなかった。そして褐色の肌をしたホムンクルスの女性は、そんな自分達の主人を微笑ましいものを見るような目で見つめる。
「そんなに恥ずかしがらなくても良いではありませんか？　私達ホム

ンクルスは男性の主人の子供を産んだり、この体を持って主人の心の疲労を癒すのも大切な役目。すでにマスター様はピオンさんの体を味わっているのでしょう？　でしたら次は私達の体も味わってくださいな？」
「はい！　マスター殿が喜んでくれるのでしたら、私をいつでもどこでも抱いて下さって結構です！」
「私も……。愛しのマスターの哀しみを癒せるのでしたらこの体、捧げます」
　ローゼが妖艶な笑みを浮かべながら言うと、それにヴィヴィアンが元気よく、ヒルデがゆっくりとした口調で同意する。その申し出は男としてはこれ以上なく魅力的で嬉しいものなのだが、それに対してサイとピオンは気不味い表情を浮かべていた。
　そんなサイとピオンの表情に疑問を感じたローゼが首を傾げる。
「……？　マスター様？　ピオンさん？　どうかしましたか？」
「いや……。その、期待を裏切って悪いんだけど、俺とピオンってまだ……シていないんだよ……」
「……はい」
『『っ!?』』
　サイとピオンの告白にローゼにヴィヴィアン、ヒルデの三人が驚愕の表情となる。
「そ、そんなまさか……！　私達ホムンクルスは世間一般の殿方に好かれるように顔立ちや体を調整されているのに手を出していないだなんて……。まさかマスター様は不能？　それとも同性愛の方なのでしょうか？」
「誰がだ!?　そうじゃなくてこの最近、色々と忙しくて機会が無かっただけだって！」
　絶望したような顔となって言うローゼの言葉にサイは顔を真っ赤にして怒鳴り返す。
　サイの言葉は嘘ではない。ドランノーガを手に入れた直後から彼は、モンスターの大群との戦闘、フランメ王国とアックア公国のトップ二人との会談、他国の士官学校への留学と立て続けに大きな出来事

に遭遇して、中々ピオンと二人っきりになれず「行為」をする機会に恵まれなかったのだ。
「ああ、そうでしたか」
サイの説明にローゼだけでなく、後ろで話を聞いていたヴィヴィアンとヒルデも安堵した表情となる。
「それなら今がその絶好の機会です。マスター様、どうぞ私達の体を味わってくださいませ。……さあ、誰から抱いてくださいますか？」
「えっ!?　そ、それは……」
ローゼに聞かれてサイは顔を赤くすると、目の前にいる三人のホムンクルスを見る。
「……ふふ♪」
蠱惑的な笑みを浮かべるローゼは、士官学校で出会ったあのブリジッタよりも大きな乳房を惜しげもなく揺らしており、この中で唯一の褐色の肌が異様な色香を出していた。
「はい！　はい！　私を選んでくれたら、頑張って喜ばせます！」
その場で何度も小さく飛んでみせるヴィヴィアンは、飛んでいる事で大きく揺れているピオンより僅かに大きな乳房に、ほどよく引き締まった肉体が健康的な色気を振りまいていた。
「愛しのマスター、誰を選ぶのも貴方の自由です。……しかし私を選んでくれたら嬉しいです」
静かな笑顔をみせるヒルデは、ローゼのものよりも更に大きいこの場で最も立派な肉の果実を胸に実らせており、夜空の月や星の光を反射する柔らかな肌が大人の魅力を感じさせた。
「お、俺は……ん？」
それぞれタイプこそ違うが絶世の美女である三人のホムンクルスを前に、サイが初めて肌を重ねる相手を考えていると、不意に服を小さく引っ張られた。
サイが服を引っ張られた方を見ると、そこにはスカートを脱ぎ捨て、裸の上に前を開いた士官学校の上着を羽織っただけという姿のピオンがいた。
「ま、マスター……。わ、私はマスターの最初のホムンクルスです。確

かに、今までマスターにご奉仕出来なくて、胸もこの中で一番小さいですけど、私はリーダーで……最初のだから……抱かれるのも、最初のはずだから……。マスター？　私を、選んでくれますよ、ね？」

「……!!」

真っ赤な顔で上目遣いなって、捨てられそうな子犬のような視線を送ってくるピオンを見て、サイの中で理性の糸が「プツン……!」という音を立てて切れた。

数時間後。哨戒任務を追えたドランノーガはアックア公国の首都ヴァンリスクへと帰ってきた。しかしその帰還は予定よりも二時間も遅く、ドランノーガには見知らぬホムンクルスの女性が三人も乗っており、その上サイが酷く消耗している様子に、出迎えたアックア公国の軍人達は全員首を傾げたのであった。

朝の名物

朝。日が昇り始めた頃、サイは士官学校の学生寮の自室で目を覚ました。

「……もう朝か」

「おはようございます、マスター」

「おはようございます、マスター殿」

「愛しのマスター、おはようございます」

「おはようございます、マスターさまー今日もお元気そうで何よりです」

目を覚ましたサイが呟くと、それに気づいたピオンとヴィヴィアン、ヒルデとローゼが朝の挨拶を言う。四人のホムンクルスの女性達は衣服を全て脱ぎ捨てた裸の姿のままサイと同じベッドに寝ており、ピオンとヴィヴィアンはサイの体の上に自分達の裸体を乗せて、ヒルデとローゼはそれぞれサイの右腕と左手に抱きついていた。

「……ああ。皆、おはよう」

サイは自分のすぐ目の前に広がっている極楽のような光景に心から幸せそうな笑みを浮かべてピオン達に挨拶を返すのだった。

X　X　X

早いものでアックア公国の士官学校と大学が新入生を迎えてから二ヶ月の時が過ぎた。

二ヶ月も経てば新入生同士や新入生と先輩との間に交流が生まれ、生徒達は学生寮から士官学校もしくは大学に行くまでの間、挨拶と共にたわいない会話を交わしていた。しかし一人の生徒が「それ」に気づくと、それをきっかけに他の生徒達も「それ」に気付いて知らない間に視線を「それ」にと集中させる。

「サイだ……」

生徒の一人が自分達の注目を集めている「それ」の、一人の士官学校の男子生徒の姿を見て呟く。

サイ・リューラン。

アックア公国の隣国であるフランメ王国から留学してきた留学生

で、入学初日から様々な噂を持つ彼を、学園内で知らない者はいなかった。
「アイツ、今日は出てきたのかよ……」
サイの姿を見て士官学校の生徒達、主に今年彼と同じ砲兵科に入学した生徒が不機嫌そうな表情となる。
サイは入学二日目を最初に、時折授業を無断欠席する事がある。しかし砲兵科を始めとする士官学校の全兵科の教官達は、その事についてサイを注意する事がなく、もしても軽い注意のみである。
教官達はサイに話しかける時には必ず緊張した表情となっており、その態度を見て彼の無断欠席には何か事情があるのは分かるが、それでもこうあからさまな特別扱いを見せられてはいい気がしない。それにサイの姿を見て生徒達が不機嫌そうな表情となる理由は他にもあった。
「いつ見ても綺麗だよな。何であんなヤツと……」
顔を赤くした生徒がサイを、正確には彼の周囲にいる四人の女性を見ながら、彼女達に囲まれているサイへの妬みの声を漏らす。
サイの右側で興味があるものがあればそれに近づき、そしてすぐにサイの元に戻るのを繰り返すヴィヴィアン。
主人である青年の鞄を代わりに持ってサイの右斜め後ろについて歩くヒルデ。
自分に視線を向けてくる男子生徒に色香を感じさせる微笑みを返しながらサイの左斜め後ろを歩くローゼ。
そしてサイの左腕にまるで恋人のように体ごと抱きつきながら歩くピオン。
四人とも非常に整った顔立ちと体型をしており、絶世の美女と呼んでも過言ではない。その為、男子生徒達に一部の女生徒達がピオン達を憧れの目で見て、それと同時に彼女達四人を侍らせているサイに嫉妬の視線を送るのは無理がない事であった。
しかもサイの周囲にいる美女四人は、彼に強い親愛の情を懐いているのが見るだけで分かり、特にピオン。入学初日からサイの側にいた彼女は元から彼に愛情を見せていたが、ある日を境にその感情が更に

強くなったみたいで今の様により密着するようになり、恋する乙女の様な表情は彼女の美貌をより際立たせて、それが周囲の嫉妬を強くしていた。
「なぁ、彼女達ってホムンクルスなんだろ？　あの前文明の遺産の？」
「ああ、何でも曾祖父さんが見つけたやつを実家の蔵で見つけてマスター登録したみたいだぜ」
「いいな～。俺の家の倉庫にもホムンクルスが眠っていないかな？」
「確かに羨ましいよな……。ホムンクルスって、体は人間と同じなんだろ？　マジでハーレムじゃないか」
「俺はそれより無断欠席しても怒られない方が羨ましいよ。普通無断欠席なんてしたら死ぬほどの罰をくらって最悪退学なのに、サイはお咎めなしなんだからさ」
「そうだよな。いつもだったら鬼のように厳しい教官達もサイには強く言わないしな……」
　学生達がピオン達四人を引き連れて歩いて行くサイを見ながら話す。その言葉はサイやピオンの耳にも届いていたのだが、もはやいつもの事なので彼らの反応は特になかった。
　本人達が何も言わないのをいい事に、生徒達はサイ達の噂を口にする。そのほとんどは彼を羨み、嫉妬する内容であったが、最後には全員同じ言葉を口に出す。
　結局、サイって何者なんだ？
　隣国のフランメ王国の貴族ではあるらしいが、サイの実家は貴族とは名ばかりで平民と同じ暮らしをしている貧乏男爵家だという。しかしこの、比較的裕福な家の出しか入学出来ないアックア公国の士官学校に留学し、教官達から明らかな特別扱いを受けている。
　更にサイが連れているピオンを始めとする四人のホムンクルスなのだが、今動いているホムンクルスのほとんどは感情が希薄な「生きている人形」といった感じのもので、彼女達のように感情豊かなホムンクルスなんて聞いた事もなかった。
　これらの情報は、生徒達に嫉妬の感情と共に好奇心を懐かせるには充分で、気がつけば生徒達は士官学校の校舎へ向かうサイ達の背中を

見送っていた。
サイと彼に従う四人のホムンクルス、ピオンとヴィヴィアン、ヒルデにローゼ。彼ら五人の登校は、この士官学校と大学が一つになったアックア公国の学園の名物になりつつあった。

実験

「まったく……。ボインスキーのヤツもいい加減にしろよな……」

夜。士官学校の授業を終えて学生寮にある自室に戻ったサイはうんざりとした顔でぼやいた。

サイが今名前をあげたのは、砲兵科の教室で彼の隣の生徒のことだ。ボインスキーは入学初日からサイを目の敵にしていて、今日も一日中血涙を流さんばかりの表情で睨み付けてきて、お陰で授業にあまり集中できずにいた。

訓練期間が三年ある軍学校に対して士官学校の訓練期間は一年しかない。その上サイはビアンカの代わりとして哨戒任務をアックア公国から依頼されていて、授業を受けれる回数が他の生徒よりも少ない。その貴重な授業を受けれる時間を邪魔するのは止めてほしかった。

「ボインスキー……あの豚ですか。マスターの邪魔をするなんて……始末しますか？」

「む？　ボインスキー殿を始末するとマスター殿が喜んでくれるのですか？　でしたら私が……」

「そうとは限りませんよ。不用意なことをすれば愛しのマスターだけでなく他の方々も哀しむ事になるかもしれません」

「それだったらむしろあのボインスキーさんと一度じっくり話し合ってはどうですか？　私としてはそちらの方がただ始末するより楽しそうですけど」

サイのぼやきにピオン、ヴィヴィアン、ヒルデ、ローゼの四人がそれぞれの意見を口にする。

サイとピオンを始めとする四人のホムンクルスの女性は同じ部屋で生活している。士官学校の学生寮は全て二人部屋で元々この部屋はサイとピオンの二人で使っていたのだが、ヴィヴィアンとヒルデにローゼが来てからは、一つのベッドにサイと二人のホムンクルスの女性が添い寝してもう一つのベッドに残った二人のホムンクルスの女性が寝る、そして時には今日の朝のように全員が一つのベッドで寝る

という生活を送っていた。
なんという羨ましい学生ハーレム生活。サイがボインスキーに敵視される理由もまさにそれであり、彼がいつボインスキーのような嫉妬にかられた男子生徒に背中をメッタ刺しにされないか心配である。
「ボインスキーと話し合うか……。やってみるか」
「むぅ」
サイはとりあえず平和的なローゼの意見を採用することにして、自分の意見が採用されなかったピオンが可愛らしく頬を膨らました。
「そんな顔をするなよ、ピオン。それより始めるぞ」
『はい』
サイの言葉にピオン達四人のホムンクルスの女性が同時に返事をすると学生服を脱ぎ始めて、それを見たサイが驚いた声を上げる。
「なっ!? 何脱いでいるんだよ?」
「あら? これからマスターの疲れを癒す為にいつもより早く肌を重ねるのではないのですか?」
顔を赤くするサイに、服を脱ぐのを止めたピオンが首を傾げながら訊ねる。
「いや、違うから。俺が始めるって言ったのは例の『実験』の事だから」
「ああ、そちらの方ですか」
サイの言葉にピオンを始めとする四人のホムンクルスの女性達が納得した表情を浮かべる。
ピオン達四人のホムンクルスの女性は数日前に突然、本人達も知らなかった機能が使えるようになり、サイが言う実験とはそれの効果を確認するものであった。
「分かってくれたか? この間と同じ実験をするから机にある紙とペンを……」
「いえ、マスター。今日はいつもとは違う実験をしませんか?」
サイの言葉を遮ってピオンがそう提案する。
「いつもとは違う実験? 何をする気だ?」
「はい♪ まず私達四人の一人が後ろを向いて、残った三人のオッパイをマスターに触ってもらって、後ろを向いた一人がオッパイを触っ

た順番を当てるというものです♪」
「何その素敵すぎる実験!?」
　ピオンが提案した実験内容に思わず驚きよりも喜びの感情の方が強い声を上げるサイ・リューランという異名を持つ巨乳好きな馬鹿。
「マスターも乗り気なようでなによりです♪　それでは早速最初に実験する人を……」
「それは当然ピオンさんですね」
　ピオンの言葉の途中でローゼが当然のように言う。
「はい!?　な、何故?」
「何故って、こういうのは提案した本人達が最初にするものでしょう?　ヴィヴィアンさんとヒルデさんもそう思いますよね」
　ローゼは詰め寄ってくるピオンに答えるとヴィヴィアンとヒルデの方を見て、話を振られた二人はこれに縦に振った。
「ローゼさんの言う通りだと思います。ピオン、頑張ってください」
「私も同じですね。私も言った本人からすべきだと思います」
「〜〜〜!　分かりましたよ!　もう!」
　ローゼだけでなくヴィヴィアンとヒルデにも言われてピオンは、ふてくされたようにベッドに向かってその上で横になりサイ達に背中を向けた。
「さあ、ピオンさんの準備も出来たみたいですし始めましょうか、マスター?」
「あ、ああ……」
　ベッドの上でふて寝をするピオンの背中を見て妖艶な笑みを浮かべるローゼ。そんな彼女の言葉にに頷いて見せてサイは実験を始めた。
　今サイの目の前にあるのはヴィヴィアンにヒルデ、そしてローゼといった絶世の美少女。しかも彼女達は先程まで服を脱ぎかけていた半裸の状態で、それを見て彼の中の情欲が高まるが、サイはそれを何とか抑えて愛撫をするのではなく実験をする為に彼女達の体へ手を伸ばす。
　まずサイが触れる事にしたのはヴィヴィアンの右の乳房だった。

万が一触れる音で誰の胸を触ったかピオンにバレないよう、ゆっくりと音を立てずに柔らかな乳房に触れる。
「……！」
サイがヴィヴィアンの乳房に触れた瞬間、ヴィヴィアンは思わず声を上げそうになったが両手で口を塞いでそれを阻止する。彼女の右の乳房の柔らかさを掌で堪能した後、サイは別の乳房を触る事にする。
「……♡」
次にサイが触ったのはローゼの左の乳房。触られたローゼは笑みを崩してはいなかったが、それでも頬を赤く染めて幸せそうな顔をしていた。
その後サイは続けてローゼの右の乳房、ヴィヴィアンの左の乳房と触り、触っていないのはヒルデだけとなったところで一つの悪戯を思いついてそれを実行した。
いよいよヒルデの番となったその時、サイは彼女の二つある乳房を同時に鷲掴みにしたのだ。
「ーーーーー!?」
いきなり両方の乳房を同時に鷲掴みにされたヒルデは、驚きと乳房を愛撫される感触に大声を出しそうになるが歯をくいしばって耐え、サイが乳房から手を離すと同時に床へたり込んだ。
「……ヴィヴィアンの右、ローゼの左、ローゼの右、ヴィヴィアンの左。そしてヒルデの両方」
ヴィヴィアン達三人の体を触り終えたところで、ベッドの上でこちらに背中を向けているピオンが不機嫌そうな声で、サイがヴィヴィアン達の体を触った順番を言う。そしてそれは見ていたかのように全て合っていた。
「正解。実験は成功のようだな」
ピオンが胸を触った順番を全て言い当てた事にサイは満足気に頷く。そんな青年にベッドの上でふて寝しているホムンクルスの少女は相変わらず不機嫌そうな声で話しかける。
「……マスター。今度は私の番ですからね？　私も皆のように愛して

くださいよ？」
「分かっているよ、ピオン」
すねた表情で不機嫌そうに言うピオンにサイは苦笑をしながら答える。
その後サイは「実験」という名目でピオンの体を他の三人と同じくらい触ってその柔らかさを堪能し、その頃にはピオンの表情からは不機嫌さは消えてなくなっていた。

図書館での会話

「なるほど。それはとても興味深い話ですね」
　サイが学生寮の自室でピオン達が使えるようになった新機能の実験をした次の日。授業と訓練を終えた夕方に、図書館にいたブリジッタに昨日の実験の話をすると、彼女は非常に興味深そうな表情となって頷いた。
「ブリジッタはピオン達が使えるようになった機能について知っている事はないか？」
「ええと……」
　サイに聞かれてブリジッタは少し困った顔になって首を横に振る。
「ごめんなさい。私もホムンクルスについてはいくつかの文献で知ってはいますけど、ピオンさん達にも分からない事はちょっと……」
「そうか。じゃあやっぱりこのまま実験をして効果を確認するしかないか」
「そうですね。それにしても本当に興味深いことです」
　詳しい情報は得られなかったがあまり落胆していないサイの言葉にブリジッタは頷くと、もう一度ピオン達の新機能を興味深いと言う。
「ピオンさん達、ホムンクルスの額にある金属製の角は、脳の情報処理を補助する機能だけでなく周囲の情報の感知する機能があるというのは、前文明の文献や現存するホムンクルス達の証言から知られていましたが、まさかそんな機能まであったなんて……。これはピオンさん達だけが使えるようになったものなのか、それとも今まで知られなかったものなのか……」
　学者のような顔になって自分の考えをまとめるブリジッタを、サイ達は少し驚いた顔で見てピオンが話しかける。
「ブリジッタさんは本当に私達ホムンクルスを、というか前文明について詳しいのですね」
「え？　ええ、そうですね。私、子供の頃から前文明に興味があって……。ですからピオンさん達から前文明の詳しい出来事を聞けるの

はとても興味深いです。特にモンスターは前文明が開発した生物兵器だと知った時は本当に驚きました」
ピオンに声をかけられて自分の世界に入っていたブリジッタは我に帰って返事をする。
本人が言ったように前文明に強い興味を持っているブリジッタは、子供の頃から前文明について調べていた。最初は家にある前文明について書かれた書物を読む程度であったが、時が経つにつれて調べる内容は深くなっていってもはや「調べる」ではなく「研究する」と言った方が適切なレベルとなり、今では前文明を専門に扱っている歴史学者と同等の知識を持っていた。
ブリジッタが大学の授業が終わると必ず図書館に来るのも、大学の勉強の為ではなく前文明の研究の為で、前文明の詳細な情報を持っているピオン達との会話は非常に有意義なものであった。
その後もピオン達から前文明の事を楽しそうに聞くブリジッタに、サイは以前より気になっていた事を聞く事にした。
「なぁ、ブリジッタ？」
「何ですか、サイさん？」
「何でブリジッタはゴーレムトルーパーと操縦士を怖がっているんだ？」
以前ブリジッタの叔母でありアックア公国のゴーレムトルーパーの操縦士であるビアンカは、彼女がゴーレムトルーパーとその操縦士である自分を怖がっていると言っていた。
しかしゴーレムトルーパーもまた前文明の遺産の一つで、他の遺産と同様に前文明の研究をする重要な資料である。それを前文明の研究をしているブリジッタが怖がる理由がサイには分からなかった。
だからサイはこの場でブリジッタに聞いてみたのだが、彼女から返ってきたのは予想もしていない返事だった。
「え？　私がゴーレムトルーパーを怖がる？　そんな事あるはずがないじゃないですか？」
何を言っているのか分からないという顔をするブリジッタに、サイもまた訳が分からないという顔となる。

「何？　だってビアンカ様はブリジッタがゴーレムトルーパーと自分を怖がっているって言っていたぞ？」
「……ああ、その事ですか」
　サイの言葉にブリジッタは一瞬気まずそうな顔をしてから彼の目を見る。
「重ねて言いますが私はゴーレムトルーパーを怖がってはいません。ゴーレムトルーパーは現存する前文明の遺産で最高の状態を保つ資料であり、人類が作り出した最高の芸術品です。そしてそれを操ってこのアックア公国を護るビアンカ叔母様も尊敬する事はあっても怖がる事などあり得ません」
　サイの目を見ながら言うブリジッタの声は真剣なもので、その言葉に嘘偽りなどない事が分かる。だがだからこそ余計に分からない事があった。
「じゃあ、どうしてビアンカ様を避けているんだ？　俺やピオンの時だって最初は中々話しかけてこなかったじゃないか？」
「それはゴーレムトルーパーの操縦士であるサイさんとピオンさんに気安く話しかける事が畏れ多かったからです。この図書館で初めて声をかけた時だって勇気をふりしぼったのですよ？　ビアンカ叔母様の件は、その……」
　そこまで言うとブリジッタは顔を赤くして顔を伏せる。
「子供の頃、ビアンカ叔母様と一緒にヴァイヴァーンに乗せてもらった事があったのですが……その時に色々ありまして……。その事が忘れられず……合わせる顔がなかったと言いますか……」
　言っている内にブリジッタは、ビアンカと一緒にゴーレムトルーパーに乗った時の出来事を思い出して、赤かった顔が更に赤くなり言葉も徐々に小さくなっていく。
「と、とにかく！　私がゴーレムトルーパーやビアンカ叔母様を怖がっているなんてあり得ませんから！　それでは失礼します！」
　やがてブリジッタは自分の中にある羞恥の感情に耐えきれなくなって、それだけを言うと逃げるようにサイ達の前から去って行くのだった。

剣術訓練

「はああっ！」
「やあっ！」
　サイがアックア公国の士官学校に入学してから三ヶ月が経った頃。フランメ王国王都リードブルムにある士官学校の校庭では、何人もの学生達が気合の入った声を上げていた。
　今日、フランメ王国の士官学校では全兵科合同の剣術訓練が校庭で行われていた。生徒達は教官に指名された者同士で二人一組になると、お互い相手に向かって訓練用の木剣を振るい練習試合を行う。
　剣術の訓練はどの兵科でも行われている必修科目の一つである。その上、今日のような全兵科合同の訓練では軍の人間が視察に来る事があり、訓練の成績次第では士官学校卒業後の軍の配属に影響が出る事もある為、生徒達は皆真剣に訓練を行っていた。
　そんな生徒達の中で好成績を修めているのが槍兵科と騎兵科の生徒である。
　槍兵科は長槍を構えて敵が自軍の陣地に侵入してくるのを防ぐ防衛戦であり、剣を使った近接戦を行う機会が他の兵科よりも多い為、剣術の訓練に力を入れていた。
　そして騎兵科は剣と銃を装備し、騎馬の機動力をもって戦場を駆け巡り戦う遊撃部隊で、槍兵科と同じくらい剣を使う機会が多い為、こちらも剣術の訓練に力を入れている。
　ちなみに騎兵科は軍内で最も人気のある花形とされている。これは騎兵科が敵陣への強襲から偵察や伝令と様々な場面で活躍出来る事と、惑星イクス最強の兵器ゴーレムトルーパーと同じ「動物に乗って戦う姿」が縁起がいいとされているからである。その為、騎兵科を希望する者は非常に多く、自然と騎兵科は大勢の希望者の中から選ばれたエリート揃いとなる。
　そして訓練で好成績を修めている槍兵科と騎兵科であるが、そのほとんどの生徒が人間離れした速度で動き剣を振るっていた。
「超人化」の異能。

自身の肉体を強化して人間離れした身体能力を発揮できるようになる異能。槍兵科と騎兵科の生徒のほとんどはこの「超人化」の異能の使い手であった。
「よお」
「ああ、お疲れ」
練習試合で試合相手の生徒をほんの数十秒で倒した槍兵科の生徒が、同じく試合相手の生徒をすぐに倒した騎兵科の生徒に話しかけて、彼もそれに返事をする。彼らは三ヶ月前までは同じ軍学校に通っていた同級生であった。
「余裕だったな」
「当然だろ？　俺達には『超人化』の異能があるんだ、同じ『超人化』の異能を持つ奴以外にはそうそう負けたりしないさ。……もっとも」
槍兵科の生徒に騎兵科の生徒はそう答えると、ある方向に視線を向けた。騎兵科の生徒の視線の先には練習試合を行っている男女一組の生徒達がいた。
男子生徒も女子生徒も「超人化」の異能の使い手で、人間離れした速度で凄まじい戦いを繰り広げているのだが、戦いは女子生徒の方が優勢であった。男子生徒の剣を危なげなく防ぎ、やがて相手の剣を弾き飛ばして自分の剣を相手の喉元に突きつける女子生徒を見ながら騎兵科の生徒は呟くように言った。
「それでもアイリーンに勝てる気は全くしないけどな」
「同感」
騎兵科の生徒の言葉に槍兵科の生徒も頷く。今男子生徒に勝った女生徒、アイリーン・クライドもまた三ヶ月前までは騎兵科の生徒と槍兵科の生徒と同じ軍学校の同級生で、アイリーンと同じ学年にいた生徒で彼女の実力を知らない者はいなかった。
最初、軍学校に入学したばかりのアイリーンは「クライド家の生まれ」という理由で周囲から遠巻きにされていたが、彼女はすぐに自身が持つ「超人化」の異能の力と剣の腕で、自分を侮る生徒達を黙らせた。その軍学校では戦闘能力が高い者が優遇される風潮があり、力を示して見せたアイリーンは同級生だけでなく教師からも一目置かれ

る存在となったのだ。
「……そういえばアイリーンで思い出したけど、サイの奴はどうしたんだ？」
槍兵科の生徒が口に出したのはアイリーンと一緒に入学した彼女と同郷の同級生の名。
「さあな？　アイツの家、貧乏男爵家だしアイリーンのように援助を受けられるはずなんてないから、さっさと軍に入隊したんじゃないか？」
槍兵科の生徒の言葉に騎兵科の生徒が答えるが、彼の言葉と表情には強い嘲りの色が見えた。
先にも言ったが、この二人の生徒とアイリーンが通っていた軍学校では戦闘能力が強い者が優遇される風潮がある。その為、使える異能が戦闘に向かず、何の後ろ盾もないサイは軍学校の同級生達に下に見られていた。そしてこの槍兵科の生徒と騎兵科の生徒も軍学校時代にサイを馬鹿にしていて、それは今も同じであった。
「ははっ！　軍学校から軍に入隊したんじゃまだまだ下っ端だろ？　俺達が卒業したらサイの奴を部下にしてやるってのはどうだ？」
「ああ、それはいいな」
軍学校を卒業して軍に入隊しても一番下からではないが、下から二番目くらいの階級からのスタートになる。それに対して士官学校を卒業した者は軍に入隊すると最初から少尉の階級が与えられる。
槍兵科の生徒と騎兵科の生徒は、将来自分達の部下になっているサイの姿を想像して嘲りの笑みを浮かべた。
X　X　X
槍兵科の生徒と騎兵科の生徒が笑っていた頃。アックア公国の士官学校でも生徒同士の剣術訓練が行われていた。
「ぶひぃいいっ!?」
「馬鹿なボインスキーがやられただと!?」
「ボインスキーは『超人化』の異能の使い手で上位の剣の使い手なのに！」
一対一で行われる生徒同士の練習試合で一撃で倒された男子生徒、

ボインスキーの姿に練習試合を見学していた生徒達達が驚きの声を上げる。
そしてボインスキーを一撃で倒したのは、アックア公国の隣国フランメ王国からの留学生サイ・リューランであった。彼は自分が今さっき手に持っている木剣を腹に叩き込んで気絶させたボインスキーを見て、驚いた顔をしていた。
「まさか、『超人化』の異能を使った相手にあっさりと勝てるだなんて……」
サイは自分の体が、ドランノーガに初めて乗った時にナノマシンによって強化されている事を理解していたが、実際に「超人化」の異能の使い手と戦う事で自分がどれだけ強くなっているかを実感することになった。

フランメ王国の士官学校でサイの事を嘲笑っていた二人の生徒は知らない。
今のサイが自分達が知るかつてのサイ・リューランとは全く違う存在となった事を。
サイが「超人化」の異能の使い手すらもあっさりと倒せる力だけでなく、ゴーレムトルーパーという一国すらも滅ぼせる力を手に入れた事を。

同類

「マスター様。お疲れ様でした」
「怪我がなくて本当に良かったです。愛しのマスター」
「マスター殿！　見事な勝利でした！」
「流石マスター。私はマスターが勝つのを信じてました」
「おあっ!?」
『……!?』
練習試合を終えたサイが自分の従者である四人のホムンクルスの女性の元へ戻ると、ローゼが笑みを浮かべて出迎えてヒルデが彼から木剣を受け取り、ヴィヴィアンとピオンが勢いよく抱きついてきた。
その際にピオンとヴィヴィアンのスカートがめくれて、下着のつけていない彼女達の形のよい裸の尻が露となり、それを見た男子生徒達は鼻血が出そうになった鼻をおさえながらサイに嫉妬の目を向けた。
ここまでは士官学校に入学してから何度も繰り返されているやり取りなのだが、今回は少し様子が違っていた。
『……』
ピオン達四人に囲まれているサイを嫉妬の目で睨み付けていた男子生徒達は、何かに気づくと視線をサイ達とは別の方へ向ける。その時の男子生徒達は、まるで憧れの女性を見る初恋を覚えた思春期の男子のような恍惚とした表情をしていた。
「一体どうしたんだ？」
男子生徒達の変化に疑問を覚えたサイは、彼らの視線の先を見てみるが、そこには数人の男女の生徒達が会話をしているだけであった。
何故男子生徒達があのような恍惚とした表情をしているのか分からず首を傾げていたサイは、彼らから少し離れた所にいる一人の男子生徒の姿を見つけた。その男子生徒は、練習試合で怪我をしたのか地面に座り込んで他の生徒達の練習試合を見学していた。
「おーい、ビークポッド」
「ん？　サイか。どうした？」
サイがその男子生徒の名を呼びながら近づくと、名前を呼ばれた男

子生徒はその場で立ち上がって彼の方を見る。
ビークポッドと呼ばれた男子生徒は、身長が二メートル近くあり筋骨隆々の逞しい体格を持つ生徒だった。その上、禿頭の目つきが鋭い悪人顔をしている為、とてもサイと同じ年齢の士官学校の生徒には見えず、よくて歴戦の傭兵悪くて山賊団の頭領といった印象である。
しかし話をしてみると中々気のいい生徒で、彼はこの士官学校で数少ないサイの話し相手であった。
「なぁ、ビークポッド。彼らは一体どうしたんだ？」
「……ああ、そうか。お前はよく士官学校を休むから知らなかったな」
サイが恍惚とした表情の男子生徒達を指差して聞くと、彼が指差した先を見たビークポッドは納得したように頷いてから説明してくれた。
「この最近、一人の騎兵科の女子生徒が男子生徒達の間で人気になってな、あいつらは全員その女子生徒に熱をあげているやつらだ」
「へぇ、それでその女子生徒って？」
「彼女だ」
興味を覚えたサイが聞くと、ビークポッドは男子生徒達が見つめている先、先程彼も見た仲良く会話をしている数人の男女の生徒達を指差した。よく見るとその生徒達は女子生徒が一人だけで他は全員男子生徒で、恐らく一人だけの女子生徒が噂の人物なのだろう。
「エレナ・キャンダル。最近になってアックア公国でも有数の富豪が養女に迎えた娘らしい。成績は座学実技共に優秀で、その上人当たりもいいそうだぞ」
「成る程……。それは人気者になるわけですね」
「そうですね。それに中々可愛らしい方みたですし」
「あのエレナさんの周りにいる男子生徒の皆さん、とても幸せそうですね」
「ふむ……。あれが男性が女性を侍らせる通常のハーレムの逆バージョン、通称『逆ハー』という奴ですか。初めて見ましたね」
ビークポッドが男子生徒達に囲まれている女子生徒、エレナを指差しながらサイに説明をしていると、それまで黙って二人の会話を聞い

ていたローゼにヒルデ、ヴィヴィアンとピオンの四人も会話に入ってきた。
「……!?　こ、これは皆さん！　相変わらずお美しい！」
ピオン達四人の声を聞いたビークポッドは、顔を真っ赤にして直立不動の体勢になると挨拶の代わりにピオンの容姿を賞賛した。そんな彼に四人を代表してピオンが笑顔を浮かべながら話しかける。
「はい、ありがとうございます♪　それであのエレナさんって人が人気者なのは分かりましたけど、マスターとビークポッドさんはエレナさんと私達、どちら可愛いと思います？」
先程の会話でサイがエレナに少しでも興味を覚えたのが気になったのだろう。今のピオンの質問は彼女だけでなく、他の三人のホムンクルスの女性も気になるものであった。
「ピオン達だな」「ピオンさん達です」
しかしそんなピオン達の内心の不安とは裏腹にサイとビークポッドは即答。即答した二人はお互いの顔を見て力強く頷いた。
「そ、そうですか」
「そうだって」
「そうです」
ピオン達四人がサイが自分達を選んでくれた事に内心で安堵していると、サイとビークポッドはもう一度エレナの方を見る。
確かにエレナは男子生徒達の注目の的になるだけあって非常に優れた容姿をしている。
短く切り揃えられた赤毛と金髪が混じったストロベリーブロンドと呼ばれる髪。まるで人形のように整った顔立ち。士官学校の生徒らしく筋肉がついているが、それを意識させない均等の取れた肢体。
男性の理想形となるように作られたピオン達ホムンクルスの女性には一歩劣るかもしれないが、それでも充分美少女であるエレナ。しかし彼女にはピオン達に決定的に負けている点があった。
「「貧乳には興味ない」」
サイとビークポッドは全く同時に同じ言葉を言い放つ。
そう、エレナはピオン達どころか他の女子生徒と比べても大変慎ま

しい胸囲の持ち主だった。もちろんそれでも彼女の肢体は一般の人間から見て美しく見えるのだが、サイとビークポッドから見れば興味の対象外である。

全く同時に同じ言葉を言い放ったサイとビークポッドは、お互いに手を差し出すと固い握手を交わした。

このビークポッドという男子生徒もまたサイと同じく巨乳好きな馬鹿であった。

エレナの噂

「……ぷっ。あっははは！」

異口同音で言い放つサイとビークポッドの姿にピオンが大声で笑い出す。見ればヴィヴィアンにヒルデ、ローゼも笑っていた。

「本当にマスターってば、嘘がつけない方なんですね。……でもあのエレナという方より私達の方が可愛いと言ってくれたのは嬉しく思います。……そうですね。マスターにビークポッドさん？　今からささやかなお礼をしたいと思いますから、ちょっと待っていてもらえます？」

ピオンはそう言うと、ヴィヴィアンとヒルデにローゼの三人に耳打ちする。するとピオン達四人はそれぞれ自らの制服の胸元をはだけだした。

ピオン達四人のホムンクルスの女性は、制服の下に下着の類を身につけておらず、少し胸元を開くだけでそこから艶やかな柔肌が見えてくる。ちなみに制服の下に下着の類を身につけないのは、四人のホムンクルスの女性のリーダーであるピオンの指示によるものであり、サイの趣味嗜好とは関係がない。……多分。きっと。

そして乳首が見える寸前まで胸元をはだけたピオン達四人は、サイとビークポッドの前で横一列に並んだ。

「それじゃあいっきますねー♪　それ♪　それ♪」

ぷるん♪　ぷるん♪

ピオンの言葉を合図にホムンクルスの女性四人がその場で何度も飛び跳ねた。それによってピオンの形がよくて瑞々しい巨乳が揺れる。

「よっ、はっ」

ぷるん♪　ぷるん♪

ヴィヴィアンの若々しくて張りのある巨乳が踊る。

「えい。えい」

ぷるん♪　ぷるん♪

ヒルデのこの中で最も大きくて柔らかな巨乳が暴れる。

「よいしょ♪　よいしょ♪」
　ぷるん♪　ぷるん♪
　ローゼの唯一褐色の肌をした巨乳が震える。
　合計八つの乳房が揺れ動く光景。それこそまさに男が夢見た光景の一つであった。
「……!?　あ、ありがとうございます！」
　男の夢を目の当たりにして勢いよく腰を直角に曲げて礼を言うサイとビークポッドの巨乳好きな馬鹿二人。そんな巨乳好きな馬鹿二人の目には感動の涙が浮かんでいた。
「ふふっ♪　どうでした？　楽しんでもらえましたか？」
「はい！　もちろんです！」
　ホムンクルスの女性四人がその場で飛び跳ねるのを止めてピオンが聞くと、サイとビークポッドは顔を赤くして全くの同時に答える。
「そう言ってくれると嬉しいです♪」
「マスター殿とビークポッド殿に喜んでもらえてよかったです」
「ええ、そうですね」
「たまにはこういうのも楽しくていいですね」
　サイとビークポッドの返事にピオン、ヴィヴィアン、ヒルデ、ローゼの四人が嬉しそうに笑う。
「いやぁ、大変いいものを見せてもらってありがとうございます。やはりエレナ・キャンダルよりもピオンさん達の方がいいですね。胸も大きいし。そもそもエレナ・キャンダルは何やらよくない噂も聞きますし、ピオンさん達と比べるまでもなかったですね。胸も小さいし」
　所々変な事を言いながらピオン達に礼を言うビークポッドこと巨乳好きな馬鹿二号。サイはビークポッドの言葉を聞いて首を傾げた。
「よくない噂？　それって何だ？」
「ん？　ああ、エレナ・キャンダルは男子生徒達に人気があるのをいい事に、多くの男子生徒を取っ替え引っ替えにして遊び、更にはその男子生徒から金品を貢がせているという噂だ。この噂は非常に信憑性が高い……というか、あれを見ればほぼ間違いなく真実だろうな」
　サイの質問に答えながらビークポッドは数人の男子生徒達に囲ま

れているエレナを見る。確かにあの姿を見れば、今ビークポッドが言った噂は本当の事なのだろう。
「しかもエレナ・キャンダルは婚約者がいる実家の身分の高い男子生徒を侍らせているらしい。実際、今彼女を囲んでいるのは皆、侯爵家や伯爵家の子息ばかりだ」
「ね、寝取りですって……！」
『……！』
ビークポッドの言葉を聞いてピオン達四人のホムンクルスの女性の顔に緊張が走る。恐らくは万が一の確率でエレナがサイに接近した場合を想像してしまったのだろう。
「ちなみにあの中の一人はワーキウ侯爵家の嫡男アルベロ・ワーキウだ。このアックア公国でも特に力のある貴族で、ブリジッタ様の婚約者でもある」
「何っ!?」
エレナの取り巻きの男子生徒の一人、いかにも貴公子といった雰囲気を持つ金髪の男子生徒を指差してビークポッドが言うと、サイはその言葉に反応してブリジッタの婚約者であるという金髪の男子生徒を凝視する。金髪の男子生徒の顔を凝視するサイの脳裏に、ブリジッタの顔と彼女の豊満な胸が浮かび上がった。
「あ、あいつがブリジッタの婚約者？　な、なんて羨ましい……！」
「いや、サイ？　お前が彼を羨む資格なんてないと思うぞ？　お前にはピオンさん達がいるだろう？　……その、非常に羨ましく妬ましい事に、いつもピオンさん達の胸を見ているのだろう？」
呆れた風に言うビークポッドに、サイは勝利者の顔を向けて言った。
「見ているどころか触って揉み比べています。今朝も揉み比べましたが四人共最高でした」
次の瞬間、サイはビークポッドの渾身のアッパーを喰らい空を飛んだ。

挨拶

夜の人気のない森の中に十数人の集団の姿があった。その集団は森の中で焚き火を灯しているのだが、それでも周囲はまだ暗く、集団の正確な人数や外見は分からなかった。

集団の中で一人の男が焚き火の明かりで手に持っている手紙を読んでいると、そこに別の男がやって来て話しかける。

「お頭。一体何を読んでいるんですかい？」

「『豚』からの報告書だ」

「『豚』……あいつからですかい」

お頭と呼ばれた男の「豚」という言葉に、彼に話しかけた男は一人の人物の顔を脳裏に思い浮かべた。

「それで報告書には何て？」

「士官学校にサイ・リューランっていう留学生が留学しているんだが……信じられない事にその留学生、ゴーレムトルーパーの操縦士らしい」

「はぁ!?　マジですかい！」

お頭が口にした報告書の内容に男は思わず大声を出す。周囲にいる男の仲間達が何事だと見てくるが、そんなのは気にならないくらいに衝撃的な内容であった。

「確かに信じられない事だが、あの『豚』が今まで間違った情報を寄越してきた事はないだろう？」

「それはそうですが……」

男が頷いたのを見てお頭は大きく息を吐いた。

「計画は一部変更だな。……だがまぁ、相手にゴーレムトルーパーがいるって分かっただけでもよしとしておくか」

「そうですね。……そういえば、何でお頭はあいつの事を『豚』って呼ぶんですかい？」

男が以前より気になっていた事を聞くと、お頭は鼻を鳴らしてから答えた。

「ふん。金や美味い飯に酒を見ると後先考えずに食いついて、いい女

を見つけると鼻息を荒くする……。そんな奴なんて『豚』で充分なんだよ」

X　X　X

「あいたた……。ビークポッドの奴、本気で殴りやがって……まだ痛いよ」

今日の授業と訓練が終わった放課後。サイ達はいつものようにブリジッタがいる図書館に向かっていた。

昼間の訓練でビークポッドに殴られた顎をさすりながらサイが愚痴をこぼすと、ピオンが笑いながら話しかけてくる。

「マスター、なんてお可哀想に……。よろしければ『ぱふぱふ』しましょうか？　私の胸でマスターのお顔を優し～く挟んだらその痛みもなくなるかもしれませんよ？」

「確かに痛みはなくなるかもしれないけどここではちょっとな……。だから部屋に帰ってから是非お願いします」

「はい♡」

胸元を広げるピオンの誘惑同然の提案に、周囲からサイと呼ばれている巨乳好きな馬鹿がそう答えていると、次はヒルデが口を開いた。

「それでも……マスターもビークポッドさんも随分と打ち解けてきましたね」

「そういえばそうですね」

「確かに。以前は最も険悪……というより、ビークポッド様が一方的にマスター様を敵視していましたからね」

ヒルデの言葉にヴィヴィアンとローゼが同意して、サイもまた同意見であった。

ビークポッドはほんの一ヶ月くらい前までは他の生徒達と同じようにサイに嫉妬の視線を送ってくるだけであった。しかし一度話して見るとお互い巨乳好きという共通点があった為、意気投合して今のような友人関係となれたのだった。

そんな事を話しながらサイ達が図書館に向かっていると、彼らの前に数人の男女が現れた。

それは剣術訓練の時にビークポッドが話していたエレナ・キャンダ

ルとその取り巻きの男子生徒達であった。
「エレナ・キャンダル……！」
　自分達の前に現れた男漁りが激しいという噂を持つ女生徒の顔を見て、ピオンがサイ以上に警戒心を露わにして右腕に抱きつく。それと同時にヴィヴィアンが彼の左腕に抱きつき、ヒルデとローゼは彼の後ろについた。
「……ふん。ホムンクルスとは言え、堂々と四人の女性を侍らせているとは噂通りだな、サイ・リューラン。私はアルベロ・ワーキウ。ワーキウ侯爵家の嫡男だ」
「俺の事を知っているんですか？」
　エレナの取り巻きの一人、アルベロがどこか軽蔑したような目でサイを見ながら名乗る。何故だか知らないが、彼にそのような目で見られると非常に腹が立つのを感じながらサイが聞くとアルベロは頷く。
「ああ、君は色々と有名だからね。それについ先程、ボインスキー子爵家の子息と出会ってね。彼からも君の事を聞いたよ」
　アルベロの口から出たのはサイと隣の席の男子生徒の名前だった。サイは自分の隣の男子生徒の顔を思い浮かべる。
「あいつが……何て言っていました」
「それは想像にお任せするよ。それで私達ぎ君に会いに来た要件なんだが……」
「サイさん。初めまして」
　アルベロの言葉を途中で遮り、エレナがサイの前に進み出て来た。
「お、おい！　エレナ！」
　アルベロや他の取り巻き達の声をかけるが、エレナはそれを聞いておらずサイに挨拶をする。
「私、エレナ・キャンダルと言います。サイさん、よろしければ私とお友達になってくれませんか？」

お断りします

『いいえ、お断りします』

エレナがサイに向けて言った「友達になってほしい」という言葉に答えたのは、サイではなくピオンとヴィヴィアン、ヒルデにローゼの四人のホムンクルス達であった。しかも四人同時の即答である。

「え……？　あの、私はサイさんに言ったのですけど」

（俺もそう思う。何でピオン達が答えているんだ？）

いきなりピオン達四人に断られたエレナは、戸惑いながらも笑みを浮かべて言う。サイも内心では彼女と同じ気持ちであったが、それに構う事なくピオンが四人のホムンクルスを代表して答える。

「私達はマスターの補助をする為のホムンクルス。つまり私達の声はマスターの意思だと思ってください。そして私達の目から見て貴女はマスターのご友人に相応しくありません」

「……！　そ、それはどうしてですか？」

ピオンの言葉にエレナは先程と同じ困惑した笑みのまま聞くが、サイは一瞬彼女の目と口元が不愉快そうに引きつったのを見逃さなかった。

「エレナさんがマスターのご友人に相応しくない理由は二つあります。一つ目は貴女がいつもそうやって大勢の男性を引き連れている事。マスターは女性は大好きですが、男性は嫌いです。一人や二人ならともかく、そんなに大勢の男性に耐えられるはずがありません」

「おい」

自信を持って断言するピオンにサイがツッコミを入れる。

確かにサイは女性が好きだが男が嫌いという訳ではない。それにそんな言い方だと、まるで病的な女狂いみたいではないか。

しかしピオンはサイの声が聞こえていないのか言葉を続ける。

「そして二つ目はマスターは大の巨乳好きです。言い辛いですが貴女からは何の魅力も感じません！」

「……」

言い辛い、と言いながら自分の豊かな胸を張って断言するピオン。

しかし自分が巨乳好きである事を自覚しているサイは、これには何も言う事ができなかった。……けっして制服越しに揺れる彼女の胸に見惚れていた訳ではない。
「……！」
　このピオン（Ｆカップ）の胸を張って言い放たれた言葉にエレナ（ＡＡカップ）は表情をなくして絶句する。しかしエレナが何かを言うより先に、彼女の隣にいたアルベロが怒声を上げる。
「このホムンクルス！　そんな豊かな胸を見せつけてエレナへの見せつけのつもりか！」
　というアルベロの言葉を皮切りに、他の取り巻きもまた声を上げる。
「そうだ！　いくら本当の事でも言ってもいい事と悪い事があるんだぞ！」
「人間は真実を突きつけられることが何よりも勝る苦痛になる事があるんだぞ！　それなのにお前には情けが無いのか、ホムンクルスの少女よ！」
「確かにお前のその山のような胸は素晴らしいが、エレナの泉のような胸にも魅力があるんだぞ！」
「その通り！　私達はエレナの泉のような胸の魅力を知っている為、そのような誘惑には動じないぞ！」
　口々に言うアルベロを初めとするエレナの取り巻き達。彼らは彼らなりに彼女を弁護しているつもりなのだろうが、ピオンの胸が衝撃的だったのか全員よく考えずに勢いだけで話しており、全くの逆効果になっていた。
「あ、ありがとうございます、皆さん……！　わ、私を、助けて、くれて……！」
　その証拠に、一応自分を弁護してくれたアルベロ達取り巻きに笑顔を浮かべて礼を言おうとするエレナだったが、目元や口元が引きつっていた。声も内心で押し殺し……切れていない怒りで若干震えており、額を見ると青筋が何本も浮かんでいるのが見えた。
　そんなエレナの姿はピオンとアルベロ達取り巻きの発言に無理を

して怒りを我慢しているのが丸分かりだった。分かっていないのはアルベロ達取り巻きぐらいだろう。
「ぷぷー♪」
「……！」
怒りを我慢しているエレナに向けて、ピオンが口元を隠してわざとらしく吹き出してみせる。それによりエレナの額の青筋が一本追加。
「あ、あの、私……ちょっと気分が悪くなったで今日はこれで失礼します……。サイさん、また今度お会いしましょうね」
「あ、エレナ、待ってくれ」
エレナは所々引きつった笑みでそう言うと足早にこの場から立ち去っていき、アルベロ達も彼女の後を追って立ち去っていく。起こされたサイ達はエレナ達の背中を見送った後、ヴィヴィアンが首を傾げる。
「それで彼女達は一体何をしたかったんでしょう？」
「さあな。それでピオン？　何で彼女を怒らせるような事を言ったんだ？」
サイはヴィヴィアンの疑問に首を振った後、ピオンの方を見る。先程からのホムンクルスの少女の態度は、わざとエレナを怒らせようとしていたのは明らかであった。
「それはもちろんあの女をマスターに近寄らせない為です。あのエレナって女、顔は笑っていましたけどあからさまにマスターを値踏みするような目で見てきて……。あんな女の側にいるとろくな事が起こりませんよ」
「……そうだな」
質問に答えるピオンの言葉にサイは同意する。彼は自分を見てくるエレナの目に見覚えがあった。
馬や豚などの家畜を見て、それがどれくらいの価値があるかを見定める農家や商人のような目。あの時のエレナはそんな目でサイを見てきた。
「どうやらビークポッドの話は本当のようだな。……まあ、あれだけやればエレナもしばらくは現れないだろう。ありがとう、ピオン」

「いえいえ、どういたしまして♪」
噂通り男を侍らせて食い物にするようなエレナと関わりたくなかったサイは、彼女が自分から離れる理由を作ってくれたピオンに礼を言うと、最初の予定通り図書館へと向かった。

エレナ・キャンダルという女

「あーーーーー！　もう、ムカつく！」

アルベロ達と別れて学生寮の自室に戻るなりエレナは、アルベロを初めとする自分の取り巻き達には決して見せない素の自分をさらけ出して怒声を上げる。彼女が怒っている原因は当然ピオンとの会話であった。

「何なのよ、あのホムンクルスは！　何がお断りしますよ！　何がご友人に相応しくないよ！　誰に魅力がないですって!?」

ピオンに言われた言葉を思い出し、はらわたが煮えくりかえる程の怒りを覚えたエレナは、その怒りを言葉にして吐き出す。

「大体あのサイって奴もそうよ！　自分のホムンクルスなんだから止めなさいよ！　何、私みたいな美少女に暴言を言っているのをボケっと見ているのよ！　そもそも、せっかく私が貴方みたいな地味で影が薄くて見るからに童貞なダメ男に友達になってあげましょうかって言ってあげているのに、何で無反応なのよ!?」

ピオンの次は彼女の主人であるサイに向かって怒りの言葉を吐くエレナ。しかし彼女の怒りはまだまだ収まらず、怒りの言葉にまだ続く。

「というかアルベロ達はどっちの味方よ！　全員あのホムンクルスの胸に目を奪われて！　私の弁護をしてるつもりみたいだけど、弁護になっていないじゃない！　正直、貴方達の言葉が一番腹が立ったわ！」

今度はアルベロを初めとする自分の取り巻き達に向けてエレナは怒りの言葉を吐く。彼女の怒りは収まるどころか、言葉にして確認する事でむしろ更に強くなり、怒りの言葉を吐く速さも上がっていく。

「あのビークポッドって奴も『貧乳には興味がない』とか言うし！　私は貧乳じゃなくてスレンダー体型なのよ！　この完成された体が目に映らないのかあのハゲ！　初めて私と会う奴はどいつもこいつも皆、私の胸を見て残念そうな顔をするし！　乳か！　乳なの!?　胸が小さい女には人権がないとでも言うの！　ふざけんな！　胸だけで

女の価値なんて決めるな！　乳なんて脂肪なの！　贅肉の一種なの！　お腹の贅肉は軽蔑の目で見るくせに、何で胸の贅肉は羨望の目で見るのよ、世の男どもは！　巨乳をありがたがる男なんて全て股間の大事なものが腐り落ちてしまえばいいのよ！　巨乳を自慢する女なんて胸の脂肪が爆発すればいいのよ！　というか死ね！　死んでしまえ！　巨乳をありがたがる男や巨乳を自慢する女は全て死んでしまえ！　いいや、むしろ『巨乳』という概念を作ったこんな世界なんて滅んでしまえ！」

どうやらエレナは胸に関してかなり思う事があるらしく、巨乳に関係する世間の男女、果てには世界そのものに向かって怒りの言葉を吐く。そうして時計の長針が一周するくらいの時が経った所で、ようやく怒りも収まってきたらしく、彼女は荒い息を吐きながら怒りの言葉を止めた。

「はぁ……！　はぁ……！　ま、まあいいわ……。それにしても本当にあのサイって奴が『ゴーレムトルーパーの操縦士』なのかしら？」

息を整えて気持ちを落ち着かせたエレナは、サイの顔を思い出しながら呟く。彼女が今口にしたのは、このアックア公国と隣国のフランメ王国でも一部の者しか知らない筈の軍事機密である。

エレナがこの情報を耳にしたのは本当に偶然、というか予期せぬ事であった。

この学園で色んな意味で有名人のサイ・リューラン。アルベロ達と同じように自分の「駒」にしておけば何処かで役に立つかと考えたエレナは、サイ達に話をする前にまず彼の隣の席であるボインスキー子爵家の子息にサイの話を聞いてみることとした。

話を聞かれたボインスキーはサイに対して思うところがあったのか、大の女好きだの、いつもピオン達みたいな美女を侍らせて羨ましからんだの熱く語り、それを聞いていたアルベロが次のような言葉を呟いたのだ。

「ふん。栄えあるゴーレムトルーパーの操縦士がなんと浅ましいことだ」

アルベロが呟いた言葉にエレナだけでなく、彼女の取り巻き達やボ

インスキーも驚きで声をなくした。
アルベロの実家であるワーキウ家は軍属の名門であり、彼の祖父は現役の上級将校で、サイ達の秘密を知る数少ない人物であった。アルベロは祖父が家族と話す数少ない会話からこの秘密に辿り着いたのだが、それをこのような場で簡単に口するなど迂闊にも程があるとエレナは思う。
ボインスキーとの会話を終えた後、エレナはアルベロが口した情報の真偽を確かめる意味も兼ねてサイに話しかけたのだが、結果は彼に従うホムンクルスの少女の挑発で頭に血が上り、ぼろを出す前にその場を立ち去る事になってしまった。
「何だか思い出したらまた腹が立ってきた……。でも何でサイとビークポッドには私の『魅了』の異能が効かなかったのかしら？」
『魅了』の異能。
自分に対する好感度を増幅することで相手を魅了する異能。それがエレナの持つ異能であった。
この異能の力でエレナは富豪の養女になってこの士官学校に入学できたし、アルベロ達のようなアックア公国で有数の貴族の子息達の寵愛を婚約者を差し置いて独占する事が出来た。しかしサイとビークポッドは、話をしている間ずっと「魅了」の異能を使っていたのに効果は現れなかった。
「私に少しでも好意があれば異能の効果が現れる筈なのに、それが現れないって事は私に全く興味がないってこと？　……もしかして」
サイとビークポッドに自分の異能が効かなかった理由を考えていたエレナは、ふとある事に気付いて自分の胸に視線を向けて額に青筋を浮かべる。とりあえずエレナ・キャンダル、正解とだけ言っておこう。
「……はぁ、ヤメヤメ。あんな近いうちに股間が腐る奴らの事なんて考えるのは止めよう」
そう言ってサイとビークポッドの顔を頭から追い出したエレナは、自分の机にあった物を手に取って見る。

「ふふっ♪」
エレナが笑みを浮かべながら見るのは、大粒の宝石のネックレス。宝石だけでなく周囲の銀細工も非常に精巧で、見ただけで高価な品物だと分かる。
そのネックレスは元々、アルベロが婚約者のブリジッタの為に用意していたものだったのだが、異能の力で魅了された彼は「あんな考古学にしか興味を持たない根暗な女より君の方が相応しい」と言ってエレナに贈ったのだった。
見れば彼女の机の上にはアルベロ以外の取り巻き達から贈られた宝石や装飾品の数々が置かれていた。その中に本来は彼らの婚約者に贈られる筈の物が混じっているかと思うと、エレナは何とも言えない優越感を感じて笑みを深くする。
「ふふん♪　やっぱり最高よね、私の『魅了』の異能は。この異能のお陰で私は贅沢三昧出来るし、男も選り取り見取り♪　……あっと、いけない。これからデートの約束があるんだった」
部屋に帰ってきたばかりの時とは真逆の上機嫌になったエレナは、デートの約束をした男に会いに行く為街へ出る準備をする。士官学校の生徒は特別な理由が無い限り、学校の敷地外へ出る事は禁じられているのだが、彼女には関係なかった。
門の警護をしている守衛や当直の教官は既に魅了済みであり、士官学校だけでなく大学の生徒や教師のほとんどはエレナに魅了されていたのだった。

二人の国主（1）

「サイ・リューラン君。ブリジッタ・アックア嬢。少しよろしいだろうか？」

エレナとアルベロを初めとする彼女の取り巻き達との会話の後、サイ達が図書館でブリジッタと話をしていると、士官学校の教官が彼らに声をかけてきた。その教官は三ヶ月前にサイ達を校長室に呼び出した教官であった。

教官は三ヶ月前とは別人のように、若干の怯えが混じった声でサイ達に話しかける。

「その……話の邪魔をしてすまないね。君達を呼び出しがきているから……ついてきてくれないか？」

「あっ、はい」

「分かりました」

サイとブリジッタはそう答えると教官の後について行き、その後をピオン達四人のホムンクルスが続く。そして教官によってサイ達六人が連れてこられたのは、三ヶ月前と同じ士官学校の校長室……ではなく貴族の来客用の貴賓室であった。

「それじゃあ私はここで失礼するよ。……リューラン君、アックア嬢。そしてピオン君達四人も、くれぐれも中の人達に失礼のないように」

貴賓室の前に着くと教官はそう念押しをしてからサイ達から離れて行く。その時の教官は、歩調こそ急いでいなかったが、まるで逃げているように見えた。

教官が去った後、サイが代表して貴賓室の扉をノックすると、貴賓室から男の声が返事をしてきた。

「開いている。入りたまえ」

「……？　失礼しま……す……!?」

「まぁ……！」

「何故ここに……？」

聞き覚えのある声だと思いながらサイが貴賓室の扉を開くと、サイとブリジッタにピオンの三人が貴賓室にいる人物を見て絶句する。

貴賓室の中でサイ達を待っていたのは二人の男だった。
一人は銀色に見える金髪に黒く日焼けした肌をした二十代の男で、もう一人は黒髪を逆立てたどこか野生的な印象のする四十代の男。
「やあ、久しぶりだね。サイ君、ピオン君、ブリジッタ嬢。そしてそちらにいる三人のお嬢さん達が報告にあった新たに加わったホムンクルスだね」
「ほう、三人とも美人じゃねぇか。やるなぁ、サイ。ブリジッタも久しぶりだな」
二十代の男と四十代の男はサイ達に挨拶をした後、ヴィヴィアンにヒルデとローゼを見てそう言い、サイはそんな二人に信じられないって表情で尋ねる。
「あ、あの……何でお二人がここにいるのですか？　フランベルク陛下。バルベルト陛下」
サイが二人の男の名前を口にする。しかも名前の後ろに「陛下」の敬称を付けて。
銀色に見える金髪に黒く日焼けした肌をした二十代の男は、サイの祖国であるフランメ王国の国王、フランベルク三世。
黒髪を逆立てたどこか野生的な印象のする四十代の男は、このアックア公国の大公でありブリジッタの父親であるバルベルト・アックア。
教官に貴賓室に呼び出されたかと思ったら、そこにフランメ王国とアックア公国の二国のトップがいれば驚くなと言う方が無理だろう。
「実はこの辺りで気になる噂を耳にしてね。丁度アックア公国とある条約について話し合いをする予定もあったので、こうしてやって来た訳さ」
「気になる噂、ですか？」
サイの疑問にフランベルク三世が答えると、その言葉に気になる点があったサイは、首を傾げて再び自国の王に尋ねる。
「ああ。少し前からこの国にとある盗賊団が忍び込んだという噂だ。……サイ君、君も聞いた事があるだろう？　『黒竜盗賊団』だよ」
「……！　はい」

フランベルク三世が口にした盗賊団の名前にサイは表情を硬くして頷いた。
「マスター。黒竜盗賊団というのは何ですか？」
「十年前から世界各地で暴れ回っている盗賊団だよ」
後ろから聞いてくるピオンにサイは黒竜盗賊団について説明をする。
「黒竜盗賊団はとても慎重な盗賊団で暴れるだけ暴れたらすぐに姿を消して足取りを掴ませない。しかもかなり大きな勢力で、その戦力は小国をも壊滅させる程らしい」
サイがピオンと他の三人のホムンクルスに向けた説明にフランベルク三世が頷く。
「そういう事だ。そして私達フランメ王国は、他のどの国よりもあの黒竜盗賊団と因縁がある。黒竜盗賊団が出てくるのなら私が出るしかないだろう」
「……そう、ですね。仰る通りだと思います」
フランベルク三世の言葉にサイだけでなく、黒竜盗賊団の事を知るブリジッタとバルベルトも同意して頷く。
黒竜盗賊団の戦力は他の盗賊団とは次元が違い並の軍隊では相手にならず、黒竜盗賊団と戦うにはフランメ王国の国王であると同時にゴーレムトルーパーの操縦士でもあるフランベルク三世が出る必要もある事を理解していたからだ。

二人の国主（2）

「あの……フランベルク陛下がアックア公国へやって来られた理由は分かりましたが、それで何故お父様と一緒にこの学園に？」
「それはサイ達の様子を見に来たに決まっているだろう。なぁ、フランメの？」
「ああ」
　ブリジッタの疑問にバルベルトが答えると、彼とフランベルク三世はサイの方に視線を向ける。
「何しろ数百年ぶりに現れた新たなゴーレムトルーパーとその操縦士だ。アックア公国とフランメ王国のどちらに仕官するかで、軍事的にも諸外国との関係にも大きな影響が出る。だからこうして俺とのフランメのが自らやって来たって訳さ。俺はそれに加えてお前の様子を見に来たってのもあるがな」
「そういう事でしたか……」
　バルベルトは娘のブリジッタが納得すると次はサイに話しかける。
「それでサイ？　アックア公国は気に入ったか？　アックア公国に仕官するなら軍属少佐待遇から正式な少佐にして、伯爵の爵位も授けるぞ。もちろんお前の家族が暮らせる場所も用意してやる」
「おい待て。サイ君は我がフランメ王国の人間だぞ」
　通常であれば考えられない好条件を持ち出してサイを勧誘してくるバルベルトにフランベルク三世が待ったをかける。しかしバルベルトはそんな言葉を気にしていないように鼻を鳴らした。
「はん。よく言うぜ。貧乏男爵家出身の上等兵として使おうとしていたくせによ。ゴーレムトルーパーの操縦士で、ピオン達みたいな美人で有能なホムンクルス達を引き連れて、おまけに『倉庫』の異能なんて超便利な異能を使えるサイを薄給でこき使おうだなんて、サイが可哀想じゃねぇか？」
「それは以前の話だ！　フランメ王国でもサイ君が卒業次第、彼に少佐以上の階級を与え、実家の爵位も伯爵に陞爵する準備が出来ている！」

バルベルトの言葉にフランベルク三世が力強く反論する。
確かにサイは最初、輜重兵科（兵站を担当する後方支援の兵科）の輸送部隊に上等兵として配属される予定であったが、それは彼が軍学校を卒業したばかりの頃のドランノーガやピオン達を手に入れる前の話である。今やサイは一国の運命を左右するくらいに重要な存在であり、彼を自国に引き止めておく為に高い地位を与えるのは当然の話と言えた。
「まぁ、それもそうだわな……。ではサイ？　ここにいるブリジッタを嫁にするつもりはないか？」
「えっ!?」
フランベルク三世の言葉に当然といった風に頷いたバルベルトはそんな事を言い、アックア公国の大公による突然の爆弾発言にサイとブリジッタの二人が同時に驚いた。
「お、お父様……？　私にはアルベロ様という将来を誓った方が……」
「そんな事は知っているよ。お前とワーキウ家の坊主の婚約を決めたのは俺だぞ？　だがそのワーキウ家の坊主は今、どこぞの平民の娘にうつつを抜かしていて、お前も相変わらず前文明の研究に集中してそれを放置しているそうじゃねぇか？」
「それは……」
思わず反論しようとするブリジッタであったが、バルベルトは彼女の婚約者であるアルベロがエレナの取り巻きと化している点を指摘し、自分の周りの状況を父親に把握されていた事を知ったブリジッタは何も言えなくなった。
「確かに婚約を一方的に破棄するとワーキウ家がうるさいかもしれないが、それだけの価値はあるんだよ。お前がサイとくっつけば、サイがアックア公国に仕官しなくてもいざという時に救援などを頼み易くなるし、フランメ王国との友好的な関係をより強くする材料にもなる。それは分かるな？」
「確かにな」
「……はい」
バルベルトの言葉にフランベルク三世とブリジッタは頷き、次にバ

ルベルトはサイに話しかける。
「それでサイ？　ウチのブリジッタはどうだ？　俺が言うのも何だが、ブリジッタはいい女だぞ？　家柄は申し分ないし、顔も性格もいい。特にこの胸なんか最高だろ？」
「はい！　最高です！」
　サイにブリジッタの売り込みをしていたバルベルトがいやらしい顔となって娘の胸について聞くと、巨乳好きな馬鹿は元気よく肯定する。それを聞いてピオンを始めとする四人のホムンクルスは苦笑し、フランベルク三世は口元に手を当てて何かを考える表情となる。
「お父様！」
「ははははっ！　別にいいじゃねぇか。サイも気に入ってくれていみたいだしよ」
　顔を真っ赤にしたブリジッタが両手で胸を隠して父親に抗議すると、バルベルトは豪快に笑った後、真剣な表情となって自分の娘の顔を見る。
「ブリジッタ。俺は何も今すぐお前とワーキウ家の坊主との婚約を破棄させようとは思っていない。だが、ワーキウ家の坊主がこれからもあんな状態であるなら、俺は婚約を破棄させてサイの所に嫁がせるぞ。それが国の為でもあり、お前の為でもある……分かるな？」
「はい。……分かりました」
　真剣な表情で話すバルベルトとブリジッタの親子の会話を聞きながらフランベルク三世が呟く。
「……ふむ。予想していたがやはりそうきたか。ならばこちらは……確かクリスナーガがすでに結婚できる年齢になっていたかな？　本国に戻り次第、彼女に婚約者等がいないか確かめてみるか」
　クリスナーガとはフランベルク三世の弟の娘、つまり姪であり、サイは知らない事だが自分の幼馴染であるアイリーンに援助を行なった人物であった。
　ゴーレムトルーパーの操縦士であるサイと縁を結ぶ為に、彼の元に自分の娘や親族を嫁がせる事を考える王族二人。その会話を聞いていて当の本人であるサイは、今頃になって自分の縁談が組まれつつあ

る事を理解する。……話が大きすぎて頭の理解が追いついていなかっただけかもしれないが。
「え？　これって俺の意思とかは……？」
　思わず小声で呟くサイ。その呟きが聞こえたのは彼の後ろにいる四人のホムンクルス達だけであった。
「残念ですけど、そんなものある訳ないと思いますよ？」
「確かに断れる感じじゃなさそうですね」
「そもそも王族や貴族の婚姻はそういったものだと思います」
「諦めが肝心ですね。それにそんなに悪い話ではないかと」
「……」
　ピオン、ヴィヴィアン、ヒルデ、ローゼの順番で小声でそう言われたサイは何も言えなくなり、その場で顔を伏せる事しかできなかった。

二人の少女と国王の会話（1）

「それにしても伯父様ってば、いきなり呼び出してどうしたのかしら？」

フランメ王国王都リードブルムの中央に位置する王城の通路を、フランメ王国国王フランベルク三世の弟の娘であるクリスナーガとその学友であるアイリーンは歩いていた。

士官学校の訓練を終えた後、突然フランベルク三世の使いから王宮に招集されたクリスナーガはアイリーンを連れて王宮にやって来ていた。クリスナーガに連れられてきたアイリーンは、恐縮した態度で彼女の後ろをついて行く。

「あの、クリスナーガ様？　呼ばれていない私もついてきてよかったのですか？」

「ああ、大丈夫、大丈夫。伯父様って結構気さくな人だし、私が連れてきたって言ったら怒ったりしないわよ」

恐る恐るといった感じで聞いてくるアイリーンにクリスナーガは何でもないように答える。

「しかし……」

「それにアイリーンの目標を達成する為には、ここで伯父様に会って顔を覚えてもらうのは悪い事じゃないんじゃない？」

「……」

尚も言い募ろうとするアイリーンであったが、クリスナーガの一言に押し黙る。

アイリーンの目標。それは祖父の代で没落してしまった彼女の実家のクライド家を再興させる事。

子供の頃より祖父に言って聞かされてきたこの目標を達成するは決して容易な事ではなく、クリスナーガの言う通り、ここでフランベルク三世と顔を合わせる事は目標を達成するのに大きな助けとなる筈だ。

「けど今日の訓練はかなり辛かったな……。明日筋肉痛にならないよね？　アイリーンは大丈夫？」

アイリーンが納得したようなのでクリスナーガは話題を今日の士官学校の訓練にと変える。クリスナーガ達がフランメ王国の士官学校に入学してから早五ヶ月、士官学校での授業や訓練は厳しさを増す一方であった。
「私は何とか……。それにたった一年で指揮官としての教育をするのですから訓練が厳しくなるのは当然かと」
「それもそうなんだけどさ……。あっと、もう着いた」
話をしているうちにクリスナーガとアイリーンの二人は、目的地であるフランベルク三世がいる部屋の前に辿り着いた。部屋の前には二人の衛兵が立っていて、クリスナーガ達の姿を確認した衛兵の一人が部屋の中に報告した後、扉を開いて二人を出迎えた。クリスナーガは衛兵に向かって手を振り、アイリーンは頭を小さく下げて見せて部屋の中へ入って行く。
「伯父様。クリスナーガ、来ましたよ」
衛兵が扉を閉めるのを確認してからクリスナーガは部屋の中にいる人物、このフランメ王国の国王フランベルク三世に声をかけた。部屋の中のフランベルク三世は執務机で何かの資料を作っていたのだが、クリスナーガ達が入ってくると資料を作る手を止めて、彼女達の方を見た。
「やあ、クリスナーガ。いきなり呼び出してすまなかったね。……それでそちらのお嬢さんは？」
「彼女はアイリーン。私と同じ士官学校に通っているお友達です」
「あ、アイリーン・クライドと申します。こうして陛下に出会えて光栄です」
クリスナーガが紹介すると、アイリーンは緊張した表情で頭を下げてフランベルク三世に自己紹介をする。その彼女の家名を聞いてフランベルク三世は何かを思い当たった表情で口を開く。
「ああ、君が『あの』……。それにクライド？　もしや君はクライド侯爵……いや、クライド子爵の？」
「はい。孫娘になります」
フランベルク三世の言葉にアイリーンが頷く。

アイリーンの実家であるクライド家は元々はフランメ王国建国の頃からあった名門で爵位は侯爵であった。
しかしアイリーンの祖父が当主であった時に当主の父親、つまりアイリーンの曽祖父がとある戦で命を落とし、その責任によってクライド家は没落。爵位は侯爵から子爵へと下り、財産は全て没収とされた。
地位に名誉に財産、その全てを失ったアイリーンの一家は、曽祖父の知り合いであるサイの曽祖父を頼り、サイの曽祖父が開拓したイーノ村に移り住んだのであった。
「そうか……。君の祖父に降格と財産の没収を言い渡したのは私だ。十年前に君の曽祖父が戦で負けた責任はあまりにも大きく、そうするしかなかったのだ」
「はい。その事は重々承知です。十年前の陛下の決定に今更異論を言うつもりはありません……」
フランベルク三世の言葉にアイリーンは顔を俯けながら答える。
「そうか……。そう言ってもらえると私も助かる。……その、何だ？
これから先『色々』と大変な事があると思うが頑張りたまえ」
「はい！　ありがとうございます！」
フランメ王国国王からの激励の言葉にアイリーンは頭を下げて礼を言い、フランベルク三世はそんな彼女に笑みを向ける。
しかしその笑みは、前途ある若者を祝福するものではなかった。
アイリーンとクリスナーガは気づかなかったが、今フランベルク三世が浮かべているのは、屠畜場へと向かう家畜を見送るような、哀れみの笑みであった。
（……うん。本当に頑張りなさい）
フランベルク三世はまるで死者の冥福を祈るような気持ちで心の中で呟くと、執務机の上にある先程まで自分が作っていた資料に目を向ける。
フランベルク三世が作っていた資料は、ある数十人の人物達の情報をまとめたものであった。
そしてその人物達とは、まだ公表されていない最近現れた新たな

ゴーレムトルーパーの操縦士がフランメ王国の軍学校に通っていた頃の同級生達ばかりであり、その中にはここにいるアイリーンの名前もあった。

そう、フランベルク三世が作っていたのは、サイが軍学校にいた頃に彼を見下してきた学生達のリストなのである。

今から二ヶ月くらい前にアックア公国でフランベルク三世とサイ達と話をした時、ピオンはサイ達に内緒でフランベルク三世にこの資料を要求してきた。サイがフランメ王国の軍学校で同級生に受けた仕打ちをピオンから聞き、その時の怒りの光を宿した彼女の目を見たフランベルク三世は、ホムンクルスの少女がこの資料を何に使うのかを理解した。

ピオンは、サイを見下してきたアイリーンを含む軍学校の彼の同級生達への復讐を諦めていなかったのだ。

フランベルク三世は資料を要求してきた時のピオンの目を思い出し、彼女が行う復讐が生半可なもので終わらない事を確信した。しかしこれもゴーレムトルーパーという強大で貴重な戦力を手に入れる為と、彼女の復讐を黙認するどころか僅かばかり協力するという国王として非情な決断を下したのであった。

だが、国王であると同時に一人の父親としてフランベルク三世は、せめてアイリーンを初めとするピオンの復讐対象となった若者達の幸運を祈らせてもらおうと思った。

二人の少女と国王の会話（2）

「あの、伯父様？　それで私は一体どの様な用件で呼ばれたのですか？」
「あ、ああ！　そうだな。その事を忘れていたよ。すまなかったな、クリスナーガ」
　クリスナーガが話しかけるとフランベルク三世はすぐさま彼女の方を見る。その姿は大きな問題から目をそらす子供のように見えたが、クリスナーガはそれを指摘せず次の言葉を待つ。
「それでここに呼び出した用件なのだが……その前にクリスナーガ？　君には婚約者はいなかったな？」
「ええ、いませんよ。丁度いい相手がいませんでしたし」
「そうか……。では恋人とかはいるのか？」
「そちらもいませんね。中々興味を覚える面白い男がいなくて……て、もしかして」
「……！」
　婚約者や恋人がいないか聞かれたクリスナーガは、そこで自分がフランベルク三世に呼び出された用件を理解し、横にいるアイリーンも同様で口元を隠して驚いている。
「察しがいいな。クリスナーガ、君の縁談が決まった。君にはある人物と婚約を結んでもらう」
　フランベルク三世が言い出した婚約の話はいきなりであったが、クリスナーガはそれほど驚いてはいなかった。彼女も王家の一員として、いつかは顔も知らない家同士が決めた相手と結婚する事を理解していたし、覚悟もしていた。
「えっと……。一応聞きますけど、拒否権なんかは……」
　だが、それでもこの様な事を言えるのがクリスナーガという女性であった。
「ない。これはフランメ王国国王としての命令だ。クリスナーガ、君には何としても『彼』の婚約者となり、最終的には彼の妻の一人になってもらう」

即答するフランベルク三世の姿を見てクリスナーガは、ここまで強引な伯父は珍しいと思いながらある事に気づく。
「あの……伯父様？　今、妻の一人って聞こえたんですけど、その私の婚約者になる人って結婚しているのですか？」
クリスナーガの質問にフランベルク三世は少し言いづらそうな表情をしながら答える。
「そうだな……。これはいずれ分かる事だし、ここで話しておこう。彼は結婚していないがクリスナーガ、君と同時期にもう一人の女性と婚約を結ぶ予定となっている」
「はいぃ!?」
「それってどういう事ですか!?」
フランベルク三世の発言にクリスナーガとアイリーンが同時に驚きの声を上げるのだが、それはある意味当然の反応であった。
フランメ王国やその周辺の国々は一夫多妻制で、一人の男が複数の妻や婚約者を持つ事はそれほど珍しい事ではない。しかし仮にも王族であるクリスナーガを、他の女性と一緒に一人の男の婚約者にするというのは、国の威信の問題から考えられない事である。
「伯父様？　私の婚約者になる人ってどんな人？　どこかの国の大貴族？　それに私と一緒に婚約者になるもう一人の女性って？」
驚いた表情のまま疑問を投げかけるクリスナーガだが、フランベルク三世は首を横に振った。
「悪いがそれには答えられない。婚約を公表するのは半年以上先、君が士官学校を卒業した後の予定だ。それまでは彼の事を教える事はできない」
「自分の婚約者の事なのに、ですか？」
クリスナーガが言っているのは至極当然の疑問であるがフランベルク三世はそれに頷く。
「そうだ。彼は色々と特殊でね。今更だと分かっていても、これ以上彼の情報が漏れて無用な混乱が起こるを避ける為に情報を制限させてもらう」
「……？」

フランベルク三世の言葉にクリスナーガは眉をしかめる。今の言い方だと、すでにその「彼」の情報が何処かに漏れて混乱が起こったように聞こえたからだ。……そして彼女の予想は当たっていた。
自分の婚約者となる「彼」がどんな人物かクリスナーガが考えていると、フランベルク三世がそんな姪の顔を見ながら口を開く。
「一つ言える事はクリスナーガ、君と彼の婚約は隣国のアックア公国だけでなく周辺の国々との関係に大きな影響を与えるという事だ」
「っ!? それほどの人物なのですか？」
「そうだ」
「……そうですか」
フランベルク三世に返事をするクリスナーガの口元にはいつの間にか笑みが浮かんでいた。
（何だか面白そうね）
クリスナーガは心の中で呟く。
フランメ王国の国王である伯父にここまで言わせるとは一体どんな人物なのか期待で胸が膨らむ。後、ついでに自分と一緒に婚約者になる女性にも少し興味がある。
王族である以上、国王が決めた縁談に従うしかないのだが、それでも人生の伴侶となるからには自分を楽しませて興味深い人間であって欲しいとクリスナーガは願う。そして伯父の話ぶりだと自分のささやかな願いは叶いそうな気がして彼女は嬉しく思った。
その後、クリスナーガは婚約の話を了承するとフランベルク三世の部屋を後にした。クリスナーガ達が王宮から士官学校の学生寮に戻る途中でアイリーンがクリスナーガに話しかける。
「クリスナーガ様。ご婚約おめでとうございます」
「ありがとう、アイリーン。まあ婚約と言っても、まだ正式になったわけじゃないし、相手の顔も名前も分からないんだけどね。……ねぇ、アイリーンはどんな人だと思う？」
「いえ、私には分かりかねます。ですがクリスナーガ様の婚約者となられる方なら、それは私にとっても大切な方。誠心誠意尽くさせてもらいます」

「ふふっ♪　ありがとうね。期待しているわよ、アイリーン」
「はい」
まるで忠誠を誓う騎士のような事を言うアイリーンにクリスナーガは笑みを浮かべて礼を言い、二人は士官学校の学生寮に帰って行った。

クリスナーガとアイリーンは知らない。
クリスナーガの婚約者となる人物が今、アックア公国の士官学校に留学しているゴーレムトルーパーの操縦士である事を。
そしてアイリーンがその操縦士を長い間見下してきた挙句、人としての礼儀を欠いた仕打ちを幾度となくしてきた事を。

黒竜盗賊団

「お前達。いよいよ作戦を実行する」
ある日の夜。一人の男が数十人はいる自分の部下達に向かってそう宣言した。
部下達の前で宣言をしたのは、三十代くらいの無精髭を生やした体格のいい男で、元はどこかの国の軍服だと思われるボロボロの上着を羽織っていて、腰のベルトには剣や銃が差しこまれていた。そして男の部下達も全員、似たような格好をしていた。
「へへ……。やっとですかい」
「待ちくたびれましたぜ」
三十代の男の宣言を聞いて男の部下達が笑みを浮かべる。それは獲物を見つけた獣のような、自分の力を早く振るいたいといった狂気を秘めた笑みであった。
「それにしても準備に半年もかけるなんて、毎度の事ながらお頭も用心深いよな……。こんなのさっさと襲っちまえばいいのに」
「馬鹿が！　お頭が用心深いお陰で俺達『黒竜盗賊団』は今までやってこれたんだろうが！」
今日まで半年間の間、作戦の準備の為に暴れられない日々が続いた事を思い出して、三十代の男の部下の一人がぼやくと隣にいた別の男が叱り飛ばす。
黒竜盗賊団。
世界各地で暴れ回り、その戦力は小国を壊滅させる程だとされる、世界の国々で最も危険視されている盗賊団。それが今ここにいる集団であった。
しかしいくら強大な力を持つ集団とは言え、見境なくただ暴れるだけではいつかは追い詰められてしまうだろう。それを防ぐ為に無精髭を生やした三十代の男、黒竜盗賊団の団長は慎重に時期を伺い計画を立てる事で国からの追跡を振り切り、今日まで黒竜盗賊団の名を世界各地に轟かせてきたのだ。
黒竜盗賊団の団長は、目の前の二人の部下のやり取りを見ていたが

特に叱りもせず、二人の周りにいた他の部下達も苦笑を浮かべるだけであった。「早く思う存分暴れたい」というのはここにいる全員が思っている事であったからだ。
「長い間待たせてすまなかったな。だが作戦が始まったら遠慮は無しだ！　全員、思う存分暴れてこい！」
『おおう！』
　団長の言葉に黒竜盗賊団の面々はそれぞれ声を張り上げる。気合い充分な部下達を見て団長は満足気に頷くと、早速今回の作戦を説明する事にした。
「それじゃあ作戦を簡単に説明するぞ。今回の俺達の狙いはアックア公国の士官学校と大学にいる貴族のガキ共だ。士官学校では全兵科合同の軍事演習とやらをするらしく、教官や護衛の多くがこちらに取られる。そこを狙う」
　そこで団長は一旦言葉を切ると、懐から一枚の手紙を取り出してその内容に目を通しながら作戦の説明を再開した。
「『豚』からの報告によると、俺達の目的である貴族のガキ共は今学園で大人気の『美少女』の取り巻きとなっていて、軍事演習でもその美少女と一緒に一箇所に集まる予定らしい。俺達にしてみれば格好のカモだよな？」
　手紙を見ながら口元に呆れたような笑みを浮かべながら作戦を説明する団長であったが、それを聞いていた黒竜盗賊団の面々も似たような表情を浮かべていた。
「何と言うかそれは……。その『美少女』の魅力が凄いのか、貴族のガキ共が馬鹿すぎるのか分かりませんね。まぁ、その分俺達は仕事がやり易くていいですが」
　そう言ったのは、団員をいくつかの部隊に分けて行動する時に、その部隊のいくつかを指揮する部隊長役の男であった。部隊長の男の言葉に団長が頷く。
「ああ、全くだな。貴族なんてのにはロクな奴がいない。奴らは何の力も無いくせに下の者から税金だの何だの奪い取っていく、俺達以下の寄生虫だ。だから俺達は貴族の奴らから楽に、それでいて派手に稼

がせてもらうんだよ」
「俺も貴族の奴らは嫌いですけど、団長の貴族嫌いは相変わらずですね」
　団長の言葉に部隊長の男が苦笑する。団長が今言った通り、黒竜盗賊団の主な対象は各国の貴族であり、それもまた黒竜盗賊団の名が各国に知れ渡っている要因であった。
「そう言えば以前報告にあったゴーレムトルーパーの操縦士はどうするんですかい？　確かフランメ王国からの留学生で、その軍事演習にも参加するんですよね？」
『『……！』』
　部隊長の男が団長に質問すると、それを聞いていた黒竜盗賊団の団員達の表情に緊張が走る。もしゴーレムトルーパーと出会ったりしたら自分達では万が一の勝機も無い上に、ゴーレムトルーパーがなかったとしても、その操縦士が厄介極まりない存在である事はここにいる全員よく知っていた。
「安心しろ。『豚』からの報告では学園の何処にもゴーレムトルーパーの姿はなく、軍事演習で使われるような予定はないとある。……まぁ、当然だわな。そしてその操縦士も『美少女』サマと貴族のガキ共の一団とは離れた場所にいるみたいだし、お前らがもたつかなかったら戦わずにすむだろうよ」
　団長がそう言うと、団員達は明らかに安堵した表情となる。だが団長はそんな団員達をよそに手紙を見ながら呟く。
「それにしてもフランメ王国の留学生……フランメ王国か。俺もよくよくあの国と縁があるものだな」
「団長？　そう言えば団長って昔はフランメ王国の軍人でしたっけ？」
　一人だけ団長の呟きを聞いていた部隊長の男が聞くと、団長は忌々しそうな表情となって頷く。
「ああ、あの頃は本当に最悪だったぜ……。クライドっていうクソ貴族に散々こき使われた挙句、無茶な作戦に付き合わされて何度死ぬかと思ったことか……。あの時のお陰でこの黒竜盗賊団を作り上げる

力を得たとは言え、あの時の事は思い出したくもないぜ……」
そう言ってから黒竜盗賊団の団長は自分の背後にある巨大な影を見上げるのであった。

平原までの道中

早いものでサイ達がアックア公国の士官学校に留学してから半年の時が経ち、今アックア公国の士官学校では全兵科合同の軍事演習が行われていた。

この軍事演習で生徒達は敵対する二つの勢力という設定で二つに分かれて模擬戦を行い、それぞれ自分達の役割をどれだけ適確に行うことができるかを競い合う。

そして軍事演習の様子は教官達が観察していて、特に優秀な生徒は士官学校だけでなく軍の方にも報告されて、卒業後の軍での生活に大きな影響が出る。その為、今軍事演習を行う平原に向かっている学生達のほとんどは緊張した表情をしているのだが、中には全く緊張していない者達もいた。

「マスター、軍事演習頑張ってくださいね♪」

「私もピオンもマスター殿のお手伝いをさせていただきます」

軍事演習を行う平原に向かう道中でピオンがサイの右腕に、ヴィヴィアンが左腕に抱きつきながら自分達の主人である青年に話しかける。そしてサイはというと、いつもだったら両腕から伝わってくる二人の巨乳の感触に感動しているのだが、今は引きつった顔をしていた。

「えっと……？　ピオン？　ヴィヴィアン？　気持ちは嬉しいし、腕も気持ちいいんだけど今だけは離れてほしいな……なんて……」

そう言ってサイが周囲を見回すと、他の学生達が鋭い視線をサイ達に向けており、中には明らかに舌打ちする者達もいた。彼らの視線はこう語っている。つまり「こんな時までもイチャついているんじゃねぇよ、このハーレム野郎」と。

だが学生達がサイにその様な視線を向けるのも仕方がないと言える。

何しろ学生達は軍事演習で使うための重たい荷物を背負って移動しているのに対して、サイは「倉庫」の異能で荷物を異空間に収納して手ぶら。しかも両隣にはピオンにヴィヴィアンという絶世の美少

女がそれぞれ右腕と左腕に抱きついて密着している両手に花状態。
何と言うか、見ていると真面目に軍事演習に取り組もうとしているのが馬鹿らしくなってくる姿である。
周囲の学生達からの視線にさらされて、まるで針のむしろの中にいる気分のサイの言葉に、ピオンとヴィヴィアンが首を傾げる。
「マスター、どうしたのですか？　いきなりそんなマスターらしくない事を言い出して？　もしかして緊張しているのですか？　でしたら……えい♪」
「はい」
むにゅん♪　むにゅん♪
「おおう!?」
『……!』
ピオンとヴィヴィアンの二人は自分達の主人の両腕により強く抱きつき乳房を押し付けて、サイは両腕からより明確に伝わってくる二人の巨乳の柔らかさに体を震わせる。そしてそれと同時に周囲の学生達が一瞬驚きで目を見開いた後、すぐにより強い視線をサイ達に向ける。
「どうですか、マスター。緊張はほぐれましたか？」
「私達の胸がマスター殿のお役に立ったのでしたら私も嬉しいです」
「うん♪　ピオンもヴィヴィアンもありがとう。お陰で緊張とか不安とか色々吹き飛んだよ。それじゃあ行こうか」
「はい！」
ピオンとヴィヴィアンの胸の感触に、サイは先程までの引きつった顔から満面の笑みになると足取り軽く先を進み、二人のホムンクルスの少女も自分達の主人が元気になった事に喜び、彼の腕に密着した状態でついて行く。
もはや周囲の学生達がサイ達に向ける視線は氷の様に冷たく殺意を感じさせるのだが、両腕からピオンとヴィヴィアンの温かくも柔らかい胸の感触を感じているｓａ……巨乳好きな馬鹿には何の効果もなかった。
こういう時、巨乳好きな馬鹿は無敵である。

ちなみにこの時、周囲の学生達の中で最も強く怨念のこもった視線を送っていたボインスキーは、ハンカチを噛み締めながら血の涙を流しており、周囲からドン引きされていた。

夜営地での夜

士官学校の学生達が軍事演習を行う平原に着いたのはその日の夕方、日が暮れ始めた頃であった。

軍事演習は翌日に行う予定で、学生達は野営をする準備に取りかかる。この野営の準備にどれくらいの時間がかかるのかも教官達の評価対象であり、学生達は皆真剣に自分達の今夜の寝床になるテントを組み立てていく。

「マスター、これをどうぞ。白湯ですけど暖まりますよ」

「マスター殿、これもどうぞ。夜は冷えますのでお体を冷やさぬよう」

「ありがとう。ピオン、ヴィヴィアン」

学生達の大半が自分達のテントを組み立てている中、すでにテントを組み終えたサイがピオンとヴィヴィアンから白湯が入ったコップと毛布を受け取る。「倉庫」の異能で必要な荷物だけを異空間から取り出す事が出来て、山奥のイーノ村で生まれ育って何度も山で野宿をした経験がある彼にしてみれば、テントの組み立てなど大した手間ではなかった。

テントの組み立てが終わって野営の準備が整うと、そこから今日は自由時間となる。サイが受け取った毛布を羽織り白湯を飲みながらピオンとヴィヴィアンと話をしていると、そこにテントの組み立てを終えたビークポッドがやって来た。

「もうテントを組み終えるとは作業が速いな」

「そう言うビークポッドも手際がいいじゃないか。他にはまだ組み立てている奴がいるのに」

「なに、俺は幼少の頃から親父殿に何度もキャンプに連れて行かれてな。そのお陰だ。それにしても……」

ビークポッドは少し自慢するようにサイに答えると、そこで周囲を見回してから呟いた。

「何と言うか、全員の表情が暗いな」

ビークポッドの言う通り、周囲の学生達のほとんどは真剣ではあるものの、どこか落ち込んでいるような暗い表情をしていて、それも

あってテントを組み立てる作業の手が遅くなっていた。
「言われてみれば確かに……。一体どうしたんだ？」
「そんなの決まっているじゃないですか？　あの女、エレナと一緒のチームになれなかったから落ち込んでいるのですよ」
「あの女は今や士官学校、大学の両方で一番人気がありますからね」
　サイの疑問にピオンとヴィヴィアンが答える。学生達はすでに明日の軍事演習で二つの陣営のどちらにつくかを教官に指示されており、サイ達とビークポッドは同じ陣営で、エレナはもう一つの陣営につく事が決まっていた。
　エレナは士官学校に入学してから今日まで着実に士官学校と大学の関係者達を魅了していき、今では士官学校と大学の学生達だけでなく、学園の教師や用務員といった学生以外の学園の関係者も多数彼女に魅了されていた。ここで落ち込んだ表情をしている学生達は皆、エレナに魅了されて明日の軍事演習で彼女と同じ陣営になれなかった者達であった。
　ちなみにサイ達は、三ヶ月前に一度顔を合わせてからエレナとその取り巻き達と会っていなかった。どうやら初めて会った時のピオンとの会話がよほどこたえたようで、エレナの方からサイ達を避けているらしい。
　サイもエレナ達の元で、婚約者を魅了された貴族令嬢がエレナの元に直談判する等の騒動が頻繁に起きているのを知っている為、彼女に近づきたいとは思わなかった。そう考えるとエレナを挑発して彼女にこちらへの悪感情を植え付けたピオンには感謝するしかないサイだった。
「まったく……。皆、何であんなエレナみたいな女に熱狂できるのか俺には理解できん。巨乳ではなく貧乳なのに」
「俺もだ。巨乳じゃない貧乳のエレナにそこまでの魅力なんてあるのか？」
「巨乳ではなく貧乳なのに」
「巨乳じゃない貧乳なのに」
　ここにはいないエレナに対して貧乳と連呼するサイとビークポッ

ド……ではなく巨乳好きな馬鹿一号と二号。もし彼女がこの会話を聞いていたら鬼の顔になって二人に剣で斬りかかっていただろう。
「しかし……エレナに婚約者であるアルベロ様を取られてしまっては、ブリジッタ様もさぞや落ち込んでいるだろう。サイ？　お前よくブリジッタ様と話しているんだろう？　ブリジッタ様の様子はどうであった？」
「ああ、それならブリジッタは特に気にしていないみたいだ」
結局アルベロは実家からも注意を受けたみたいだが、エレナの魅了から目が醒める事なく婚約者であるはずのブリジッタを蔑ろにして、ついに先月本人は知っているかは知らないがブリジッタとの婚約を解消された。そしてこの婚約解消の話はもう一人の当事者であるブリジッタにもいったのだが、彼女はそれに対して全く動揺を見せてはいなかった。
元々アルベロとの婚約は家同士で決めたものだし、ブリジッタとしては前文明の研究の方が婚約よりも大切であったから、婚約者がエレナに心移りしたのを知った時も彼女は他の婚約者を取られた貴族令嬢とは違って特に何も思わなかったそうだ。
「そ、そうなのか？」
サイの話を聞いてビークポッドは若干困惑した表情となる。
「そうだよ。別に意地を張っているとかじゃなくて、あれは本当にアルベロへの興味がないって顔だったな」
学園の図書館で婚約解消の話をするブリジッタの顔を思い出しながらサイは言う。あの時の彼女は、まるで他人事のようにアルベロとの婚約解消の事をサイ達に話していた。
「そうか……。では何故、ヒルデさんとローゼさんをブリジッタ様の側につけたんだ？　俺はてっきり傷心のブリジッタ様の話し相手にしたのだとばかり思っていたのだが……？」
サイに質問をするビークポッドの言う通り、ヒルデとローゼは今ここにはおらず、自分達の主人である青年の命令で大学にいるブリジッタの側にいた。それを知ったビークポッドは最初、婚約解消の件で傷心中のブリジッタの気を紛らわせる為に、サイがヒルデとローゼを彼

女の話し相手としてつけたと思っていたのだがどうやら違うようだ。
「話し相手って点は間違っていないぞ？　ブリジッタはヒルデとローゼが知っている前文明の話に興味があるからな。だけど俺が二人をつけた理由は……」
「……！」
サイがそこまで言った時、突然ピオンとヴィヴィアンが同時に立ち上がり、二人とも同じ方向に視線を向ける。この時の二人のホムンクルスの少女はとても真剣な表情をしており、サイもビークポッドも何事かと二人を見る。
「マスター。そのヒルデとローゼの件ですけど、少しお話があります」
ピオンとヴィヴィアンが真剣な表情のままサイ達の方に振り返ると、ピオンがサイに向かって口を開いた。

名乗りを上げる男

深夜。士官学校の学生達の全てがテントを組み終えて、携帯食料の夕食も済ませて寝静まった頃、学生達のテントが集まっている場所から離れた所に六人の男女の姿があった。

騎兵科に所属している女学生エレナ・キャンダルと、アルベロを初めとする彼女の取り巻きの男子生徒五人である。

ここにいる五人の男子生徒は士官学校に在籍している男子生徒の中でも特に、容姿が優れている上に成績も良く、それに何より実家がアックア公国でも有数の大貴族や資産家だったりする裕福な家の出身であった。だからエレナは士官学校に入学するとすぐに、彼らを婚約者などお構い無しに誘惑して自分の虜にし、取り巻きとして常に自分の側に侍らせていた。

「皆さん。こんな夜遅くに呼び出してしまって申し訳ありません。ですが、どうしても急ぎの用事ができてしまって……」

エレナがすまなさそうな顔をしてアルベロを初めとする五人の男子生徒達に向けて頭を下げる。

アルベロ達五人の男子生徒はエレナによってここに呼び出されていた。「幸運」にも六人とも明日の軍事演習では同じ陣営で、テントを組み立てる場所も近かった為、教官の目を盗んで約束を取り付けるのはそれ程難しくはなかった。

「気にすることはない。エレナ、君が呼べば私は、私達はいつでも駆けつけるよ」

「そうそう。僕達とエレナの仲じゃん？　変な事は気にしなくていいよ」

アルベロが正に貴公子といった爽やかな笑顔を浮かべてエレナに言うと、伯爵家の次男が人懐っこい笑顔でそれに続く。

「ありがとうございます。……それでその、皆さんにお願いがあるのですが……」

「俺達にお願い？」

「俺に出来る事なら何でもやろう」

エレナの言葉にアルベロの実家と同じ派閥にある軍属貴族の男爵家の長男が首を傾げ、同じく軍属貴族の子爵家の三男が即答する。子爵家の三男がエレナの頼みを聞くと言うと、他の四人も彼女の気を引く為に自分達も頼みを聞くと言い出した。
「ふふっ。皆さん、本当にありがとうございます。それでは……」
アルベロ達五人の取り巻きがエレナの頼みを聞いてくれると言うと、彼女は嬉しそうな笑顔を浮かべて見せて、そしてその後……。
「全員、私達に捕まってくれませんか？」
と、取り巻きの五人……いいや、五人の「獲物」に向かって自分の「お願い」を口にするのだった。
「……え？　エレナさん？　今のはどういう意味ですか？」
エレナの言葉の意味が分からずアルベロ達は全員言葉を失い、最初に回復した五人の取り巻きの中で唯一貴族ではないがアックア公国で有数の商会の会長の次男である青年が、目の前にいる自分達の憧れであった女性に質問する。その問いに対してエレナは、いつものように皆を魅了する笑顔を浮かべて答えるのだが、今のアルベロ達は彼女の笑顔に背筋が寒くなる薄気味悪さしか感じられなかった。
「どう言う意味もそのままの意味ですよ。貴方達には私達『黒竜盗賊団』の人質になってもらいます」
エレナがそう言うと、いつの間にか十人程の手に剣を持って武装した男達が、アルベロ達五人を取り囲む形で現れた。アルベロ達は自分達が囲まれた事実と、今エレナが口にした言葉に顔を青くする。
「こ、黒竜盗賊団……？　エレナ、君が？　わ、私達を騙していたのか？」
先程まで貴公子に相応しい爽やかな笑顔を浮かべていたとは思えないくらい恐怖で引きつった顔をするアルベロを見て、彼らを取り囲む男達は馬鹿にするような笑みを浮かべ、エレナもまた面白いものを見たような笑顔でアルベロの言葉に答える。
「ええ、簡単に言えばそうです。本当の予定だったら計画の実行は明

日の軍事演習の最中で、私も貴方達と一緒に拐われるフリをするはずだったのですよ？　でも予定外の人物のせいで計画が一部変更になって……」

「成る程。その予定外の人物とは俺の友人の事で間違いなさそうだな」

絶望に染まったアルベロ達の表情から既にこの場の勝利を確信したのか、自分の知る計画の内容を自慢気に語るエレナの言葉を一人の男の声が遮った。

「っ!?　誰！」

エレナ達が声がしてきた方を見ると、そこには士官学校の制服を着た一人の男子生徒の姿があった。

その男子生徒は身長が二メートル近くあり筋骨隆々の逞しい体格を持つ生徒だった。禿頭で目つきが鋭い悪人顔で、制服を着ていなければ士官学校の生徒には見えず、よくて歴戦の傭兵悪くて山賊団の頭領といった印象である。更に手には自分の肩まで届く大剣が握られていて、彼から感じる威圧感を倍増している。

エレナやアルベロ達は突然現れた男子生徒の事を知っていた。彼は士官学校で「あの」サイ・リューランと最も、あるいは唯一仲が良い男子生徒で、自分達も前に一度会話をした事があった。

「あ、貴方は……!?」

エレナは男子生徒の名前を言おうとするが、突然の事でとっさに名前が出てこず、それを見た男子生徒が鼻を鳴らす。

「ふん。前に一度名乗ったのだがもう忘れたか？　まあいい。特別にもう一度だけ名乗ってやろう。俺の名はビークポッド」

男子生徒、ビークポッドはそう言うと手に持った大剣を夜空に掲げて名乗り出す。……ちなみにこの時、大剣の刃ではなく、彼の頭が月の光を反射して「キラリ！」と光ったのはご愛嬌。

「ボインスキー子爵家嫡男、ビークポッド・ボインスキーだ」

その男の実力

「……それで？　そのビークポッド君がどうしてこんな所にいるのかな？」

ビークポッドの名乗りを聞いてようやく目の前の男子生徒の名前を思い出したエレナは、忌々しそうな目を彼に向ける。

「なに、この近くに賊らしき不審な者達が現れたという話を聞いてな。万が一の為にこうして夜の見回りをしていたんだよ」

エレナの質問にビークポッドは肩をすくめて答える。ただしその目は鋭く、彼女とアルベロ達を取り囲んでいる黒竜盗賊団のメンバーに向けられていた。

「そう。それはご苦労様。で？　貴方の予測通り、ここにその賊らしき不審な者達がいる訳だけど、貴方一人でどうするつもり？」

ビークポッドにすでに勝ち誇ったような笑みを向けるエレナ。

一人しかいないビークポッドに対して、エレナの方には黒竜盗賊団のメンバーが十人程ついていおり、更にはアルベロ達五人の人質がいる。その為彼女は自分の優位を信じて疑わなかったのだが、ビークポッドはそんなエレナをつまらないものを見る目で見ながら口を開く。

「一人？　馬鹿か、お前は？　賊がいるかもしれないと分かっていて、一人で来るわけがないだろ？」

「……え？」

ビークポッドの言葉にエレナの口から間の抜けた声が出たのと同時に、周囲から複数の銃声が聞こえてきた。

「ぐわっ！」

「ぎゃあ!?」

銃声が聞こえてきたと思ったら、黒竜盗賊団のメンバーの数名が肩や脚を抑えてうずくまる。

「銃撃!?　一体何処から！」

自分の仲間である黒竜盗賊団のメンバーが撃たれたのを見てエレナが周囲を見回すと、こちらに向けて銃を構えている数名の士官学校

の教官達の姿があった。
士官学校の教官達はビークポッドと一緒にこの場に来ていたが今まで物陰に身を隠しており、エレナ達が彼の会話に気をとられている時に発砲したのだった。
「教官達がどうしてここに……!?」
「応援を頼んだからに決まっているだろ？　教官達は今みたいな時に学生達を護ることも仕事だからな」
驚愕の表情を浮かべるエレナにビークポッドが当然のように言う。そんな彼の余裕綽々な態度に、銃で撃たれていない黒竜盗賊団のメンバーの一人が激昂して腰に差してある剣を抜いた。
「このハゲ！　調子にのってんじゃねぇ！」
剣を抜いた黒竜盗賊団のメンバーは「超人化」の異能の使い手だったらしく、異能で身体能力を強化すると一瞬でビークポッドとの距離をつめ、目にも止まらぬ剣速で剣を彼の脳天にめがけて振り下ろした。
「ふん」
しかし「超人化」の異能の使い手はビークポッドも同じであり、彼は手に持っている大剣で黒竜盗賊団のメンバーの剣をあっさりと受け止めると、二本の剣の間で火花が散った。
「何っ!?　クソッ！」
自分の剣を防がれた黒竜盗賊団のメンバーは一瞬驚いた顔をした後、すぐに二度三度と剣を振るうがそれもビークポッドの大剣に受け止められてしまう。
そこから繰り広げられるのは「超人化」の異能を持つ剣士同士の、常人の目では決して追いきれない高速の剣の振るい合い。離れた場所から見ていたエレナには、ビークポッドの回りを黒い風と化した黒竜盗賊団のメンバーが舞い、剣と剣がぶつかり合う火花が何度も空中で散っているようにしか見えなかった。
しかし黒竜盗賊団のメンバーの剣はことごとく相手の大剣に防がれて一太刀も届かず、ビークポッドは無傷のまま涼しい顔をしていた。

「はぁ……！　はぁ……！　な、何でだ？　何でこんなハゲの学生ごときに俺が……！」
何度も剣を振るってもビークポッドに一太刀も浴びせることができなかった黒竜盗賊団のメンバーが荒い息を吐きながら憎々しげに言うと、ビークポッドが呆れたような顔で口を開いた。
「なぁ、お前？　何故こんな危険な所に学生の俺がいるか疑問に思わなかったのか？　俺がこの戦場に立っても大丈夫だと、お前達賊を退治する戦力になると教官達に認められたとは思わないのか？」
実際のところ、この黒竜盗賊団のメンバーの力量は決して弱くはない。だがビークポッドはアックア公国で有名な剣の名手の一族、ボインスキー子爵家の生まれで、幼少の頃より一族から剣の英才教育を受けてきた。
更に異能にはそれぞれ一番上の「A」から一番下の「G」までの七つのランクがあり、ビークポッドの「超人化」の異能のランクは上から三番目の「C」。これは白兵戦を重視する槍兵科や騎兵科の軍人でも滅多にいない。
それに対して黒竜盗賊団のメンバーは、剣の筋はあるが所詮我流剣術。柔軟で予想がつかないと言えば聞こえがいいが、決め手が通じなかったり一つペースを乱されると脆い素人剣術。技術の差を身体能力でひっくり返そうにも、黒竜盗賊団のメンバーの「超人化」の異能のランクは「D」か「E」。
剣の腕でも、異能の力でもビークポッドに負けている黒竜盗賊団のメンバーには勝ち目など最初からなかったのである。